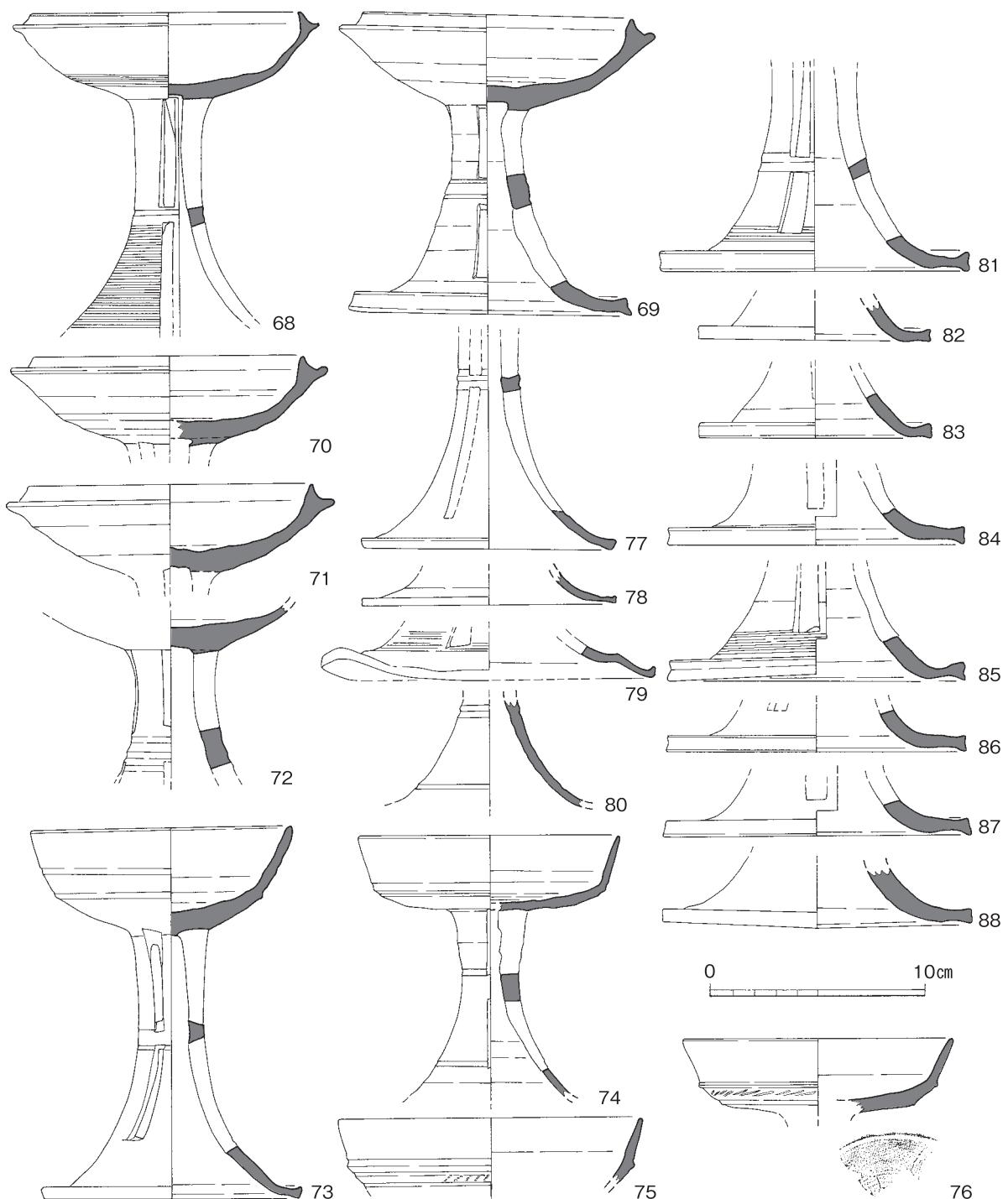
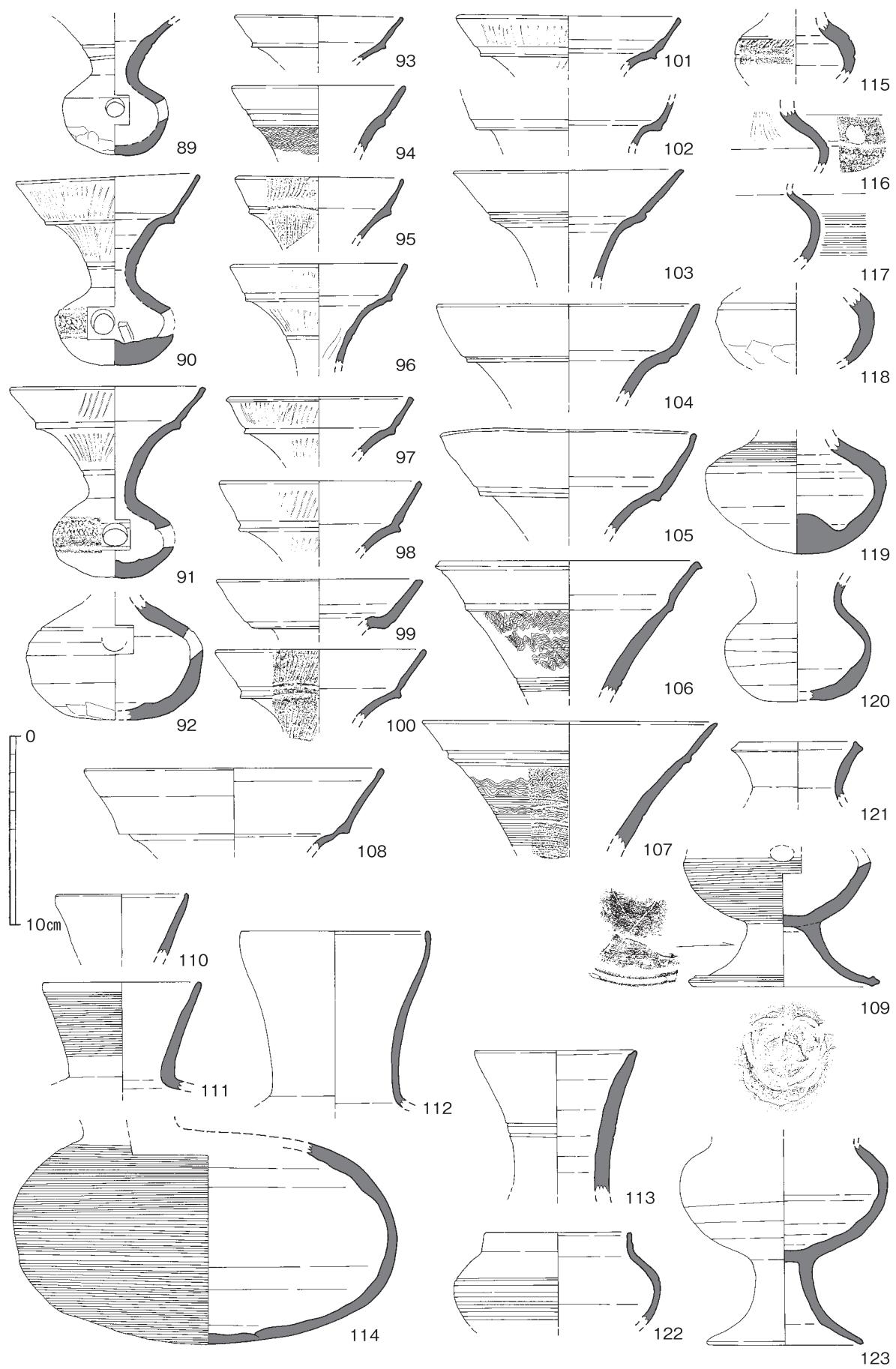


13は外面に自然釉がかかって黒色を呈する。14は外面に凹線を有してガラス質の黒色の釉がかかり、全体に他資料と作りが異なる。断面は小豆色を呈し、蓋であるか否かも不明である。15は天井部に「川」状の籠記号を有する。16は全体に紫色に変色し、内面は自然釉がかかる。18は屈曲部に凹線が廻る。21は図では端部が垂下するが、焼き歪みの可能性がある。22は器高が低く天井部は平坦で、口縁が短いなどやや器形が異質である。23~25は小片。26・27は器壁が薄く端部が外屈し、蓋としたが異なる器形かも知れない。28~30は段を有して口縁が長く垂下するもので、いずれも軟質で白灰色を呈する。31~34は摘みを有する蓋。31は返りを有する壺蓋で、軟質で淡灰色を呈する。32・33は扁平な摘みを有し、器壁が厚く軟質で天井部は籠削りで調整する。34は小さな返りを有し、摘みを有すると考えられる。

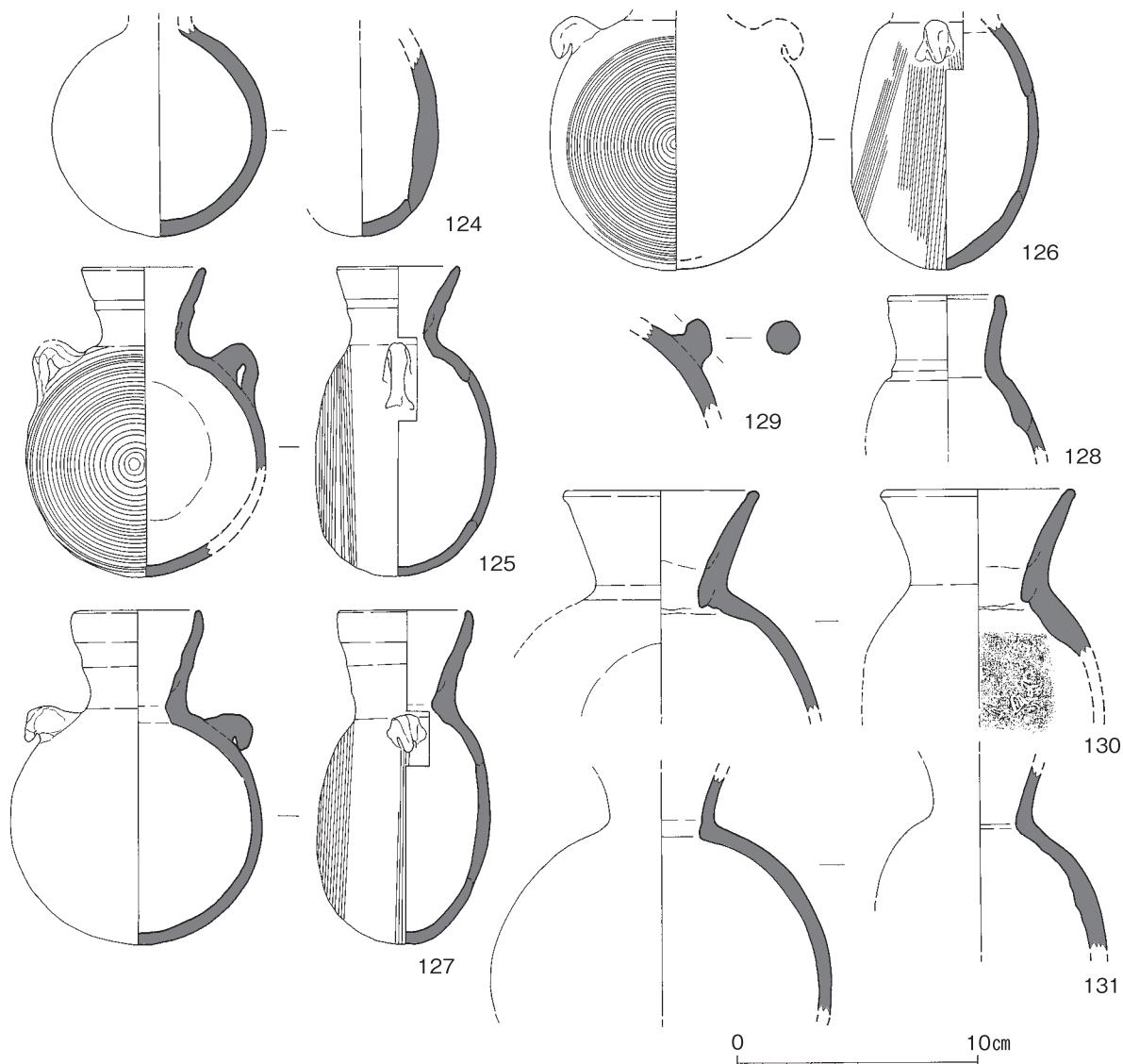


第35図 皿山古墳群 I-1号墳南墳丘集中出土土器実測図3 (1/3)

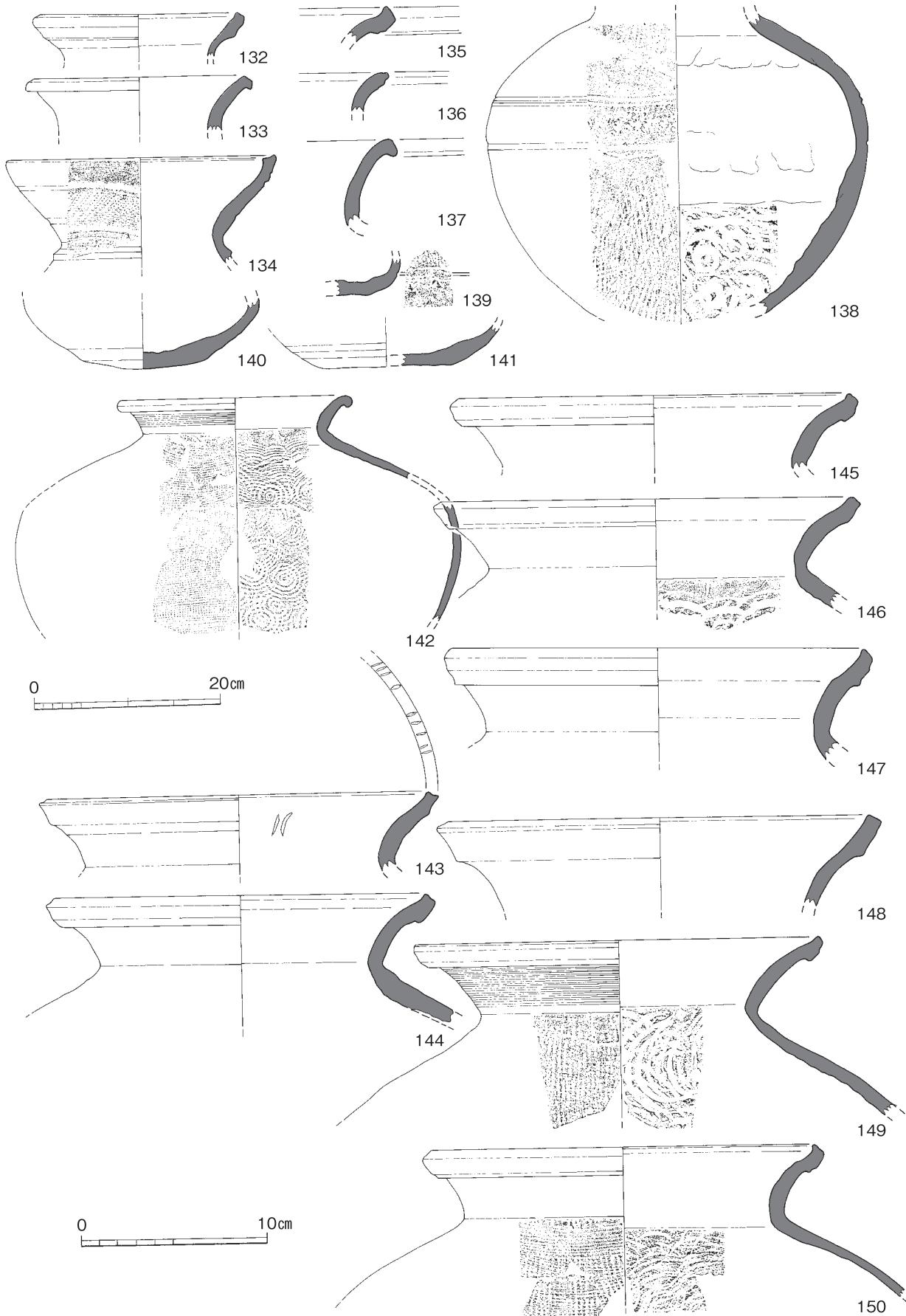


第36図 皿山古墳群 I-1号墳南墳丘裾土器集中部出土土器実測図4 (1/3)

35~67は杯身。35~57と58~67は受部の形状が大きく異なり、前者は硬質の一群、後者は軟質の一群である。口径は11.0~12.9cmと、12.1~14.0cmと後者の方がやや大きい。後者の断面三角の口縁形状は高杯に多く見られ、底部を欠く資料のいくつかは高杯の可能性がある。また、いずれも底部が残るものは概ね回転籠削りが認められるが、前者には一部未調整のものがある。35~37はやや小型で深く、36・37は器壁が厚い。36は黄変して器壁が荒れる。37は外面に線状に自然釉がかかる。38は底部が平坦で、39は全体にガラス質の黒色粒が散り、底部に籠記号がある。40は底部が平坦で削りが粗く、一部未調整である。41は底部が丸みを持ち、内面と受け部が暗い紫に変色し、内底部に1cm径の当て具状の丸いくぼみが複数個認められる。42・43は底部が平坦で、42は44と器形・調整・胎土・焼成が近似し双方の底部に「川」状の籠記号がある。43は器壁が極めて薄く外底部は未調整。45は若干歪むが全体に丸みをもって深く、底部は未調整である。46は極めて浅く扁平で、口縁も長く他資料と比してやや異質である。胎土は砂粒が多く焼成は精緻で、搬入品の可能性もある。47は口縁が強く内傾し、体部は丸みを持つ。外面は一部黒変する。48は黄色に変色し、器壁がボロボロで全体が灰被りである。このように灰被りで器壁が黄変してボロボロになる杯身・蓋が複数個体見受けられる。49・51は極めて器壁が薄く堅緻で、器壁の凹凸が激しい。50は底部を手持ちの籠削りで調整する。52は器壁が厚く体部が丸みを持つ。



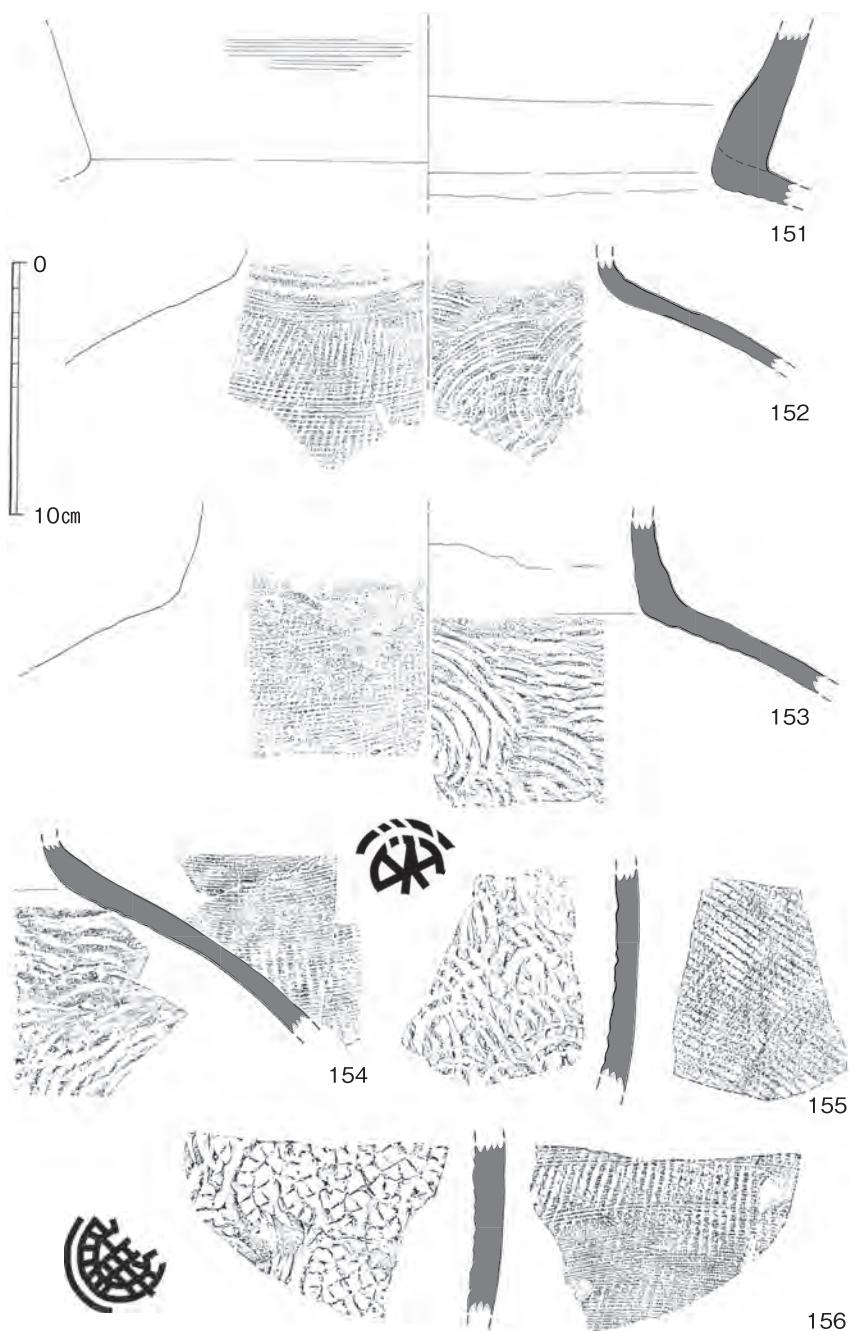
第37図 皿山古墳群 I-1号墳南墳丘埴土器集中部出土土器実測図5 (1/3)



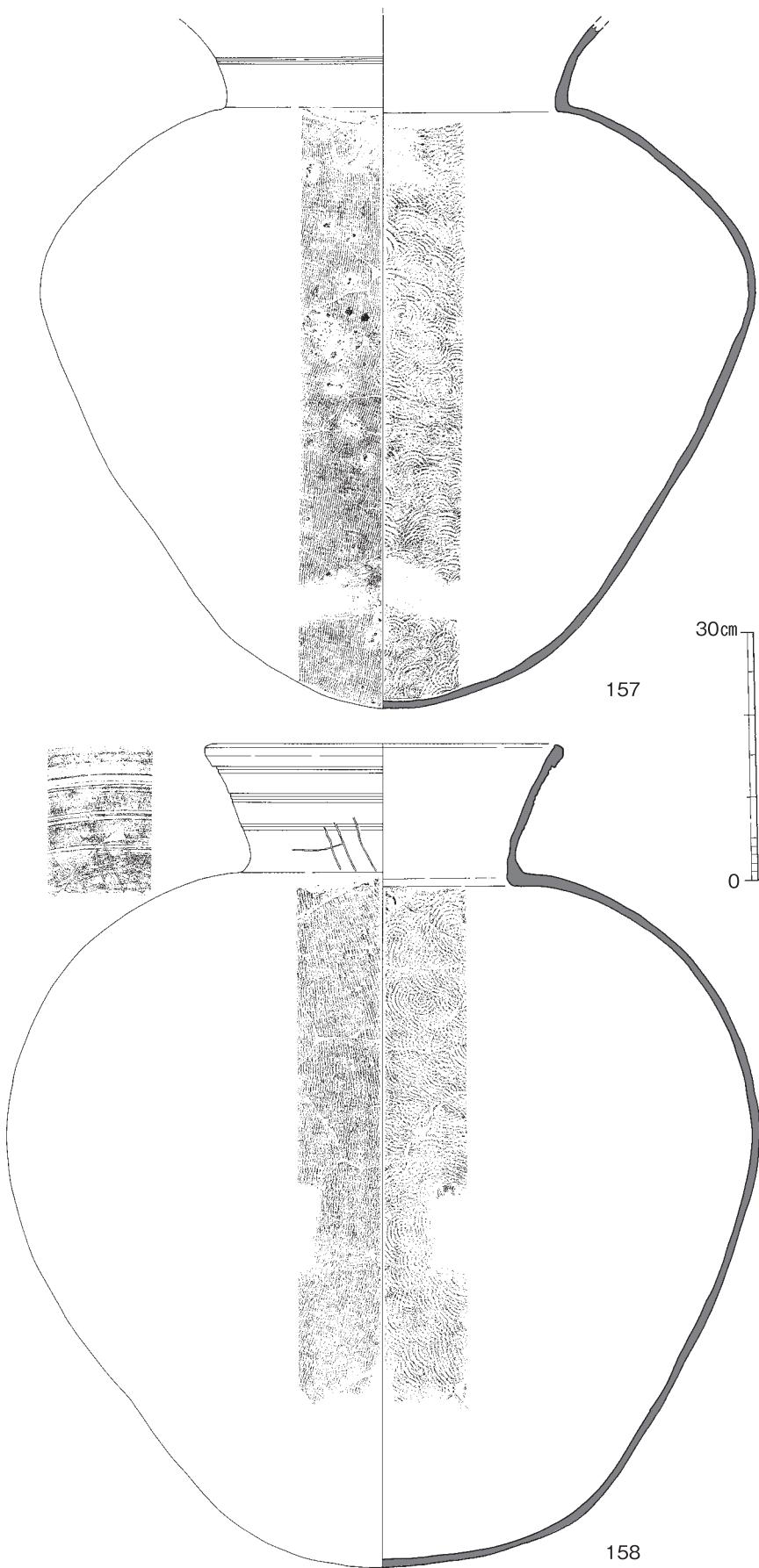
第38図 皿山古墳群 I-1号墳南墳丘裾土器集中部出土土器実測図6 (142は1/6、他は1/3)

53は口縁が短い。54は黄色に変色して器壁がボロボロで、全面が灰被りで内面にはガラス質の黒色粒が散る。55は平底で口縁が長く、35と近似する。56は浅く口縁が断面三角に近いが、硬質の一群。黄変して器壁がボロボロで、全面に釉がかかり内面にはガラス質の黒色粒が散る。57も口縁は長いが底部の器壁が厚い。58~67は口縁が断面三角で受け部が厚く、軟質の一群。58~60は小片で器形も近似し、外面に釉がかかって黒変する。61は口縁がやや薄い。62~66も器形は近似し、62・63は外面が茶変する。67は口縁が極めて短く内面が彎曲する。

68~88は高杯。受け部のあるものとないものがあり、杯身同様、硬質の一群と軟質の一群に分けられる。68~72は受け部のあるもの。68は硬質の一群で、脚部に2段の透かしがあり、杯屈曲部と脚部下位外面にカキ目を施す。外面は黒変し、内面は灰被りで白色を呈する。69~72は軟質の一群で、杯部が浅い。69は脚部に2段×2箇所の透かしを有し、強く屈曲して端部をつまみ出す。70は透かしがあるが数は不明、外面に黒色の釉垂れがある。71は茶色を呈し、断面が橙色で軟質の一群である。72は杯部の大半を欠くが脚部には2段×2箇所の透かしをもち、中位に2条の凹線を廻らせる。73~76は受け部を有さず、屈曲部に突帯を持つ。73は完形に近く、杯部が深く丸みを持つ器形で、軟質の一群である。透かしは3段×3箇所にあり、脚部外面は灰被りで、杯部内面にはガラス質の黒色粒が飛び散る。74~76は硬質の一群である。74は脚部に沈線に近い段と2段の透かしを有する。全体に灰被りで外面は黒変する。75・76は突帯下に斜位の刺突文を廻らせ、76の杯外底部には籠描が僅かに残る。77~88は脚部片。77~79は硬質の一群。77は2段×3箇所に細い透かしを有し、中位に2条と裾付近に1条の凹線を廻らせる。外面は灰被りで部分的に黒色を呈する。78・79は器壁が極めて薄く、79は焼き歪みが激しい。78は端部を跳ね上げ、79は端部付近が屈曲



第39図 墓山古墳群 I-1号墳南墳丘埴土器集中部
出土土器実測図7 (1/3)

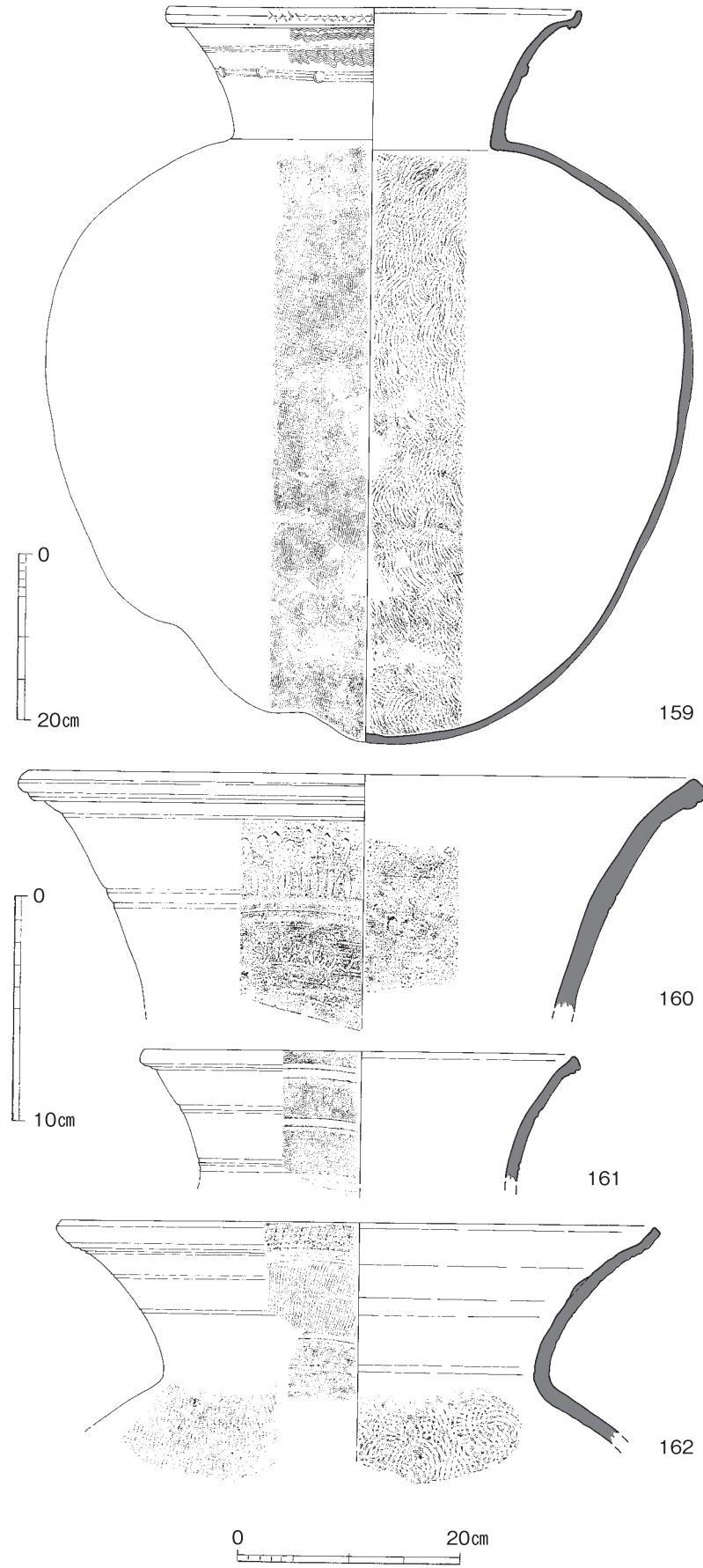


第40図 皿山古墳群 I-1号墳南墳丘裾土器集中部
出土土器実測図8 (1/8)

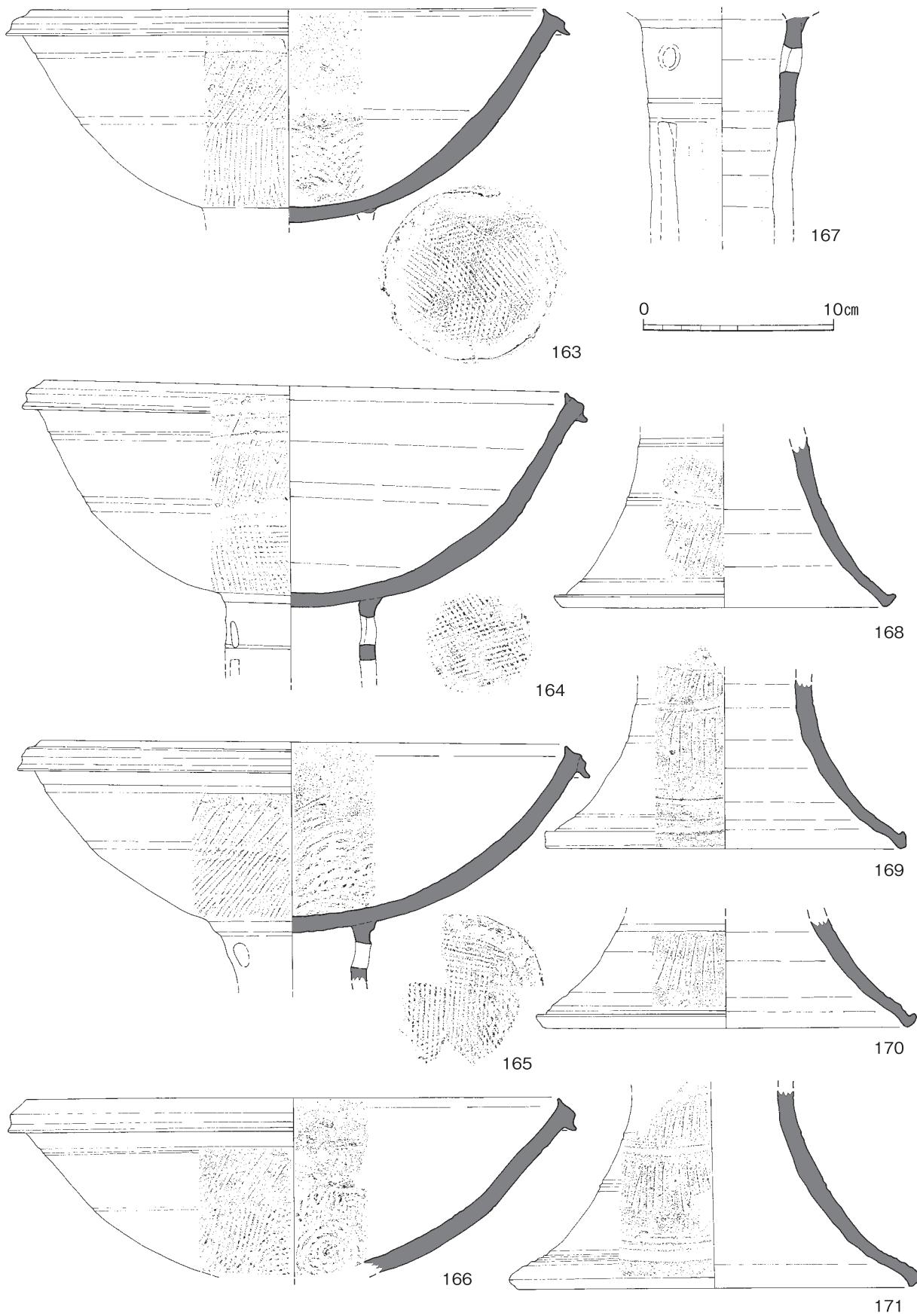
して平坦面をもち、端部は跳ね上げる。中津市伊藤田窯産の可能性がある。80～88は軟質の一群。80は器壁は薄いが軟質のもので、中位に2条、下位に1条の凹線を廻らせる。81～88は端部付近の屈曲が強く平坦面をもち、段部は肥厚させて外側に平坦面をもつ。81は2段×3箇所に透かしを有する。83～87も透かしを有するが数は不明で、85はカキ目を廻らせる。83・87は胎土や器形が近似し、85は外面が黒変する。

98～108は埴。土器集中部では複数器種のミニチュア品が出土している。89～91はミニチュア品で、89は大甕1の中から出土したが、当初から入っていたか転がり落ちたかは不明である。頸部が締まり口縁は大きく開いて頸部に稜を有する。頸部には2条の凹線が廻り、丸い底部は手持ち箇削りで調整する。口縁内部と外面は自然釉がかかる。90・91は体部が扁平なもので、いずれも頸部が締まって口縁が大きく開く。口縁が段を有して突帯を廻らせ、これを境に斜行文を2段施してその下に凹線を廻らせる。底部は平底で器壁は厚く、90は穿孔部の粘土を内部に残したまま焼成している。焼成は良好で、茶灰色を呈する。92は通常の大きさの

体部片で、頸部が強く締まる。底部は平底で手持ち籠削りで調整する。肩部に1条の凹線を廻らせる。やや軟質で茶灰色を呈する。93～108は口縁部片。93～101は小型品で、いずれも器壁が薄く過焼成な程堅緻で、釉がかかって黒茶色または暗茶色を呈する。口縁は大きく開いて段を有し、99以外は突帶を廻らせてその上下に2段の斜行文を廻らせる。96はその下に凹線を廻らせる。93は特に器壁が薄く、堅緻であるが脆弱である。94は突帶下に細かい波状文を廻らせ、全面に灰被りで黒色を呈する。95と100、97と101は形状や器壁の様子などが近似する。102は無文で、段部が強く屈曲して平坦面をもつ。103も無文で口縁端部が薄くなって鋭い稜をもち、堅緻で全面灰被りで黒茶色を呈する。104も無文で器壁がやや厚く軟質で、茶色で全体に丸みを持つ。105は焼き歪みが激しく内面に凹凸が多い。106・107は細かい波状文を廻らせる。いずれも屈曲が弱く、突帶も緩やかである。106は波状文の下に凹線を廻らせる。107はカキ目後に波状文を廻らせており、全体に自然釉がかかって光沢のある黒色を呈する。胎土や焼成も精良で、優品である。108は極めて器壁が薄く軟質で白色を呈し、調査区内で出土した



第41図 皿山古墳群I-1号墳南墳丘埴上器集中部出土土器
実測図9 (159は1/8、160は1/3、他は1/6)



第42図 皿山古墳群 I-1号墳南墳丘裾土器集中部出土土器実測図10 (1/3)

資料の中でもこの1点のみが白色である。109は脚付きの壇で、全面にカキ目を廻らせる。脚は屈曲が強く器壁が薄く、端部は突帯を廻らせる。内底部には丸い当て具痕が認められ、外面は黒変する。

110～113は口縁部片で、提瓶・平瓶・長頸壺になると思われる。110は全面に自然釉がかかり、111は外面にカキ目を廻らせる。112は器壁が薄く大型で、口縁が緩やかに内彎する長頸のもの。外面には薄い灰色の釉が均一にかかり、器壁は滑らかで作りも丁寧である。113は口縁が開くもので2条の沈線を廻らせる。内外面に薄い釉がかかり、内面は釉垂れが見られる。いずれも自然釉と見られるが装飾的に見える。114は平瓶体部。器壁が薄く全体に丸みを持ち、細かいカキ目を廻らせる。他にも横瓶が1点分出土しているが、接合できず図化できない。

115～119は壺型であるが破片のため壇の可能性もある。115・116はミニチュアで形状が近似する。115は2条の沈線の間に斜行文を施し、外面は釉がかかつて黒変する。116は肩部の沈線の下に刺突文を廻らせ、沈線の上に1箇所貫通しない円形の孔がある。内面は絞り痕が残り、器壁は凹凸が激しい。117は器壁が薄くカキ目を廻らせる。119は焼き膨れと歪みが激しく、当初の形状がわからない。肩部に沈線を廻らせその上はカキ目が廻り、外面は自然釉がかかる。120は頸部が太く器壁がやや薄い。底部は平坦で削りで調整する。外面は自然釉がかかり、内面は黒変する。121は口縁部小片で、全面に自然釉がかかる。122は短頸壺で、肩部下にカキ目が廻り、器壁が薄く胎土が精良な優品である。123は脚付き壺で、脚部がやや歪む。壺部内底部を工具による削りで調整し、外面は自然釉がかかつて黒変する。

124～131は提瓶。124～128はミニチュアで、124は特に小さい。全面撫で調整。125は右回りのカキ目が顕著で、被蓋部はあまり膨らまず、把手は輪状を呈する。全面に自然釉がかかり、口縁が一部黒変する。126は右回りのカキ目が全面に廻る。把手は鉤状で平坦部は焼き膨れが多い。127は口縁が長く端部が窄まる。カキ目は右回りで把手は鉤状を呈する。堅緻で全体が明赤褐色を呈し、調査区内出土資料の中でも一点のみである。128の口縁も小型品になるか。口縁は広がらず端部は窄まり、外面は一部黒変する。129は把手部分のみの破片で、外面に自然釉がかかる。130・131は通常の大きさで、130は器壁が厚く野暮ったい作りである。中央部は剥離し、全体に赤みがかる。131は全面撫でで、外面に自然釉がかかる。

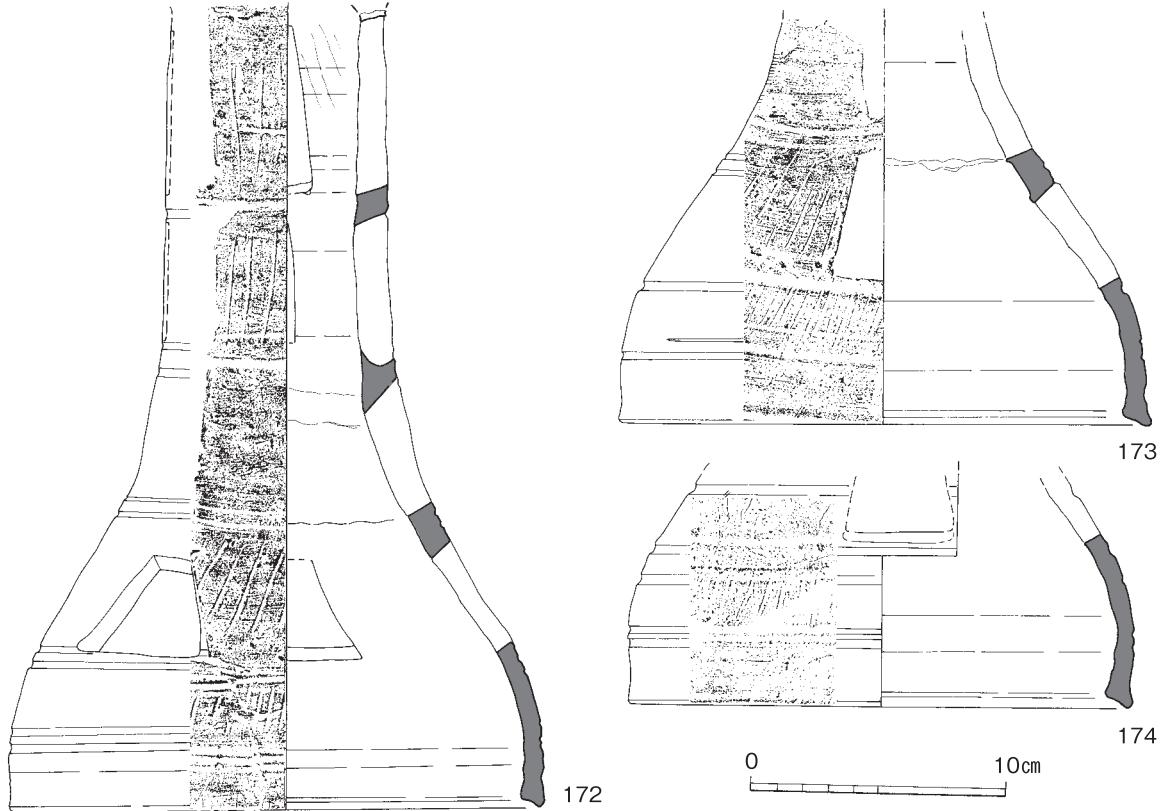
132～141は壺。132・133はやや小型で、132は端部が玉縁状を呈し、胎土は精良で器壁も滑らかで、特徴的である。133は端部を外側に折り曲げる。外面に光沢のある黒色釉がかかり、断面は小豆色を呈して特徴的である。134は口縁が内傾し、頸部に2条の沈線・刺突文・突帯を廻らせる。139・141は平底の体部片。138は球形の体部片で、外面は擬格子叩き後に上位に2条、中位に1条の沈線を廻らせ、その間に斜位の刺突文を廻らせる。蓋底部は一部撫でで叩きを消し、内面には粘土紐の接合痕が顕著で下半に極めて深い同心円が残る。全体に暗茶褐色から赤褐色を呈し、特徴的な様相を呈する。142～162は甕。142は大型で肩が張り、器壁が薄く堅緻である。口縁が短く口径も小さく、端部を折り曲げる。外面は擬格子叩き後部分的にカキ目を廻らせ、頸部にも廻る。内面の同心円はシャープで深く特徴的である。外面が灰被りで白色を呈し、内面は体部が茶色、口縁部が光沢のある黒色を呈する。内面は焼き膨れが多い。過焼成の感がある。143～148は口縁部片。いずれも端部を肥厚させる。143は端部にキザミが認められるが全周はしない。内面には籠記号が認められる。144はやや軟質で端部が玉縁状になり、外面には擬格子叩きが、内面には同心円が残る。145もやや軟質で、端部は丸い玉縁状で稜が明瞭である。146も軟質で玉縁の形状も緩やか、内面に同心円が残る。147は端部が嘴状に尖り、頸部は緩やかに屈曲する。頸部内外面はカキ目状の工

具痕があり、粘土の継ぎ目が顕著である。外面と口縁部は灰被りで黒変する。148は土師器様に軟質で灰茶色を呈し、端部が帯状の玉縁になる。149は145と似た口縁で、頸部にカキ目が廻る。外面は擬格子叩き、内面は大きめの同心円が残る。内外面が黒変する。150は147と同様嘴状の端部となり、外面は玉縁の下に突帶が廻る。外面は擬格子叩き後にカキ目を廻らせ、内面は細く大きな特徴的な同心円が残る。外面と口縁内面に自然釉がかかる。151～162は大型のもの。151は頸部のみの破片であるが、器壁が極めて厚く口径も大きくなると思われる。外面は自然釉がかかつて一部黒変し、内面は細く大きな同心円が残る。152は器壁が薄く頸部が締まるもので、外面は擬格子叩き後カキ目を廻らせ、内面は細く大きくシャープな同心円が残る。153は頸部が直口するもので、内面に粘土の継ぎ目が顕著である。外面は擬格子叩き後カキ目を廻らせ、内面は大きな同心円が残り灰被りで白色を呈し、断面は黒色を呈する。154は肩部小片で、152と似るが厚さが異なり、外面は擬格子叩きとカキ目、内面は同心円が残る。155・156は体部小片であるが、車輪文の當て具痕を持つため掲載した。^{註1} いずれも直線を組み合わせた放射状文で、155は車輪文の當て具で、156は車輪文を更に分割して花状になる形態のもの。

157～159は墳丘上に底部が原位置を維持したままで出土した大甕である。第29図大甕1～3の順に並ぶ。157は口縁端部を欠くが頸部は大きく彎曲し、頸部は締まって体部上位が大きく張る。外面は擬格子叩き、内面には同心円が残るが、外面及び口縁部内面の釉垂れが激しく、黒色ガラス質の自然釉が上半部を中心大量に付着する。また内底部にも黒色釉が垂れて溜まっており、外面中位から底部にかけては一部黒変して全体に灰被りである。灰色を呈し、焼き締まりがよい。158は長い頸部が直線的に立ち上がり、口縁端部を玉縁状に作る。頸部外面には3～5の不規則な凹線を廻らせる。体部外面は擬格子叩きで、内面に同心円が残る。頸部には撫での後に太い沈線が5条廻らされる。底部はやや平底である。全体にやや軟質で淡灰色を呈し、特に下半部は焼成が甘く黄灰色で、断面が橙色を呈する。灰被りや自然釉は認められない。159は頸部が強く外反して口縁は立ち上がり、端部は折り曲げて玉縁状にする。玉縁部外面には「×」の線刻を廻らせ、頸部には2段の細かい波状文→凹線→波状文→2条の凹線の順で廻らせ、2条の凹線の上には規則的に直径1.5cmほどの珠文を配する。外面は擬格子叩き、内面は同心円が残る。底部は歪みが激しく、一部変形して器壁が他所の半分程度に薄くなっている。また内外とも黒変が激しく、過焼成の感がある。口縁部から頸部にかけては内外面共にガラス質の黒色釉がかかる光沢をもち、体部も上半は黒変する。

160～162は大型で口縁が開くもの。160は小さめで口縁端部に2条の突帶が廻る。中位にはカキ目後に2条の沈線を廻らせ、それを境に上下に波状文を廻らせる。波状文はいずれも粗く、上段は太く下段は細い。内面には同心円當て具痕が僅かに認められる。内外面ともに灰被りで、内面は白色、外面は黒茶色を呈する。161も同様の文様構成であるが、大型で口縁端部が屈曲する。波状文は細かく丁寧で、上段は1条、下段は2条一単位で描かれる。外面は黒色を呈し、一部自然釉がかかる。162は口縁が肥厚せず内屈し、文様構成は複雑である。口縁端部平坦面には刺突文を廻らせ、頸部までは3条の凹線を廻らせてその間に刷毛目状の斜行文を廻らせ、真ん中に沈線を入れて二分割する。体部外面は擬格子叩き、内面は同心円が残る。全体に堅緻で過焼成の感があり、黒茶色を呈して一部焼き膨れが認められる。

163～174は器台で、硬質な164～171と軟質の172～174に分かれる。163～166は杯部である。いずれも体部に丸みをもち、傘状の口縁端部を有する。外面には2条の沈線を廻らせ、その間に斜



第43図 皿山古墳群 I-1号墳南墳丘裾土器集中部出土土器実測図11 (1/3)

行文または斜行文状の波状文を配し、底部は細かい格子の叩きが残る。内面は各円がギザギザになる特徴的な同心円の当て具が残り、上半部を撫で消す。形状や文様構成が近似するが、斜行文の間隔や施文方法、端部の形状が少しずつ異なる。164・165は脚部が残り、それぞれ3箇所と2箇所の穿孔が認められる。164は内底部に円形の変色が認められ、重ね焼きの痕跡であろう。167以外は黒灰色を、167は淡灰色を呈する。167は脚部のみが残存する。いずれかの杯部と組み合うと思われるが接合しない。上位に3箇所の穿孔があり、2条の沈線、その下に穿孔と同じ箇所に透かしがあり縦位の櫛描文が施される。168～171は脚部下位の破片。杯部同様、沈線と斜行文または波状文のセットで施文される。168～170は端部を外に跳ね上げ、171は内屈させる。168は淡灰色を呈し、その他は外面が黒茶色、内面は自然釉がかかり黄色を呈し、168・169は断面が小豆色を呈する。施文方法、色調から考えると、165と168、164と171がセットの可能性が高い。

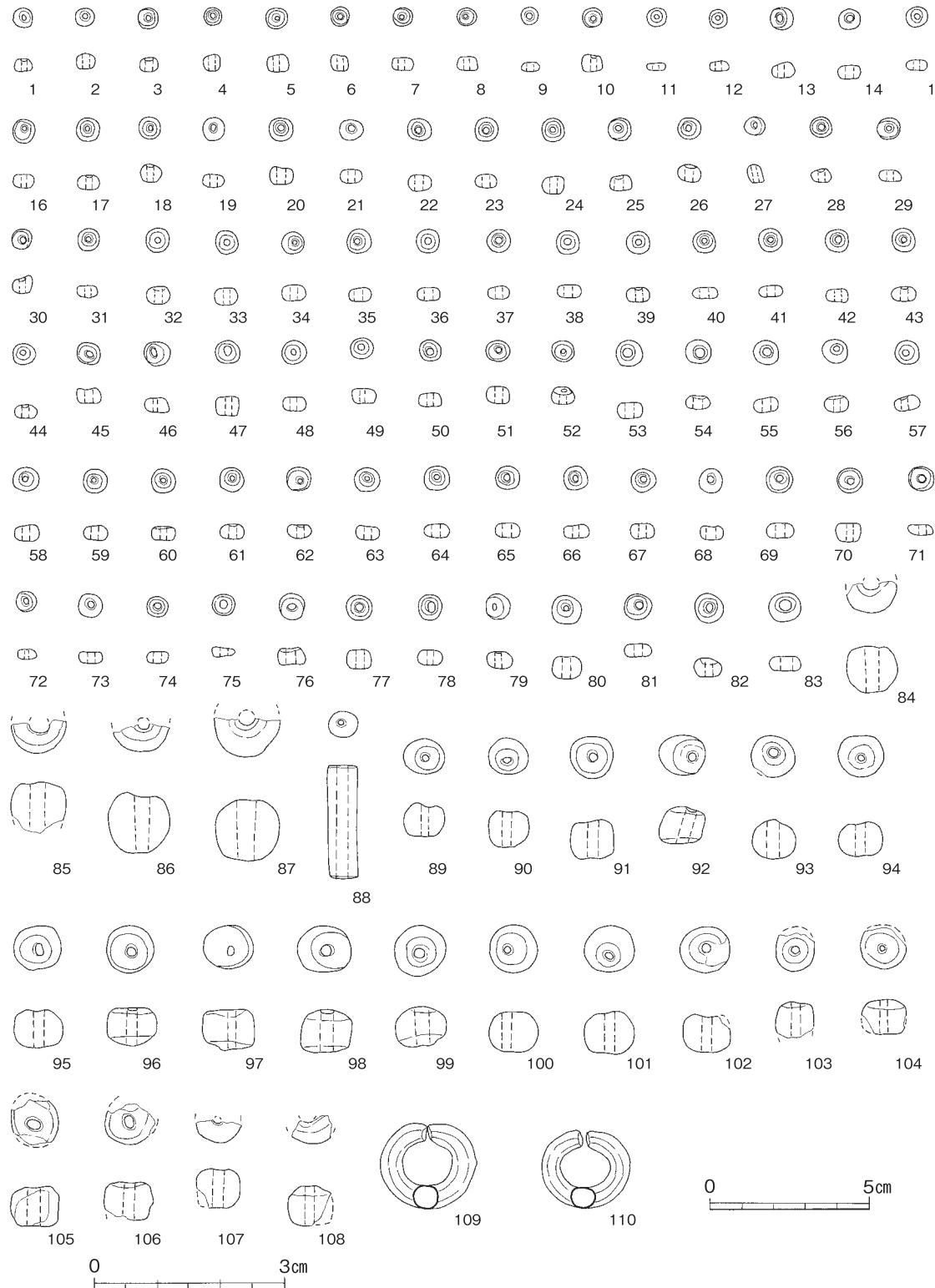
172～174は軟質で淡灰色を呈するもので、断面は橙色で極めて脆弱なため表面の剥離が多く、接合しないものが多い。これらも形状や文様構成は近似するが、3個体以上にはなる。文様は斜行文、沈線が交互に配され、各段に3箇所の長方形の透かしが配され、最下位のみ台形になる。内面には粘土の継ぎ目が顕著である。175は内面に1条の粗い凹線が認められ、透かしの上端と同位置であることから施文時の基準線の可能性がある。透かしは格段に3箇所配される。174は上位になる可能性もある。形状や施文は他と同じで、軟質で剥離が多い。

②出土特殊遺物

装身具

ガラス玉 (図版58、第44図1～87) 1号墳では87個のガラス玉が出土した。3分の2が玄室内、

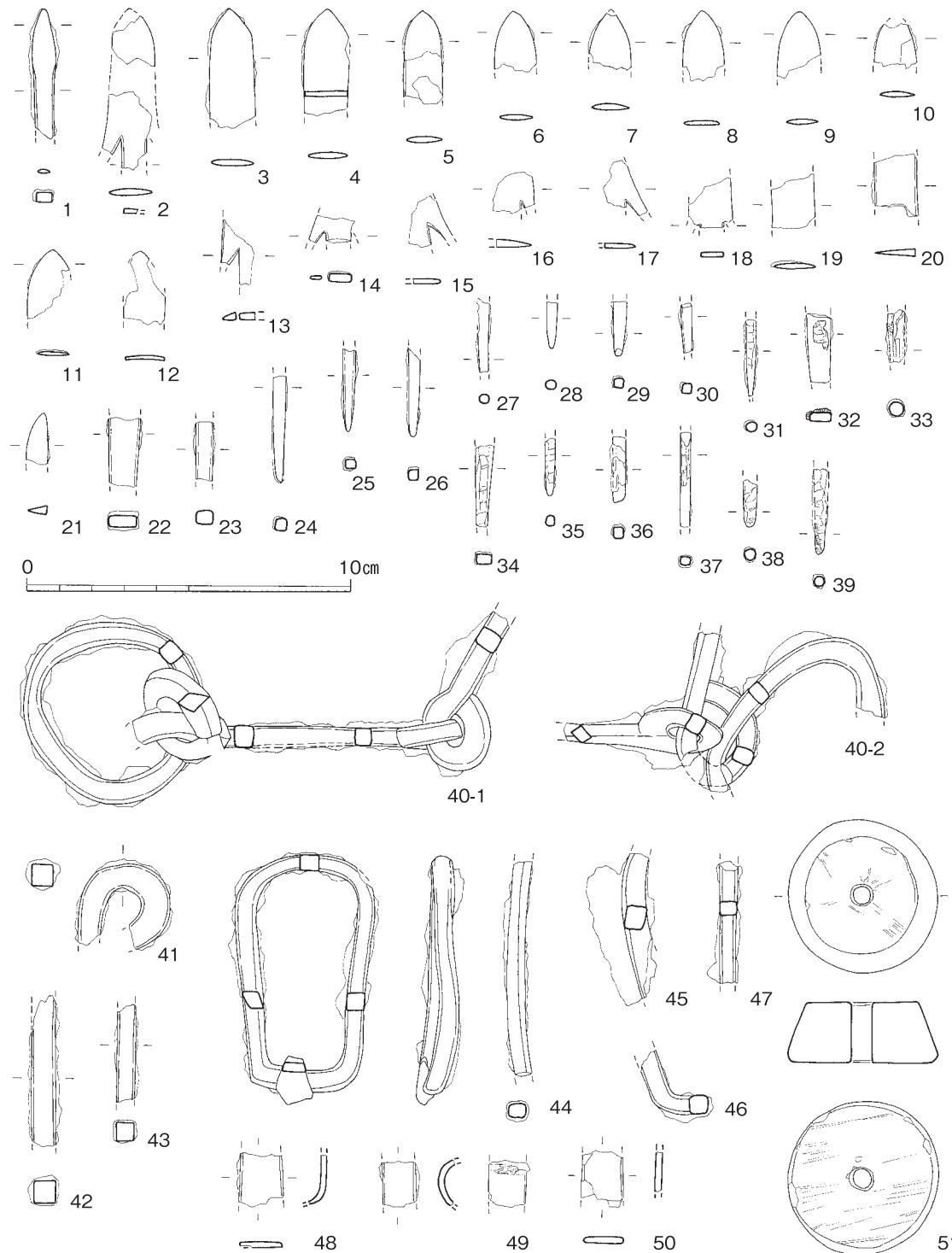
3分の1が石室埋土の土ふるいによって検出された。1～83がガラス製小玉、84～87がガラス製丸玉である。ガラス製小玉では紺青色や青緑色などの青系統と明緑色の緑系統の色調が多く、黄色系統も少量みられるが、ガラス製丸玉では緑系統の色調のみが認められる。製作技法では84・87が鉛ガラスを用いた巻付技法、それ以外は鋳造技法とみられる。ガラス製小玉のうち、紺青色の小玉には孔内縁に赤土色の物質が付着しており、分析してみないと断言できないが、鋳造後小玉を取り出す際の離解剤であった可能性が考えられる。個々のガラス玉については計測表を参照いただきたい。



第44図 墳山古墳群 I-1号墳出土装身具実測図 (109・110は1/2、他は1/1)

管 玉 (図版59、第44図88) 碧玉製の管玉である。直径0.45cm、長さ1.8cm、孔径0.15~0.2cmを測る。孔内に段差がなく、一方向からの穿孔と考えられるが、孔が管玉の直径の中心からやや離れて穿孔されている。色調はくすんだ薄緑色である。玄室内出土。

土 玉 (図版58、第44図89~108) 20個の土玉が出土し、多くが玄室内、数点が石室埋土の土ふるいによって検出された。黒色のものが多く、黒茶色と灰茶色のものが少量含まれる。直径は0.6~0.85cm、厚さ0.5~0.7cm、孔径0.1~0.2cmを測る。



第45図 皿山古墳群I-1号墳出土鉄製品・石製品実測図 (1/2)

耳 環 (図版59、第44図109・110) 2点の耳環が出土し、いずれも銅地銀張である。109は外径2.6cm×2.9cm、内径1.4cm×1.6cmを測り、抉入部の間隔は0.2cmと狭い。110は外径2.5cm×2.8cm、内径1.3cm×1.6cm、抉入部の間隔は0.15cmである。109は玄室内、110は石室入口堆積土からの出土であるが、形状がほぼ同一であることから一対であった可能性が考えられる。

鉄製品

鉄 鏃 (図版59、第45図1～40) 1は長頸柳葉鎧である。鎧身部の造りは両丸造りで、鎧身関は明確な変化点を有さない撫で関を呈する。頸部は断面が長方形を呈し、幅0.55cm、厚さ0.3cmを測る。2は鎧身部片である。鎧身部の造りは両丸造りで、鎧身関は腸抉を有する。3～19は形態や断面形状から2と同様の形態を呈する鎧身部片と推定される。鎧身の厚さはいずれも0.2cm前後を測る。20・21は片刃鎧の鎧身部片と考えられる。22・23は頸部ないしは茎部の破片である。22は断面が長方形であることから頸部の可能性が高い。24～39は茎部片である。31～39には有機質の付着が認められる。10は前室敷石内出土、他は埋土出土。

轡 (図版59、第45図40～43) 40-1・2は接合しないが、出土状況から同一個体の轡と判断した。素環鏡板付轡で片方の鏡板は半分以上欠損している。素環鏡板は直径5.5cmのやや歪な円形を呈する。左右の鏡板の立闇は形態がやや異なっている。引手と衡は一辺0.6cmほどの断面隅丸方形の鉄棒の両端を折り曲げて環鉄棒を加工しており、素環鏡板とは異なり、環を形成する際に継目をなくす加工はなされていない。前室出土。41～43は引手ないしは衡の一部と考えられる。41と42はともに一辺0.7cmの断面方形の鉄棒で、接合はしないが同一個体の可能性が高い。いずれも石室埋土出土。

鉸 具 (図版59、第45図44～47) 44は留具が欠損している。一辺0.5cmの断面方形の鉄棒を折り曲げて形成しており、継目は見えない。墳丘裾出土。45～47は鉸具片と考えられる。墳丘出土。

不明鉄製品 (図版59、第45図48～50) 48～50はいずれも幅1.2cm前後、厚さ0.15cmの薄い鉄板である。48と49は側面が彎曲しており、49の彎曲内面には木質の付着が認められる。どのような製品であったのかは不明である。いずれも墳丘埋土出土。

③石製品

紡錘車 (図版59、第45図51) 断面台形を呈する。上面は直径3.6cm、裏面は直径4.7cmで厚さ1.85cm、孔径0.55cmを測る。裏面では研磨の痕跡が明瞭に認められる。緑色片岩製。南墳丘裾土器集中部出土。

3) 2号墳 (図版20・21・32～39、第47・48図)

調査区中央に位置し、他の古墳に囲まれるように立地する、調査区内で2番目に大きい古墳である。盗掘を受けているが石室自体は残りが良く、墳丘の流出も少ない。『大平村誌』には「古墳群の中央にある3号墳は周濠を持ち」と記録されており、調査前測量段階でも周溝の形状は明らかであった。

i) 墳 丘

現存する墳丘規模は直径約17mを測り、周溝まで入れると約22mとなる。墳丘の調査は、主体部主軸にあわせて4本のベルトを設定し、墳丘盛土を除去した上で土層断面を確認した。現存する墳丘の高さは地山整形面から北東-南西方向で約2.0～3.6m、北西-南東方向で1.3～4.5mを測り、

頂部は主体部床面から4mを測る。盛土の厚さは天井石上面から約1.1mが残存している。地山は東に向かって傾斜し、主体部はこれに対してやや南に向かって開口する。地山はほかの古墳同様赤褐色粘質土で、盛土はこの赤褐色粘質土とこれにやや砂質の灰色系土が混入する層を中心とする。各層の単位はあまり細かくなく、基本的にほぼ水平堆積とする。石室部分の盛土である一次墳丘を構築した後、全体に覆い重ねるように積み、部分的に押さえ盛土として裾付近を強化する。順序としては若干の盛土による整地後に石室堀方を掘り込み、石室石材を積み上げながら純度の高い赤褐色粘土と小型の石材による裏込めで固め、整地面で一旦平坦面を形成する。これ以上も同様に石材積み上げと水平盛土を重ね、天井石を架構したところで赤褐色粘質土に僅かに灰色土が混入する粘性の高い土で石室全体を小丘状に被覆して一次墳丘を形成する。次にこれを覆うように赤褐色土中心に積み上げるが、この段階で一部の層の端部に腐植土のような軟質の茶色土が認められる。1号墳の「土手」と近似するが土質が異なり、また設置位置も4号墳で検出した墳丘内列石のように、層の端部上に乗せるように置かれる。土質から考えて、植物性の何かを土層端部の押さえにおいた可能性が高い。また一部には、土塊状の塊も認められる北東部は更にその外側に層の細かい盛土を積み、南東部の羨道側も細かい盛土で丁寧に仕上げて石室石材の崩落を押さえる。最後に全体を覆うように赤褐色粘土中心の土層で積み上げる。全体的に墳丘が低く盛土が薄いこともあり、各層の傾斜が緩やかで石室を大きく被覆していく工法である。直径規模が近似する1号墳とは基本的に築造工法が異なっており、3・4号墳の積み方に近い。

周溝も残存状況が良いためほぼ全体が確認でき、馬蹄形に全周の90%を廻り、最も残りの良い北側で幅約3m、深さ1.4mを測る。埋土はほとんどが地山の流れ込みで、後世の雨水などによって流されたと考えられる。

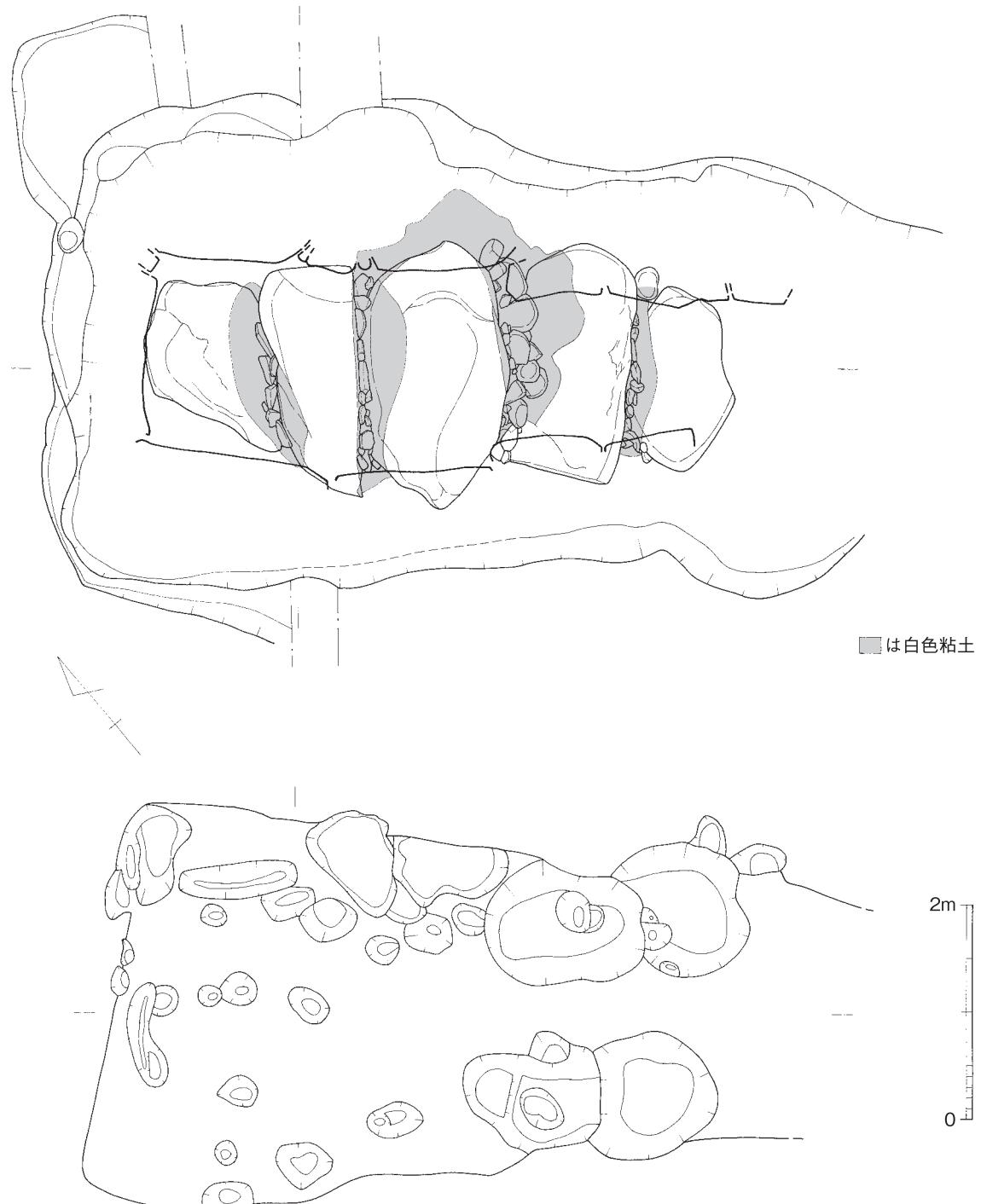
ii) 主体部

南東に開口する单室の横穴式石室である。

玄室 1号墳同様古くから開口しており、盗掘を受けたため玄室内の敷石は根石以外全て除去されていた。玄室は床面レベルが約50.2mで、規模は長軸3.2~3.3m、短軸1.8~1.9mの長方形を呈する。残存する根石から天井最高位までの高さは約2mを測り、玄室・羨道共に平天井である。奥壁には1.6m四方以上の鏡石を据え、天井石との間には1~2段の未加工の大型石材を積み上げる。側壁は左右共に高さ0.8~1.1mの2石の腰石を据え、その上に大小の石材を1~2段積み上げ、上位は小型石材で天井石との間を充填する。腰石上面の傾斜と同方向に目地が通ることから、腰石の高さに合わせて側壁上位の石材を一段ずつ積んだようである。これらの石材は大きさが不揃いでほぼ加工痕はなく、石材の隙間は小型の石材で充填する。奥壁と側壁、天井石の間には力石が使用される。天井は平天井で3石使用される。鏡石・側壁・腰石共に内傾して据えられ、そのままの傾斜で上位も持ち送りされる。床面との間には全て扁平な根石がかませられていた。敷石は残っていないが排水溝は良好に残存しており、羨道の仕切り石下までを確認した。排水溝は玄門部分で左右に分岐して側壁側の段落ちに続いている。この側壁側に向かう段落ちは玄室内でも確認しており、石室堀方掘削時に石材を設置するために掘削されたものと思われる。後で報告する「石室堀方状遺構」の形状につながるものである。

羨道 玄門から約2mの位置に仕切り石があり、玄門との間が前室様の形態となる。仕切り石は隅丸楕円形の石材を使用しており、上面は加工せず平坦面を持たない。仕切り石までの規模は長

軸約2m、短軸1.2~1.3mを測り、天井石までの高さは1.3mを測る。側壁は玄門横に同規模の立柱石を配して双方の平坦面を壁とし、天井石は平天井で2石架構される。1号墳前室側壁の、間の小石材がない形態である。敷石は残りが良く、上面に置かれた小石も残り、その間からは土器や鉄器、玉類が出土している。敷石は1号墳の前室と同じく上面に平坦面を持たずに凸凹で、使用される石材の規模も様々である。敷石下には排水溝が続いている、側壁側への段落ちも認められる。仕切り石より外側は、側壁の形状から天井石は少なくともあと1石あったと思われる。側壁は玄室側は扁平な石材を2~3段積み上げ、内側には面があり、縦に目地が通る。墓道側はさらに小型の石材を積み上げ、内側に面を持たない。床面は仕切り石から緩やかに傾斜し、墓道付近でやや平坦面をなす。



第48図 姥山古墳群 I-2号墳天井石・石室掘方実測図 (1/60)

羨道部分が前室のような様相をもつ「九州型石室」の形状は今回の調査区内では2~4号墳に見られ、唯一複室構造の1号墳の前室は、玄室と前室の立柱の間に川原石を1列積んで側石とする。2~4号墳の羨道が前室形状の退化形態であろうか。またこの部分の敷石は玄室内と異なって大型で平坦面を持たない山石を無造作に据えており、1号墳前室敷石と同様形態で玄室との差別化が認められる。近隣の同時期の古墳群の横穴式石室にも見られる形態である。

閉 塞 羨道部仕切り石のやや外側から羨道敷石部分にかけて閉塞が存在した。上位は盗掘時に破壊されており、原位置を保っていないと思われるが、下位は人頭大の石材が横方向に目地が通るように積まれていた。

墓 道 約2.7mを検出し、床面は平坦でほぼ同じレベルである。埋土上面に硬化面が認められるが盗掘時のものと考えられ、最下層の赤褐色粘質土が当時の埋土と考えられる。

石室堀方 幅4m前後の隅丸長方形で、北東の深い部分で約0.4mの深さがある。床面には石材の重みによる凹凸が多数認められた。

ii) 出土遺物

盗掘を受けるため出土遺物は少ない。南墳丘から須恵器がまとまって出土したほか、主体部や埋土から玉類・鉄鏃・馬具などが出土している。また羨道から唯一土師器が1点出土した。

①出土土器

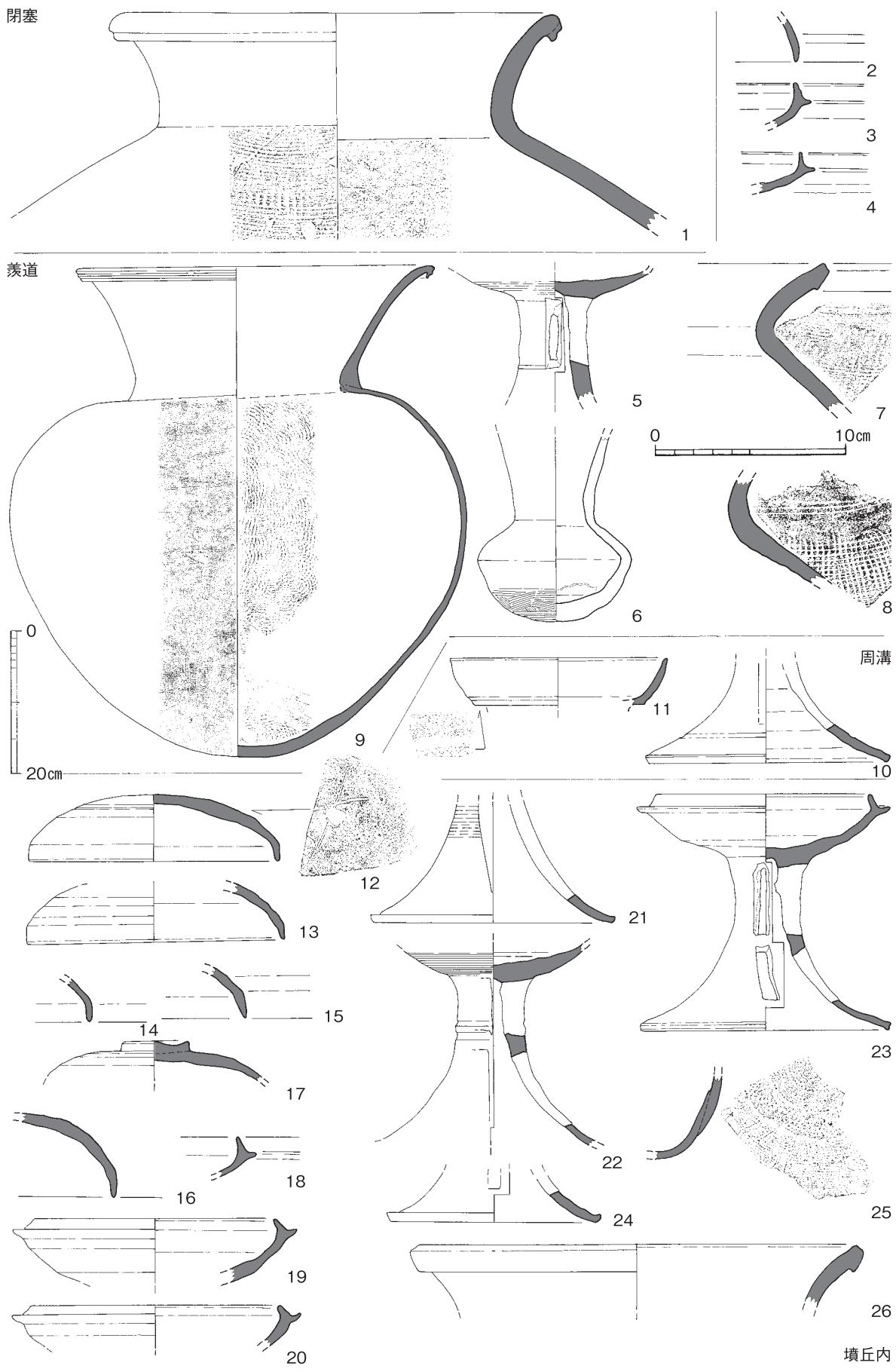
閉塞内出土土器（第49図1） 1は閉塞石の間から出土した甕で、端部は外に折り返して突帯状を作る。外面は擬格子叩き後カキ目を施し、内面は細く大きめの同心円が残る。

羨道出土土器（図版57、第49図2~9） 2は杯蓋の小片。3・4は杯身でいずれも口縁は直上に立ち上がり、端部が黒変する。4はやや薄く浅い。5は高杯の底部から脚部で、脚部には2段×2箇所の長方形の透かしが認められる。杯外底部にはカキ目が廻り、外面は自然釉がかかる。6は土師器の小型の長頸壺で、頸部から口縁が太く、肩部が大きく張る。外底部は刷毛調整、内底部は粗い撫でつけで調整する。7・8は甕の小片。7は口縁部を玉縁状に作り、頸部の屈曲は強い。外面は擬格子叩き後にカキ目を廻らせ、内面は線の細い同心円が残る。8は頸部の屈曲が緩く、外面は擬格子叩きで頸部に沈線が廻る。内面は大きめの同心円が残る。9は大型の甕で、口縁は直線的に大きく開き、端部を折り返して垂下する。頸部は締まって屈曲が強く、体部は球形を呈する。頸部と底部以外は器壁が薄い。体部外面は擬格子叩き、内面は同心円の当て具で、口縁から頸部にかけて内外面とも灰被りである。

周溝出土土器（第49図10・11） 10は高杯の脚部片で、全体に器壁が薄く、透かしがあるが小片のため箇所数は不明である。沈線が1条巡り、端部断面は方形に作る。11は脛口縁部で、屈曲部が突帯状になり、屈曲部下に刺突文が廻る。

墳丘出土土器（図版57、第49図12~26） 石室入り口の向かって左側、南側墳丘から土器がまとめて出土した。

12~16は杯蓋。いずれも口縁端部が直線的に垂下する。12は天井部が厚く内面に「×」の籠描きがある。13は器壁の凹凸が多く、やや軟質。16は丸みを持つ器形で高さも高く、作りが粗く天井部は未調整である。17は高杯蓋で低い宝珠摘みを有する。天井部は籠削りで平坦に作る。18~20は杯身。18は器壁が薄く堅緻でやや浅い。19は焼きが甘く軟質で白色を呈し、全体の凹凸が多い。20は全体に作りが粗く、16に胎土・焼成が近似する。21~24は高杯。いずれも堅緻で透かしを有



第49図 皿山古墳群 I-2号墳出土土器実測図 (9は1/8、他は1/3)

する。21は脚部中位にカキ目が廻り、透かしは2箇所、22・23は全体に釉がかかり、過焼成な程硬く焼きしめられるなど、焼成や色調が近似する。いずれも透かしは2段で2箇所にある。22は杯外底部にカキ目が施され、脚部中位に凹線が廻る。外面は黒変する。23は器壁の調整が不明なほど自然釉がかかり、端部が黒変する。24は口縁端部を跳ね上げ、透かしの数は不明である。25は提瓶の体部片で、カキ目が廻り、中程に刺突文が廻る。粘土の継ぎ目が顕著である。26は甕口縁部小片で、端部は玉縁状に肥厚する。

②出土特殊遺物

装身具

ガラス玉（図版59、第50図1～8） 8点のガラス製丸玉が出土した。8のみが前室敷石内から出土したが、それ以外は石室埋土のふるい作業によって検出された。直径0.8～1.05cm、厚さ0.55～0.8cm、孔径0.2～0.25cmを測る。色調はいずれも紺青色で、上下面を平らに擦り、太鼓状の張りがある形態を呈す。丸玉内部の気泡の流れが孔に沿って平行になっていることから、引延切断技法で製作されたものと考えられる。

土 玉（図版59、第50図9） 1点の土玉が石室埋土のふるい作業によって検出された。最大径0.85cm、厚さ0.75cm、孔径0.2cmを測る。色調は暗茶色である。

鉄製品

鉄 鏃（図版60、第51図1～5） 1は長頸柳葉鎃の鎃身部である。2は鎃身部片である。鎃身部の造りは片丸造りで、鎃身関部は直角に近い。3～5は鉄鎃の頸部ないしは茎部の破片である。

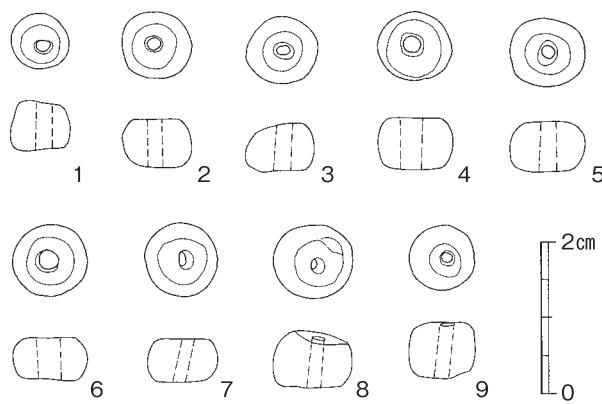
鞍（図版60、第51図6・7） 6と7は鞍の鞍金具である。ともに一辺0.45cmの断面方形の鉄棒で形成している。形態と法量が類似していることから一対の鞍金具として鞍に取り付けられていた可能性が考えられる。

U字形金具（図版60、第51図8・9） 8と9は木製壺燈に伴うU字形金具と推定される。8には鉢頭直径0.7cm、鉢脚1.6cm、9には鉢頭直径0.8cm、鉢脚1.2cmの鉢が各々1鉢みられる。9は幅0.7cmの断面隅丸長方形の鉄棒で上部の彎曲を形成し、鉢を取り付ける平坦面を鉄棒の打ち延ばしで形成したと考えられる。8・9ともに墳丘裾出土。

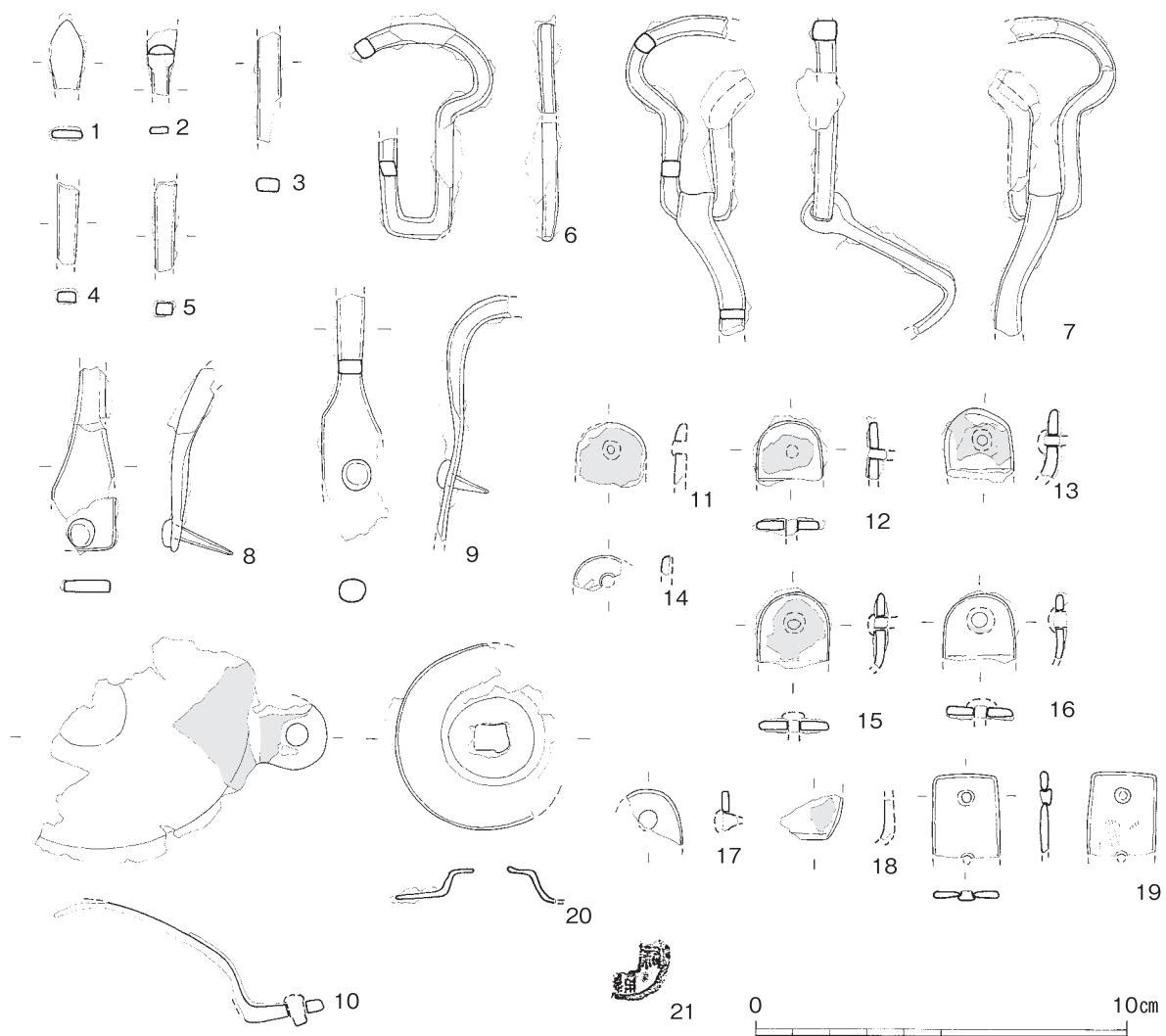
雲 珠（図版59、第51図10～18） 10は金銅装雲珠である。ドーム状の鉢で、半円形1鉢の脚部が1脚残存している。層状の剥離が著しい。羨道敷石内出土。11～18は金銅装の雲珠ないしは辻金具の脚部である。形態・法量ともに類似していることから同一の個体を形成していた可能性が考えられる。12と16には裏面に黒皮膜の痕跡がみられることから革帶と連結していたと考えられる。いずれも石室内埋土出土。

吊金具（図版60、第51図19） 残存長2.2cm、幅1.8cm、厚さ0.25cmを測る。縦位に鉢が2鉢並ぶ。裏面に黒皮膜の痕跡が認められることから革帶に連結するための吊金具ないしは留金具と考えられる。

不明鉄製品（図版60、第51図20） 周縁は幅1.1cmの平坦面を為し、中心部は直径2.2cm、高さ



第50図 皿山古墳群 I-2号墳出土装身具実測図 (1/1)



第51図 皿山古墳群 I -2号墳出土鉄製品実測図 (1/2)

0.9cmに半球状に高まる。中心には長さ0.8cm、幅1.0cmの平面長方形の孔が認められる。孔の周縁はわずかに上方向に外反する。鉢などの連結する箇所が認められず機能については不明である。

錢 貨 (第51図21) 3分の1のみが残存しており、「●福通●」の2字が残る。景福通寶ないしは元福通寶の可能性があるが、字体から元福通寶か。

4) 3号墳 (図版20・39~42、第52・53図)

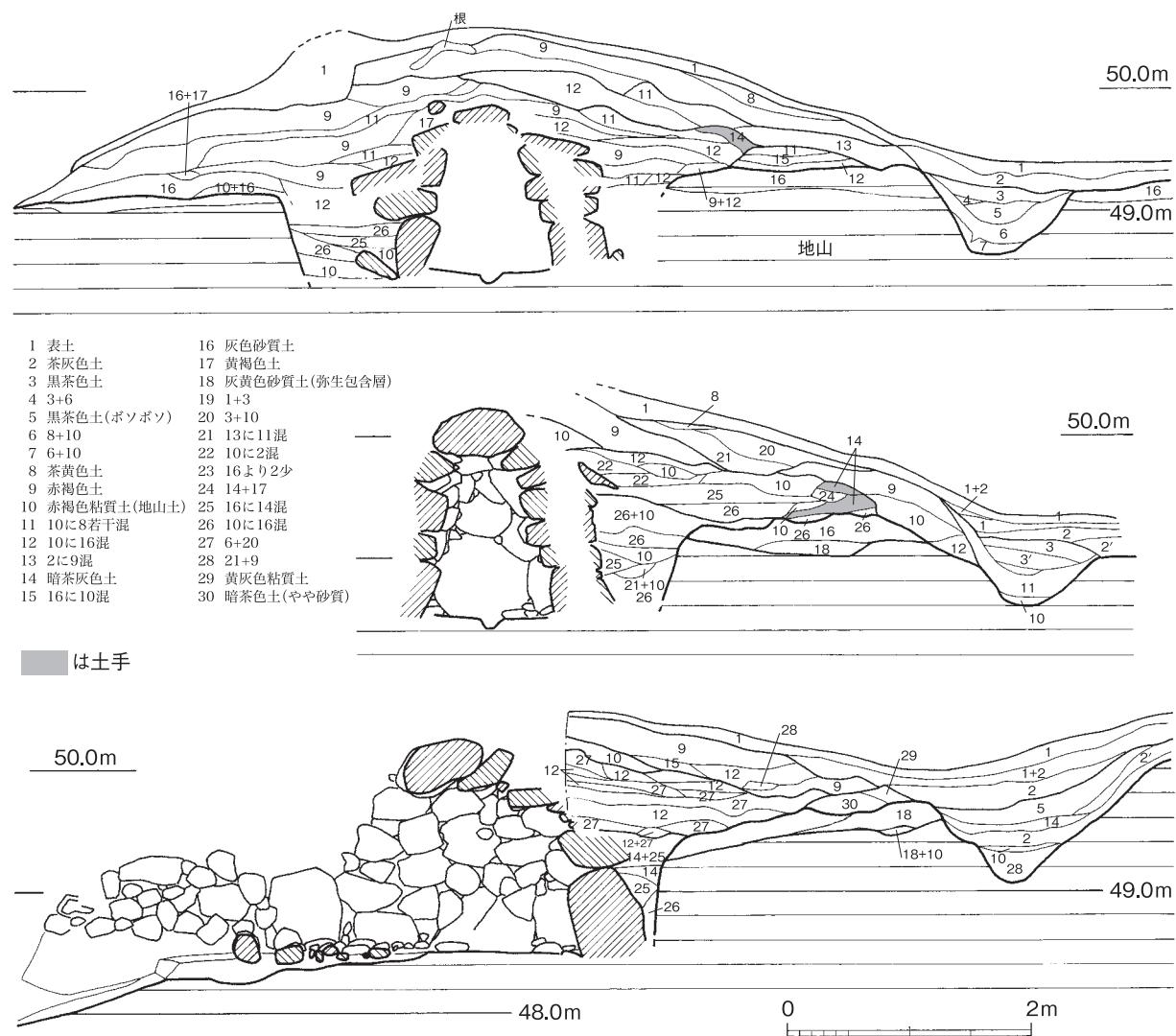
調査区最南端、他の古墳からやや離れた場所に位置する。調査地内最小規模の古墳である。地元の方の話では隣接する小山田池造成時に大規模な掘削があったとのことで、墳丘の約1/4を失い、南側は崖になっている。主体部は残存していたが、現代に寝所として使用されたらしく、毛布やライター、ハサミ、1987年のスケジュール帳などが入っていた。

i) 墳 丘

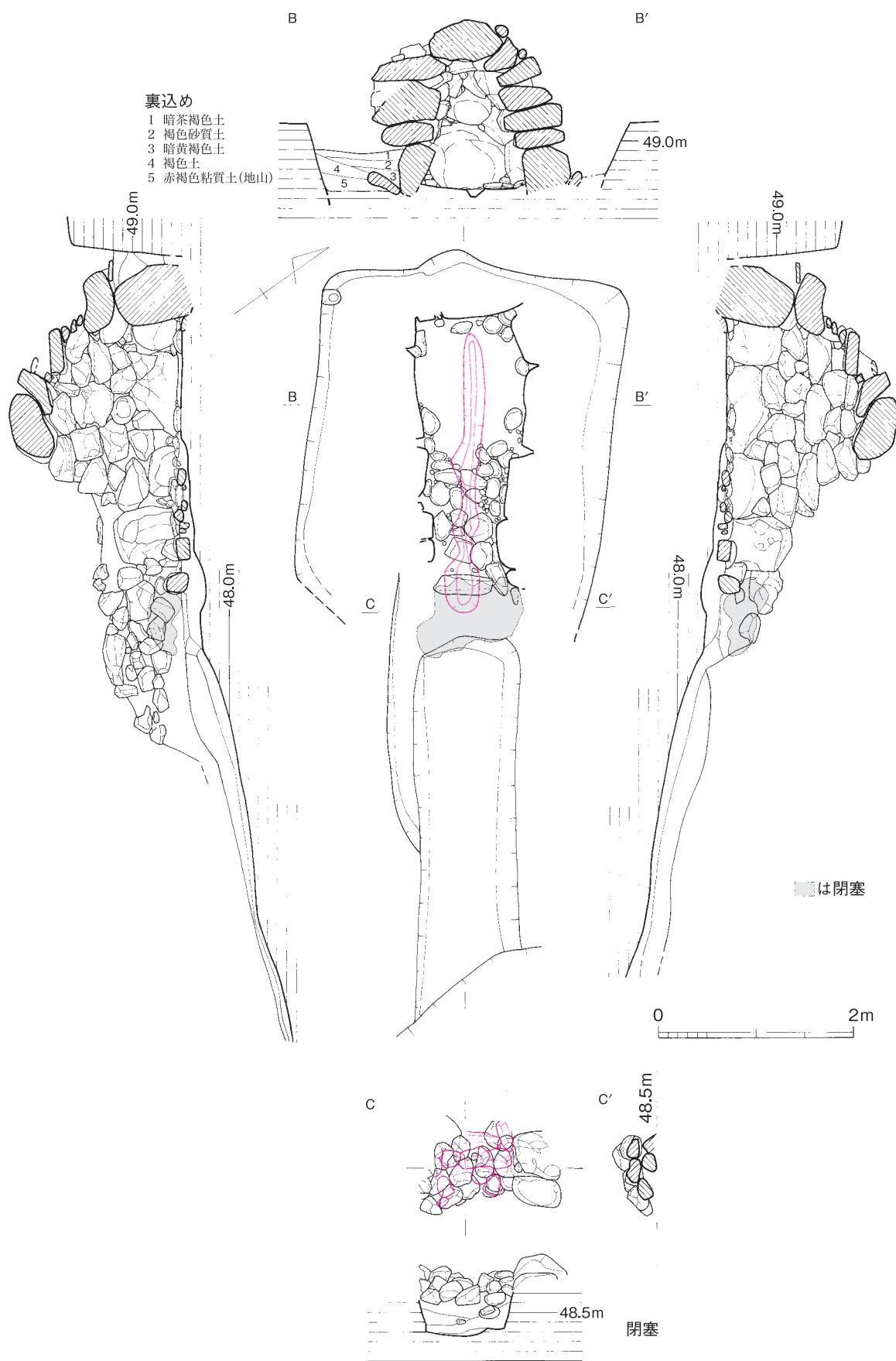
南西側を多く削平され、現存する墳丘と石室の中軸から復元した規模は直径約8m、周溝まで含めると約10mである。墳丘の調査は、主体部主軸にあわせて4本のレンチを設定し、土層を確認した上でベルトを残して墳丘盛土を除去した。現存する墳丘の高さは地山整形面から北東-南西方向で約1.5~1.8m、北西方向で1.4m、頂部は玄室床面から約1.2mを測る。盛土の厚さは天井石

上面から0.6mが残存している。地山はほかの古墳と同じく赤褐色粘質土で、東に向かって傾斜し、主体部はやや南向きに開口する。小型で地山の傾斜が緩やかな立地に築造されているためか、各層の勾配も緩やかである。表土除去後茶色土を中心とした低い盛土による整地を行ってから石室掘方を掘削する構造は4・5号墳と近似する。その後堀方内に石材を積みながら基盤土の赤褐色粘質土と灰色土中心の埋土と石材による裏込めで固め、地山とほぼ同レベル、側壁最上段まで積んだところで、一旦平坦面を作る。その後天井石を架構した段階で赤褐色粘土中心で石室を固め、一次墳丘を形成する。一次墳丘を覆うように背面まで再度盛土し、最後に羨道部分の天井石まで覆って一段落する。これより上位は削平されているため構築方法は不明であるが、一部の土層端部に土手状の土層単位が認められるところは、1号墳と近似する。各層が水平に積まれるところは2・4号墳の積み方に近い。積み方の違いは規模の違い、墳丘の高さの違いからくるものと捉えられ、構築技術は共通する点が多いと考えられる。

周溝は残存状況が良く、馬蹄形に全周の80%を廻り墓道に近い部分で消滅する。深さは最も深い北側で約1mを測り、断面形状は緩いV字を呈し、南に下がるにしたがって半円形状に変化する。埋土はほとんどが地山の赤褐色粘質土と茶色土の混合土で流れ込みと思われる。



第52図 皿山古墳群 I-3号墳墳丘土層断面実測図 (1/60)



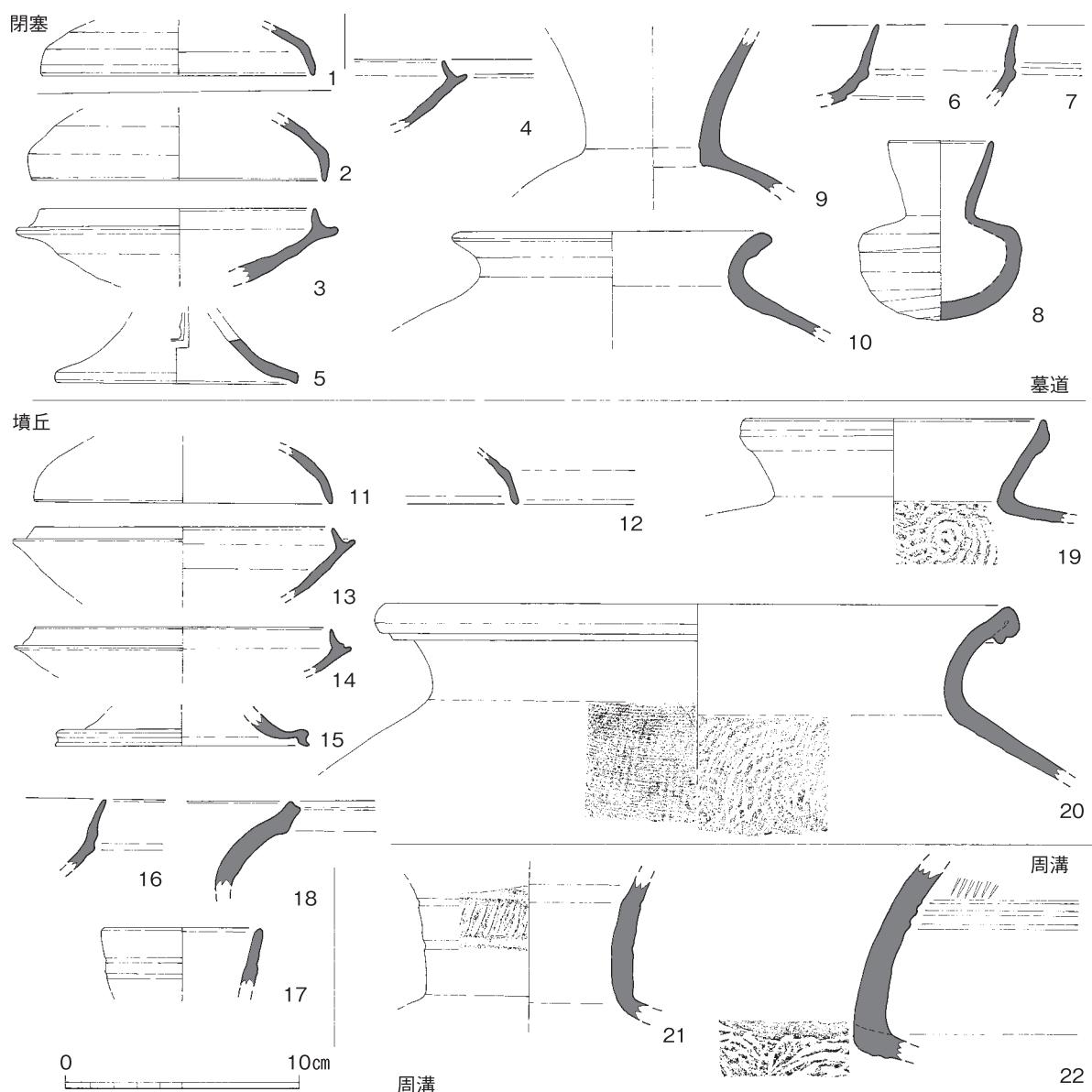
第53図 皿山古墳群 I-3号墳主体部実測図 (1/60)

ii) 主体部

主体部は南東に開口する单室の横穴式石室である。

玄室 盗掘を受けるため玄室内の敷石は根石以外ほとんど除去されていた。玄室は床面レベルが約48.1mで、規模は玄室は長軸2.6m、短軸は奥壁付近で1.0m、玄門付近で0.8mを測る台形に近い細長い長方形を呈する。敷石から天井最高位までは約1.3mを測るが、天井から側壁が土圧によって内傾し、一部の石材が崩落しているため図の一部は築造時のままではない。奥壁には横0.8m、縦0.6mの鏡石を据えて腰石とし、上に大型石材を2石積む。側壁は右が長方形に近い腰石を3石並べて上に小型の石材を5~6段積み上げ、左は不整形な大型石材2石とやや小型の石材2石を腰石とし、その上と間に小型の石材を4段積み上げる。僅かに残る敷石は扁平な川原石を使用している。敷石下には石室長軸方向に排水溝が敷設され、羨道の仕切り石下まで検出できた。明らかな玄門は確認できず、框石も付近の石材が抜き取られているため確認できなかった。

羨道 天井石と右袖を失っている。玄室袖から約2mの位置に仕切り石が置かれ、ここまで側壁は大型の腰石を2石据える。玄室寄りの1石は低く、天井石との間に更に3段石材を積んで



第54図 皿山古墳群 I -3号墳出土土器実測図 (1/3)

おり、仕切り石側の1石は立柱状でそのまま天井石を支えていたようである。敷石は玄室側は扁平な石材を据えるが、仕切り石側は上面に平坦面をもたずに凸凹の石材を配する。他古墳の玄室と前室または羨道の敷石と同様である。仕切り石より墓道側の側壁は小型の石材を貼り付けており、これが途切れる部分、仕切り石から約0.6mの床面に段差がある。ここからが墓道と考えられ南東に傾斜していく。墓道は幅約0.8mで直線的に南東に延び、約3.9mを検出した。

閉 塞 框石手前に封土と閉塞石が積まれていたが、盗掘によって上位を失い、1～2段を確認したのみである。

石室掘方 玄室部分で下端3.3×2.5mの方形に近い隅丸長方形で、壁は垂直に近い。北東側の深いところで約70cmの深さを持つ。

iii) 出土遺物

盗掘を受けていることから土器などの出土資料は少ないが、主体部から須恵器壺やガラス玉、耳環、鉄鏃、鍔が出土している。

①出土土器

出土した土器はすべて須恵器である。

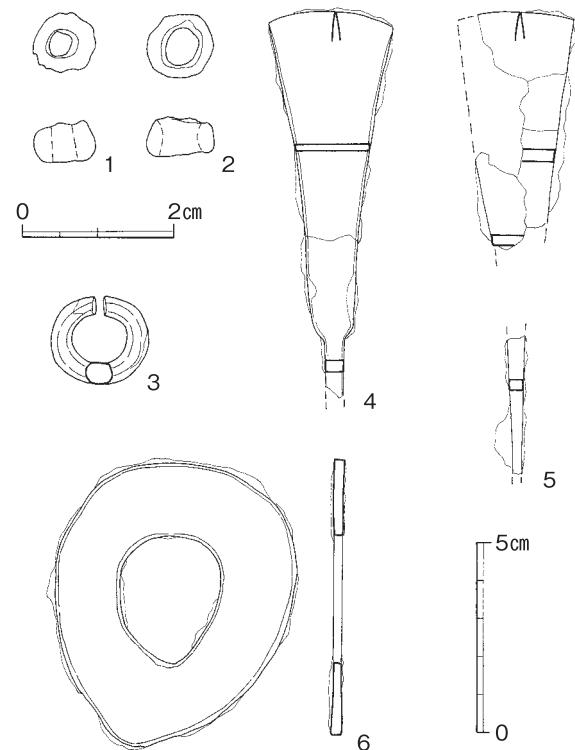
閉塞内出土土器（第54図1） 1は杯蓋で器高が低く外面に釉がかかる。

墓道覆土土器（図版57、第52図2～10） 2は杯蓋。屈曲部を持ち、端部は垂下する。3・4は杯身で、3は浅く器壁が厚い。釉の黒色粒が多数付着する。4は硬質の一群で、やや深めである。5～7は高杯。5は脚部片で、透かしがあり端部が屈曲する。6・7は口縁部片で、屈曲部が突帶状になり体部は凹線が廻って段を有する。形状は近似するが焼成が異なり、7は外面が自然釉で光沢を持つ黒色を呈する。8は小壺で、床面に近い場所で出土した。口縁が長く体部は肩が張って稜を有する。回転籠削りで丁寧に整えられ、全体に自然釉がかかる。9は平瓶の口縁から肩部で、頸部内面の屈曲は強い。外面に自然釉がかかる。

10は壺で、頸部の屈曲は強く丸みを持ち、外面に自然釉がかかる。

墳丘出土土器（第54図11～20） 11・12は杯蓋で丸みを持ち、11は端部が僅かに屈曲し、12は垂下する。13・14は杯身で、13は硬質の一群である。14は浅く、外面が黒色を呈する。15は高杯脚部片で、強く折れ曲がって端部は外反する。16は縁口縁部片で、屈曲部は突帶状になる。17は提瓶の口縁部か。外面に凹線が2条廻り、内外面とも黒変する。18～20は甕。19は小型で横瓶の可能性がある。外面は擬格子叩きで内面は太くギザギザの特徴的な同心円が残る。20は口縁端部を折り曲げて玉縁状にする。外面は擬格子叩き後にカキ目を廻らせ、内面は細く大きめでギザギザの特徴的な同心円が残る。

周溝出土土器（第54図21・22） 21は壺頸



第55図 皿山古墳群I-3号墳出土装身具・鉄製品
実測図（1・2は1/1、他は1/2）

部か。外面に2条の沈線が廻り、間に斜位の櫛描文を施す。外面は黒色、断面は小豆色を呈する。22は大型の甕頸部片で、外面に3条の沈線が廻り、その上に斜行文が廻る。内面は同心円が残り内面は部分的にガラス質の釉がかかる。

②出土特殊遺物

装身具（図版60、第55図）

ガラス玉（図版60、第55図1・2） いずれもガラス表面の磨滅によって、全体の形状は不明確であるが、ガラス製丸玉であろう。1は残存径0.85cm、残存厚0.5cm、孔径0.5～0.65cmである。石室埋土出土。2は残存径0.8cm、残存厚0.6cm、孔径0.3cmを測る。玄室右袖出土。

耳環（図版60、第55図3） 銅地銀張の耳環である。外径2.3cm×2.6cm、内径1.2cm×1.5cm、抉入部の間隔は0.2cmを測る。墓道埋土出土。

鉄製品

鉄鏃（図版60、第55図4・5） 4・5とも方頭式長頸鏃である。4は残存長10.2cm、幅3.2cm、鏃身部の厚さ0.15cmを測る。ともに墓道埋土出土。

鐸（図版60、第55図6） 6は倒卵形の鐸である。左下部分がやや膨らんだ形態をしている。詳細に観察しても他のサビ部分とは異なっており、当初より非対称の形態であったと考えられる。

5) 4号墳（図版42～48、第56～59図）

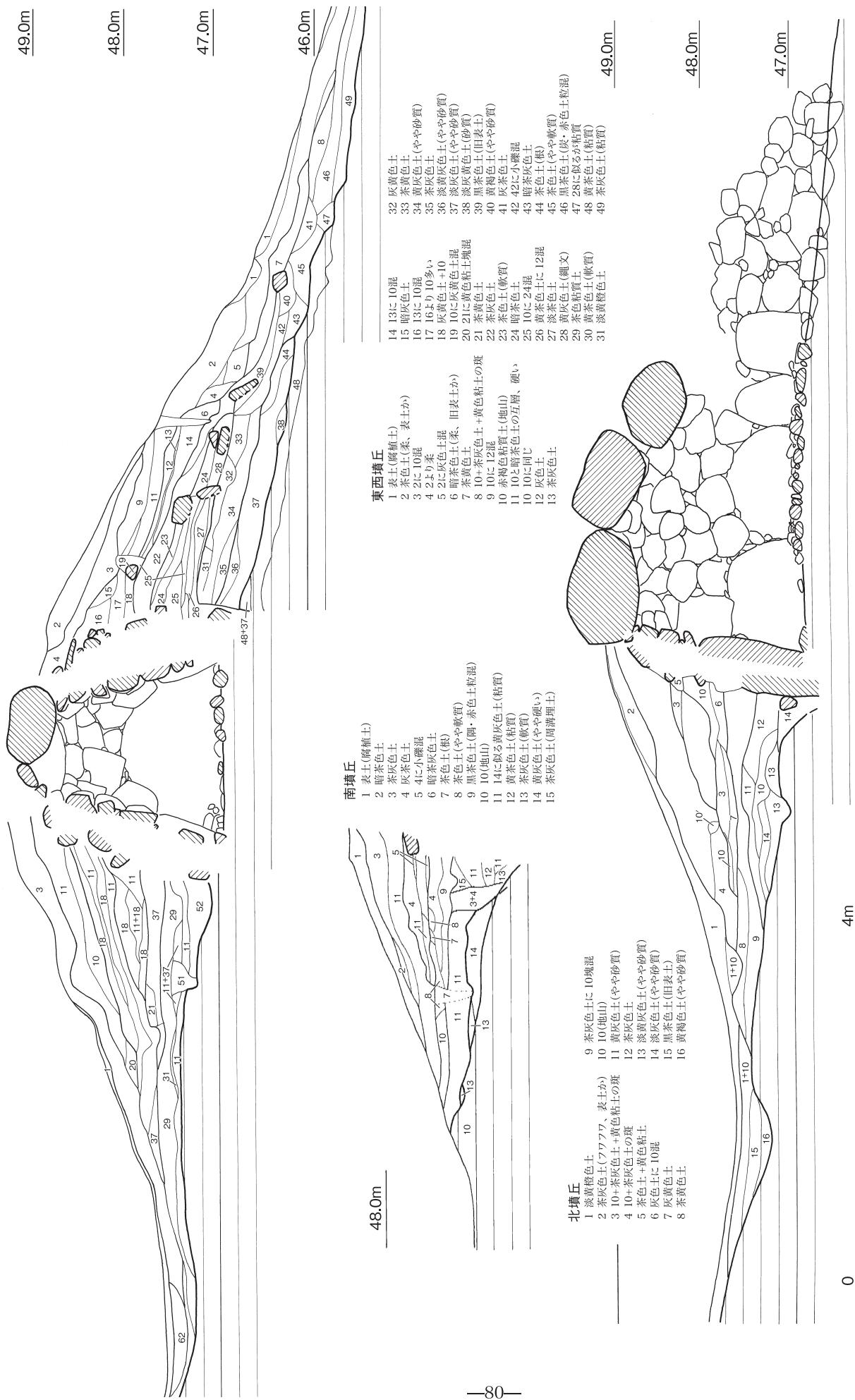
5号墳の南、2号墳の東に立地する。5号墳と同規模もしくはやや大きく、周溝埋土に5号墳の盛土が乗っていたことから5号墳より古い。全体に残りは良いが、墳頂に巨大な切り株があつて撤去が不可能であったため、土層断面は中央を計測できていない。また羨道の天井石が失われたことにより玄門の天井石も崩落の危険性があり、一石を調査前に除去し、玄門に支保工を設置して調査を行った。

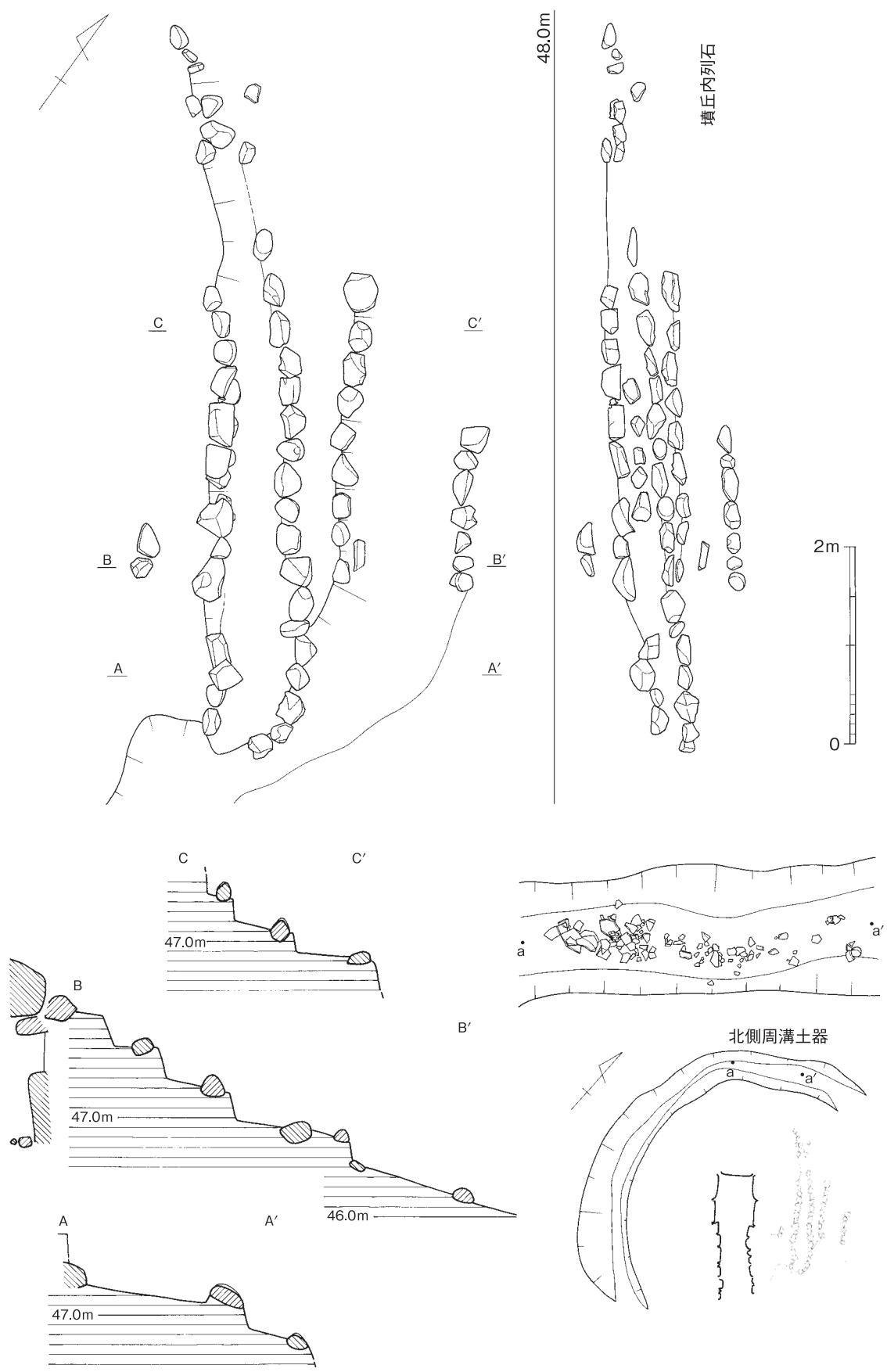
i) 墳丘

墳丘は上部と東側が削平され、表土下に天井石が露出していた。また巨木が育成していたため墳丘は根で浸食されて流れた部分も多く、現形状と周溝から復元できる規模は9m前後で、周溝は西側のみのしか残存しないが、これを含めると12m前後となり、5号墳と同規模となろう。

墳丘の頂上の切り株を避けて3箇所にトレンチを設定し、土層断面を確認した後にベルトを残して盛土を除去した。上部が失われているが、墳丘は地山整形面から北東-南西方向で約1.6～3.6m、南東方向で約1.7mが残存している。5号墳と同様に、茶色土を中心とした盛土で平坦面を形成した後に石室掘方を掘削している。石室石材を設置しながら掘方内を赤褐色粘質土と小型の石材による裏込めで固め、整地面で一旦平坦面を造る。更に石室上部を構築しながら赤褐色粘質土と茶色土・灰色土が中心の盛土で、墳丘全体を少しづつ積み上げる。これらには数回の単位が認められ、東側墳丘では単位ごとに端部に列石石材を配している。残存する最頂部、天井石付近の積み土は赤褐色粘質土と薄い灰色土数層の互層で丁寧に固められており、1号墳天井石付近の盛土の状態に近似する。

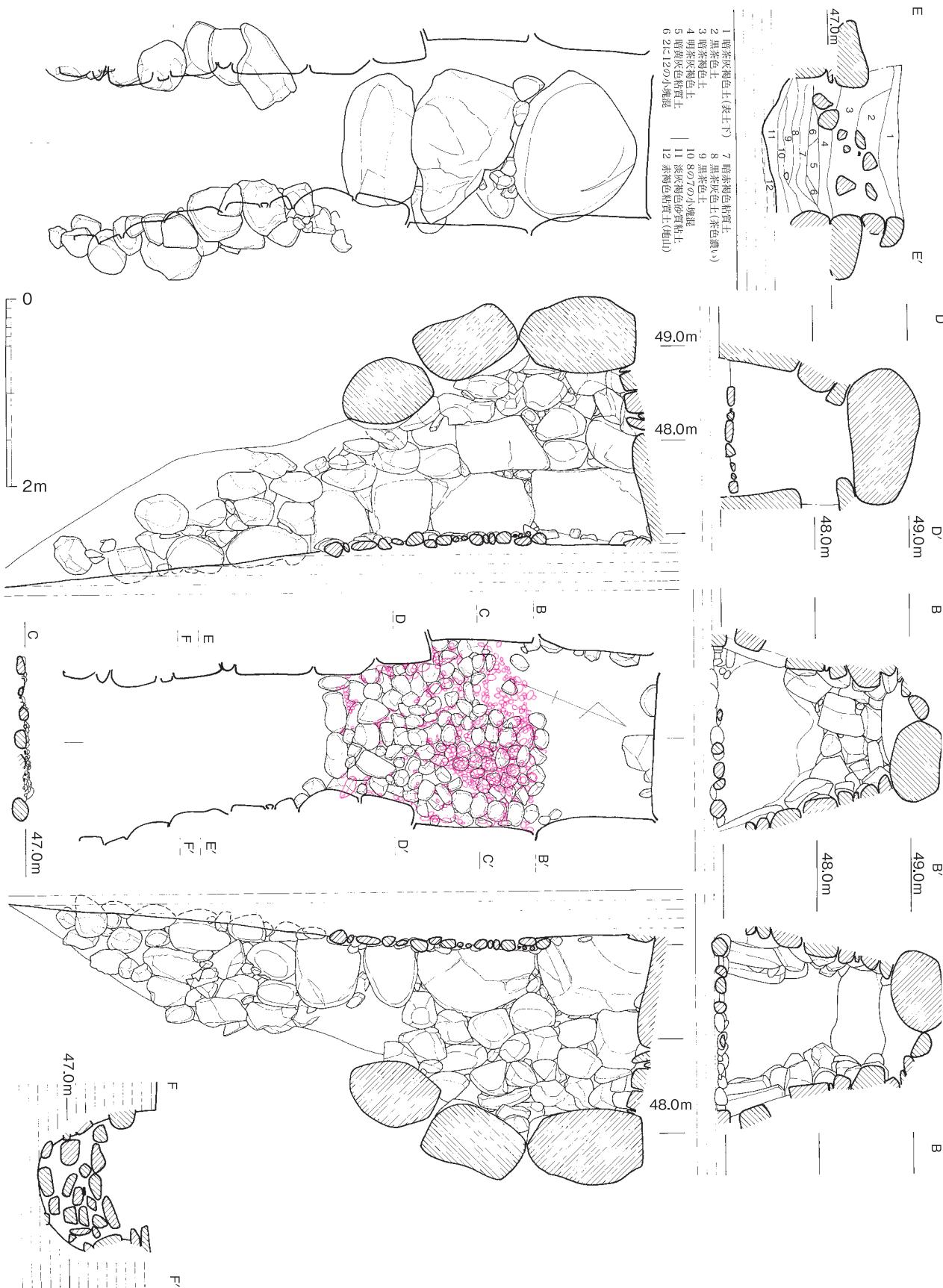
墳丘北東側と北西側の一部で墳丘内列石を確認した。北東側の列石は5列あり、いずれも墳丘形状に沿わず、石室長軸方向に平行に直線的に並べられる。各列は平面的・立面的には等間隔で並び、各石の大きさも20～30cmと人力で持ち上げられる重さのものばかりである。墳頂と墳裾の残りが悪く全容は把握できなかったが、最上位と最下位は一部を失っていると思われ、また石列の間隔か





第57図 皿山古墳群 I-4号墳墳丘内列石実測図 (1/60)

ら考えると最下層の上にもう一列あった可能性が高い。北西部は一列のみである。土層断面の観察から、各土層の最も外側に設置されて、土層上に乗るものが多いことから、土を積んだ後の端部の



第58図 皿山古墳群 I-4号墳主体部実測図 (1/60)

押さえとして設置されたものであろうか。ただし、墳丘内を全周するものではなく他箇所には認められない。北東側は旧地形の傾斜が強く、傾斜地上で盛土の流出を抑えるための押さえとしての役割と、作業時の足場としても使用されたものかも知れない。墳丘内列石はガサメキ4号墳など近隣の古墳でも確認されている。また、1号墳ほどの量ではないが南墳丘裾で須恵器がまとまって出土した。

周溝は北西～南東部分が残存しており、標高の高い西・南側に向かって浅くなることからは削平されたと考えられる。残存部も残りが悪いが、墳裾は確実に押さえられることから墳丘規模は確認できる。また北西側周溝内では須恵器片がまとまって出土した。全て破片だが程度器形を復元できることから、墳丘上から転がり落ちた可能性が高い。石室背面の墳丘上の祭祀の可能性も考えられる。

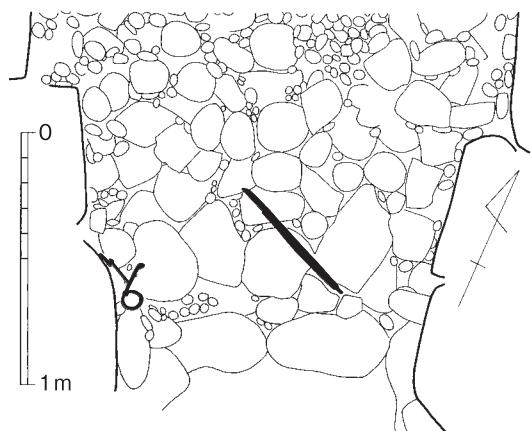
ii) 主体部

主体部は南側に開口する单室の横穴式石室である。

玄室 床面レベルが47mで、長軸3.2m、短軸が1.9～2.0m、玄門付近は約1.4mと狭小になる胴張りの長方形を呈する。敷石上面から天井最高位までの高さは約1.8mを測る。奥壁は幅1.9m以上、高さ1.1m以上の隅丸三角形の鏡石を据え、その上に3～4段大きさの異なる石材を積み上げる。側壁は左側壁が方形または長方形の切石2石を腰石として敷石から約0.6mの高さに揃えて置き、その上に大小様々な未加工の石材を3段ほどやランダムに積んで隙間を小石材で埋める。右側壁は0.6～0.8mの高さの未加工の大石2石を腰石とし、その上に大小様々な未加工の石材を4～5段積んで隙間を小石材で充填する。これらの配置には横方向の目地が認められ、各段の石材規模もほぼ統一されている。2号墳同様、左右の積み方に差が見て取れる。鏡石・腰石共に内傾して置かれ、そのままの傾斜で上位も持ち送りされる。床面との間には全て扁平な根石がかませられていた。床面は盗掘によって約1/2が敷石を剥ぎ取られているが、玄門側は残りが良く上に置かれた小石も一部が残っていた。敷石にはやや厚みのある扁平な川原石を使用し、その下に排水溝は認められなかった。玄門は低い立柱石を立てるが、框石は配さない。天井石は2石を架構するが、頂部にあった樹木の根によって大きく傾いており、上面は隙間を小礫で充填しているが、白色粘土は確認できなかった。

羨道 玄門から約1mの位置に2石の仕切り石が配され、これより玄室側は玄門と同規模の立柱石を配し、この2石の平坦面をもって側壁とする。隙間は小礫で充填する。この部分は幅1.2～1.5m、敷石からの高さ1.2mを測り、2・3号墳と同じ形状である。右側壁はこれより上部を失うが、左側壁は天井石との間に更に2～3段石材を積み上げる。敷石は1号墳の前室や2・3号墳羨道と同じく上面に平坦面を持たずに凸凹で、使用される石材の規模も様々である。仕切り石より墓道側は敷石がなく、側壁は大小の石材を貼り付けるように積み上げる。これらの積み方には横方向の目地が認められる。仕切り石から約1.6mの箇所から側壁が若干広がり、墓道につながる様である。墓道は削平されたため確認できなかった。

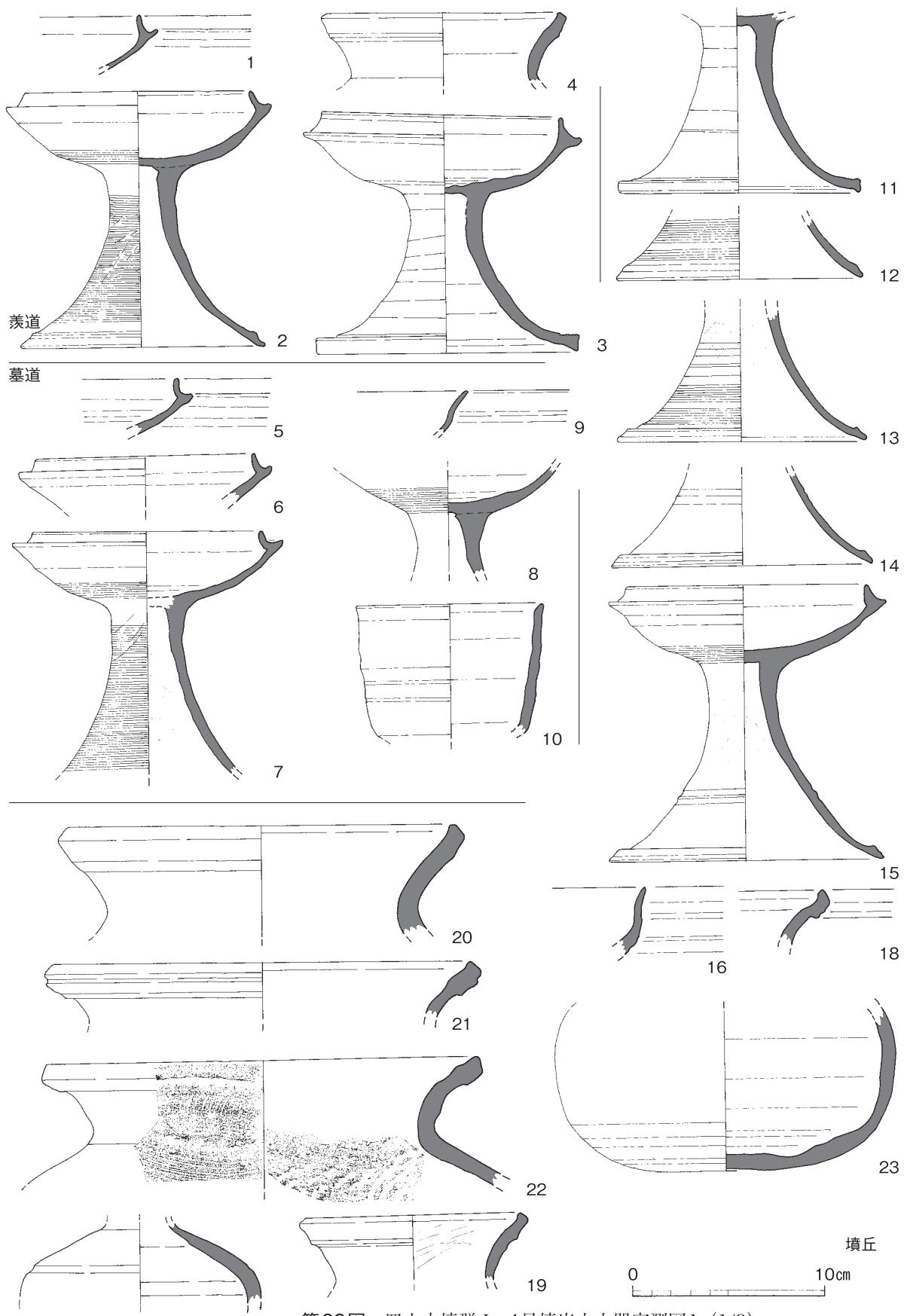
閉塞 羨道の南端部で閉塞の残骸を検出したが、原位置から移動しており、盗掘時に外されたものであろう。



第59図 皿山古墳群I-4号墳前室鉄製品
出土状況実測図(1/30)

iii) 出土遺物

主体部は盜掘を受けるため土器などの出土資料は僅かであるが、羨道仕切り石付近から鉄刀と轡が出土しており、盜掘時に持ち出したと思われる。また敷石内及び埋土からは玉類、鉄鏃、馬具な



第60図 皿山古墳群 I -4号墳出土土器実測図1 (1/3)

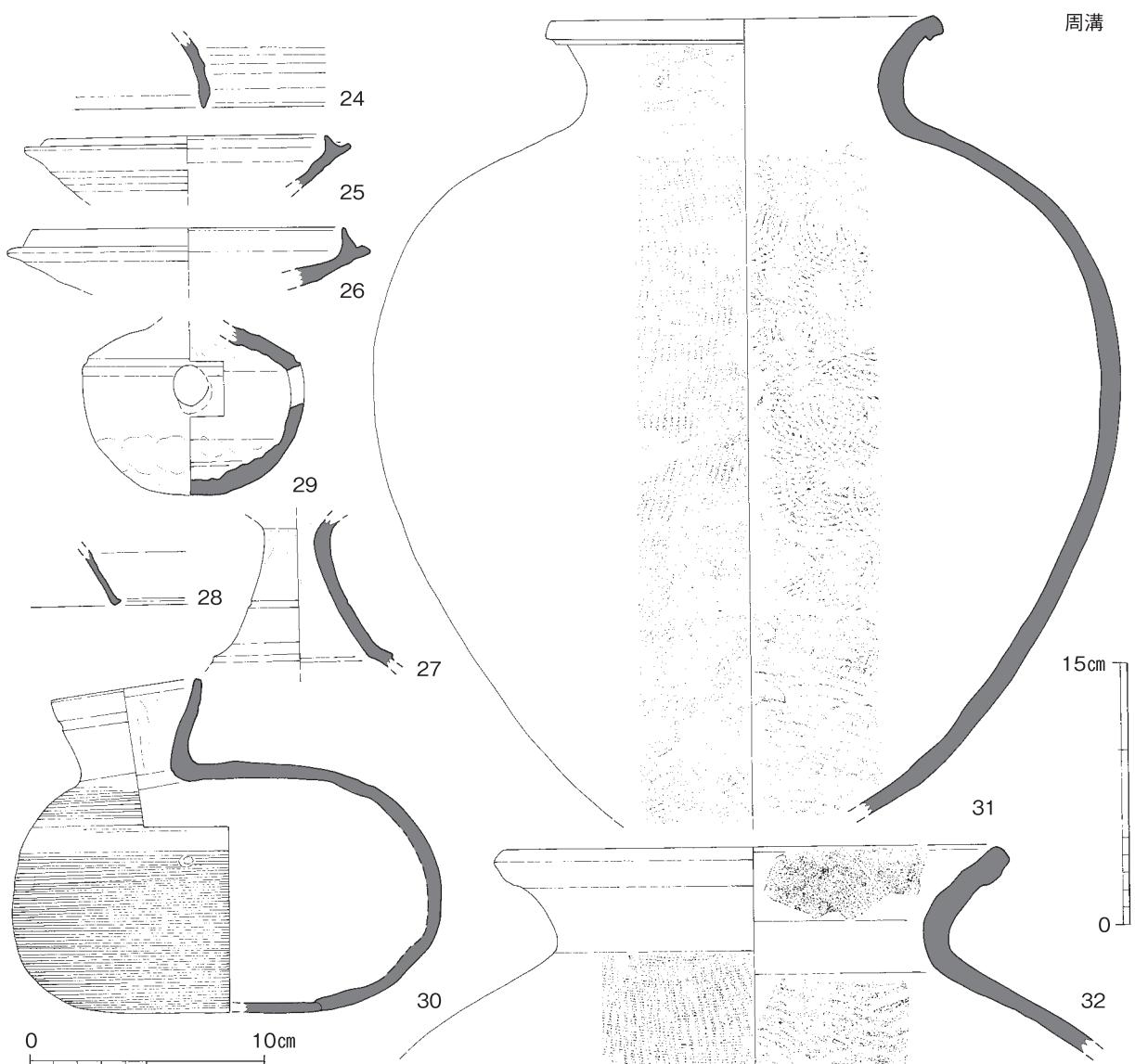
どが出土した。いずれも原位置を動いていると思われる。出土した土器は全て須恵器である。

①出土土器

羨道出土土器（図版58、第60図1～4） 1は杯身で硬質の一群である。口縁部は肥厚し、外面は灰被りで白色を呈する。2・3は高杯で、いずれも杯部は丸みをもち、外底部にカキ目が廻る。2は脚部にもカキ目が廻り、絞り痕が認められる。器壁が薄く脚端部に突帯が廻り、外面は黒変する。3は脚端部付近に浅い沈線が廻り、端部は肥厚して断面三角を呈する。外面から脚内部は灰を被る。4は壺口縁部で端部がやや肥厚し、その下に鋭い突帯状の段を有する。

墓道上層出土土器（第60図5～10） 5・6は杯身。いずれも硬質の一群で、端部は強く屈曲する。5は内面が灰被りで外面は黒変、6も外面が黒変する。7・8は高杯。7は器壁が薄く堅緻である。杯外底部と脚部に細かいカキ目が廻る。絞り痕が残り、内面と外面の一部は灰被りで黒変する。8も杯外底部にカキ目が廻り、内面は灰被りで外面は黒変する。9は壺口縁端部か。10はコップ型の杯で、器壁が薄く内外面とも撫でで、下位に浅い沈線が2条廻る。

墳丘出土土器（図版58、第60図11～23） 11～17は石室入り口向かって左、墳丘南裾からまとまって出土した土器である。

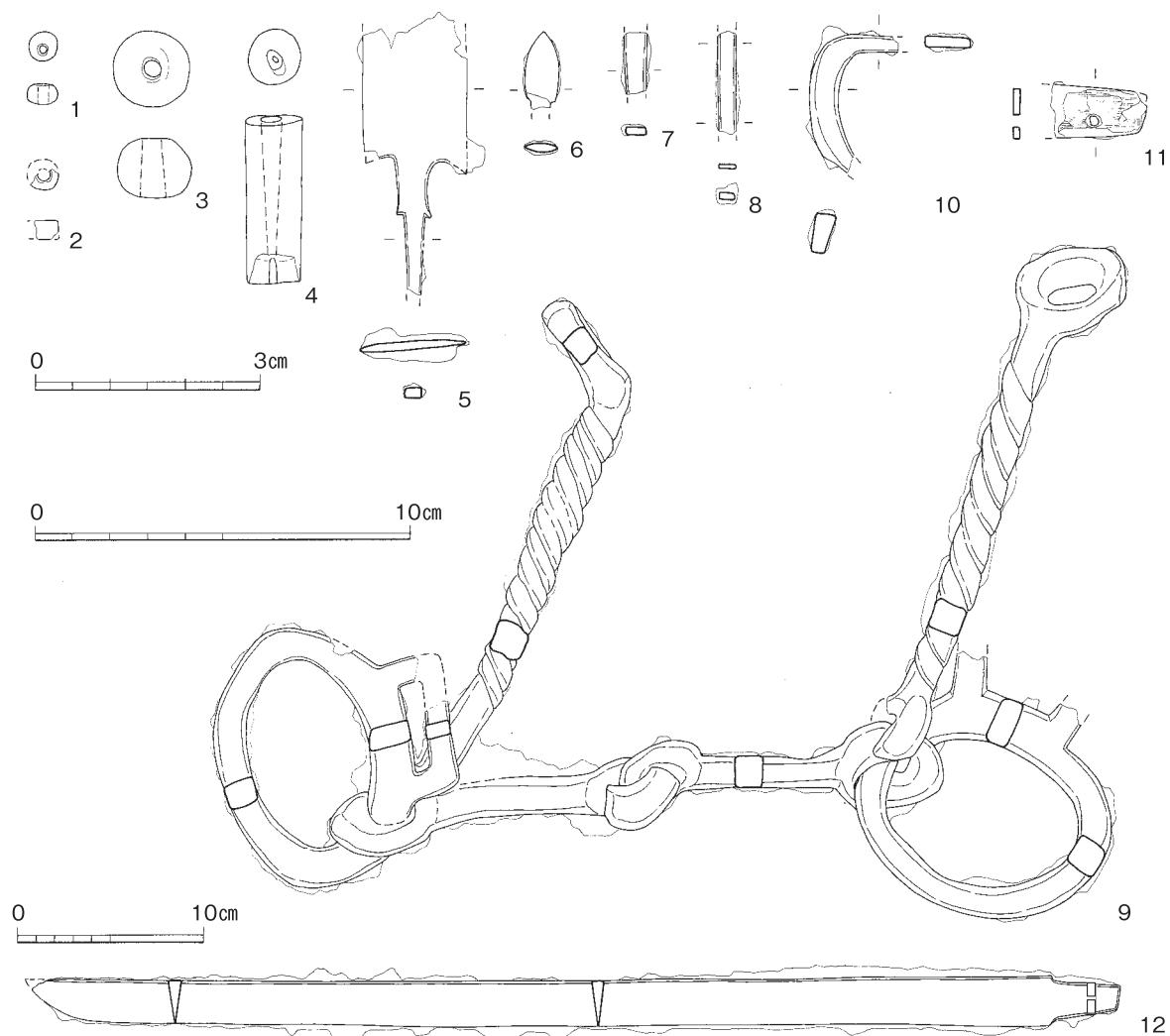


第61図 墓山古墳群I-4号墳出土土器実測図2 (31は1/4、他は1/3)

11～16は高杯。11は脚部の屈曲が強く端部が肥厚する。外面に絞り痕が残る。12～15は端部に突帯が廻るもので、器壁が薄く堅緻で灰を被る。12・13はカキ目が巡り、12は内面は灰被り、13は外面が黒変する。14は極めて器壁が薄く堅緻で、外面から端部内面が黒変する。15は口縁端部が肥厚して杯部外底にカキ目が廻る。脚部は絞り痕が残り、外面から端部内面にかけては灰被りで黒変する。16は返りのない口縁端部小片。17は頸部から肩部片で器壁が荒れる。体部上位が強く張り、頸部は細く肩部に浅い沈線を有する。18・19は壺。いずれも小片で、口縁が肥厚して端部が内側に屈曲し、肥厚部下位に突帯を有する。19は内面に絞り痕と粘土の継ぎ目が残る。20も壺か。頸部の屈曲は緩やかで口縁は僅かに屈曲して浅い段を有する。軟質で土師器様である。21・22は甕。21は口縁が肥厚して玉縁状になり、その上に突帯が廻る。端部も肥厚して内面に稜をもつ。軟質で焼きが甘く、断面は橙色を呈する。1号墳出土の軟質の器台と焼成が似る。22も口縁が肥厚して玉縁状を呈し、その下に刷毛目が認められる。外面は擬格子叩き後カキ目を廻らせ、内面は大きく浅い同心円が残る。内面は黒変し、1号墳出土の第39図154の甕と調整・焼成が近似する。23は平瓶の体部で外面は籠削り後下半部のみ横撫で調整する。

周溝出土土器（図版58、第61図24～32） 26以外は、北西側の周溝でまとまって出土した。

24は杯蓋で、器壁の凹凸がやや激しい。25・26は杯身で、25は深く外面に沈線が廻る。26は



第62図 三山古墳群 I-4号墳出土装身具・鉄製品実測図（1～4は1/1、12は1/4、他は1/2、）

浅く器壁が厚く軟質である。27・28は高杯脚部。27は外面に沈線が廻り、下位に段を有して屈曲する。内外面に絞り痕が残り、内面は茶色を呈し、断面は小豆色を呈する。28は器壁が極めて薄い。29は醴体部。最大径が肩部で、沈線を廻らせる。外底部は手持ち箒削りで整え、内面に対応する指圧痕が認められる。内面は茶色で外面に釉がかかる。30は平瓶で8割程度残存する。口縁は短く体部は丸みを帯びる。外面全面にカキ目が施され、内面は平撫で、底部の粘土接合痕が顕著で、接合部外面に工具痕が認められる。また体部中央に約5mm径の外から内へあけられた焼成前穿孔が1箇所ある。31・32は甕。31は口縁を折り曲げて玉縁状に作る。外面は擬格子叩き後に粗いカキ目を施し、内面には大きく細い同心円が残る。自然釉や灰被りの痕跡はなく、全体に軟質で淡灰色を呈する。32は口縁を肥厚させる。外面は擬格子叩き後カキ目を施し、内面は同心円が残る。口縁内面から外面にかけて灰被りで、一部黒変する。口縁内面には二本線の箒記号が認められる。

②特殊遺物

装身具

ガラス玉（図版60、第62図1～3） 1・2はガラス製小玉である。1は直径0.4cm、厚さ0.3cm、孔径0.15cmを測る。色調は紺青色。上の小口面が表面張力で全体に丸みを帯びており、鋳造技法による製作であろう。石室敷石内出土。2は1に比べてやや透明度が高い。石室埋土出土。3はガラス製丸玉である。直径1.0cm、厚さ0.8cm、孔径0.2～0.3cmを測る。色調は濃緑色で、表面はやや磨滅している。巻き付け技法による製作か。石室埋土出土。

管 玉（図版60、第62図4） 碧玉製の管玉である。直径0.7cm、長さ2.2cmを測る。上小口面で孔径0.35cm、下小口面で孔径0.1cmとなっているため、穿孔は上から下へ一方向に穿ったと考えられる。

鉄製品

鉄 鏃（図版61、第62図5～8） 5は柳葉形短頸鎧の破片である。鎧身部の造りは両丸造りで、鎧身関部は腸抉を有する。頸関部は台形を呈している。6は柳葉形長頸鎧の鎧身部であろう。7と8は頸部ないし茎部の破片である。

轡（図版61、第62図9） 素環鏡板付轡である。5cm×7cmの橢円形の素環鏡板の上部には幅4cmほどの立闇がつくられている。引手壺は一辺0.9cmの断面隅丸方形の鉄棒の先を丸く曲げることで形成している。引手壺をはじめ、銜の連結部分の継目に関しても継目は見えない。

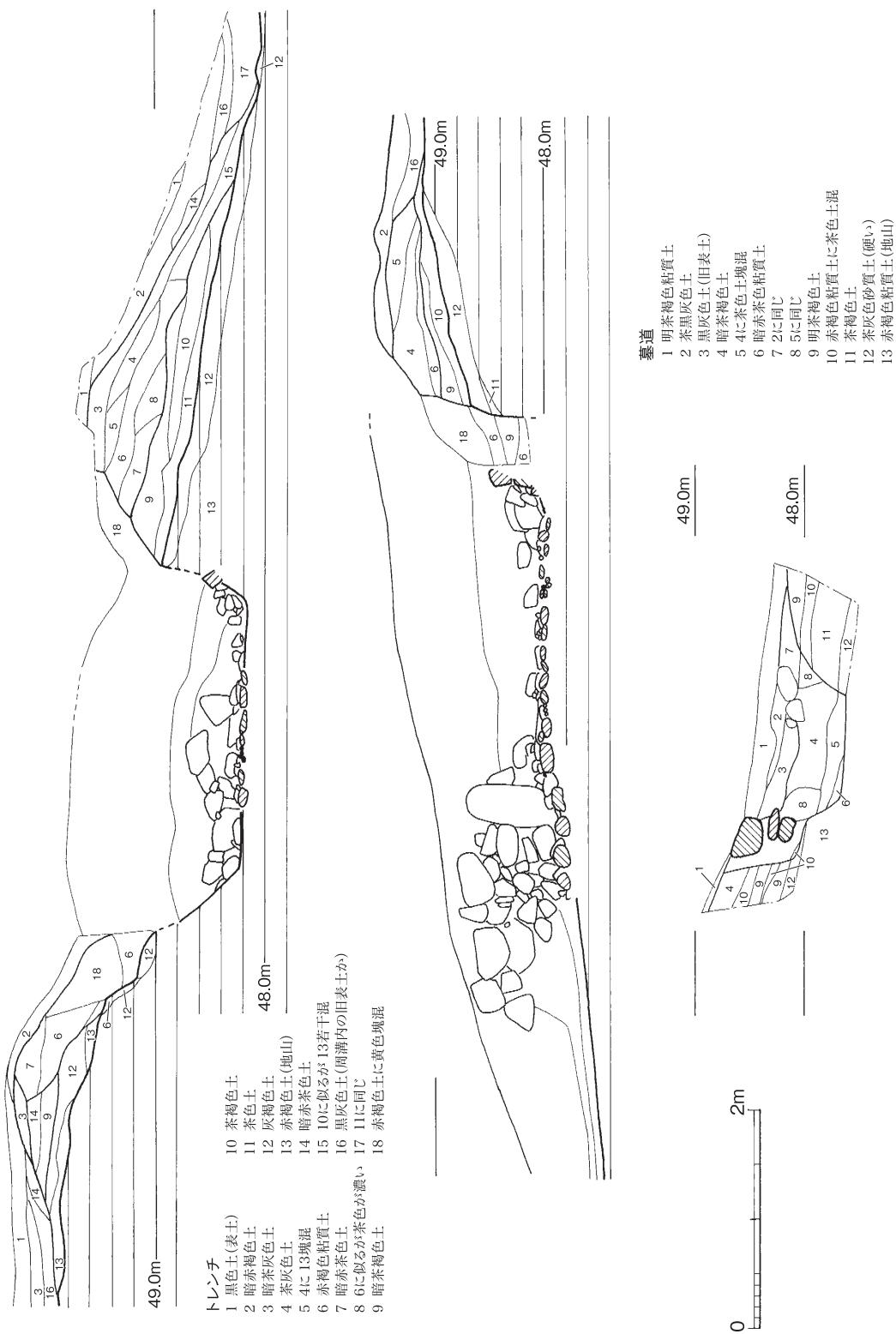
不明鉄製品（図版61、第62図10） 鉄棒を丸く織り曲げて形成されている。形状から鞍具等の連結機能を果たす馬具製品と考えられるが、詳細は不明である。

刀 子（図版61、第62図11） 刀子の茎片である。残存長2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.2cmを測る。全面に木質が残存しており、目釘孔が1孔認められる。

鉄 刀（図版60、第62図12） 直刀である。残存長58.1cm、刀身幅2.35cm、茎幅2.0cm、背厚0.7cm、茎厚0.5cmを測る。刀身部は刀先がわずかに欠損している。目釘孔が1孔認められ、両関である。茎が短いが欠損した形跡は認められず、元々短かったものと推定される。

6) 5号墳（図版49・50、第63・64図）

5号墳は調査区内の最北部、2・4号墳の北側に位置する。4号墳と同規模と思われるが、墳丘がほとんど削平され、石室・墓道も上半部を削平されて陥没していたため明確ではない。

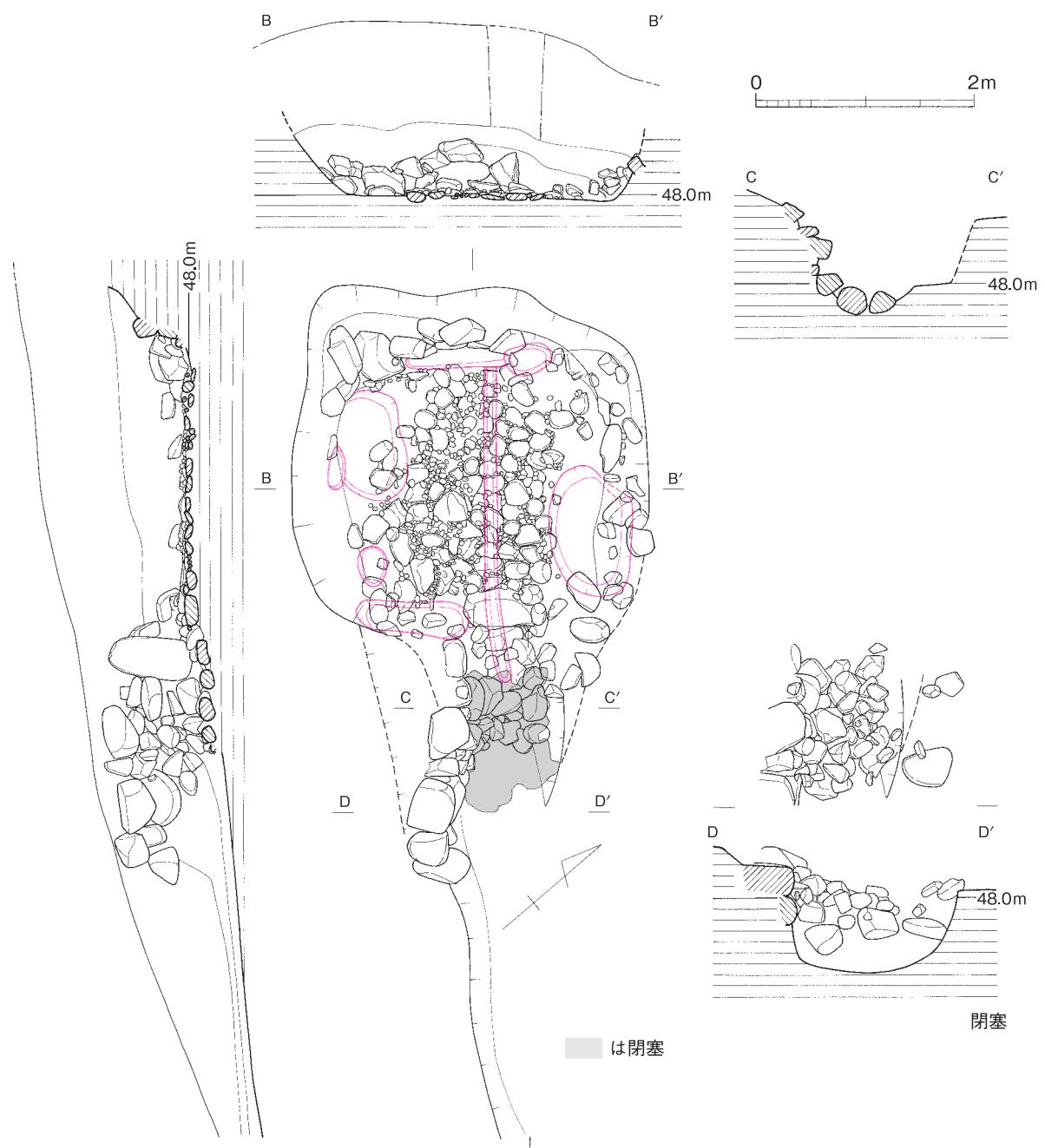


第63図 III山古墳群 I-5号墳墳丘土層断面実測図 (1/60)

i) 墳丘

墳丘のほとんどが削平されているが、現況では比較的残りの良い南北長で9mを測る。墳丘の調査は、主体部主軸にあわせて3本のトレンチを設定した。

東側に下る緩やかな斜面に作られたためか、旧表土は残らないものの地山をほとんど整形せず、茶色土を中心とした盛土で平坦面を作っている。ある程度墳丘を積み上げた段階で石室掘方を掘り込んでいるよう、盛土は水平に近い傾斜で全体的に積み上げる。盛土は地山の赤褐色粘質土と茶色土、灰色土が中心で、一次墳丘の形成は明確ではなく、掘形内部は赤褐色粘質土と小型の石材による裏込めで固めている。周溝は残りが悪く南側の一部を確認したのみである。



第64図 皿山古墳群 I-5号墳主体部実測図 (1/60)

ii) 主体部

主体部は南東に開口する単室の横穴式石室である。

玄室 天井石や鏡石は失われ、側壁の石材もその後の攪乱によって周辺と内部に散在していた。框石と玄室の裏込め石の一部、敷石が残存するのみである。玄室は床面レベルが48mで、規模を敷石残存範囲から推定すると、長軸3.1m、短軸2.0mの長方形となる。左袖が膨らむため片袖式の様に見えるが、失われた袖石の横長形状による可能性があり、完全に片袖を意識していたかは不明である。穴ヶ葉山4号墳など周囲の古墳の石室にも見られる。玄室内は土砂が充填していたため敷石の残りが良く、20cm前後の扁平石を敷き詰めてその上に小石を被せる状況が良好に残っていた。敷石下には石室長軸方向に排水溝が敷設され、羨道部までの約2.8mが検出できた。側壁腰石はその床面に残る痕跡から2個ずつ据えられたと考えられる。玄門の袖石は失われているが、床面の痕跡から横長の形状が想定できる。

羨道 側壁には高さ0.7mほどの扁平な石を立てて使用している。2・4号墳では羨道部側壁に玄門の袖石と同規模の立柱石が並ぶ形態があり、同様の形態であった可能性も考えられる。羨道部は大きく削平されているものの、左袖に側石が約2m残存し、扁平な石を積み上げて上位を大石で押さえ天井石を架構したようである。框石から約1mの羨道部には小振りの礫が集中しており、閉塞石の残骸と考えられる。墓道は左袖のプランが約2.6m残り、やや東寄りに延びるようである。

石室堀方 残存部で下端2.4×2.3mの隅丸方形を呈し、壁は緩やかに傾斜して盛土の上から切り込まれる。

iii) 出土遺物

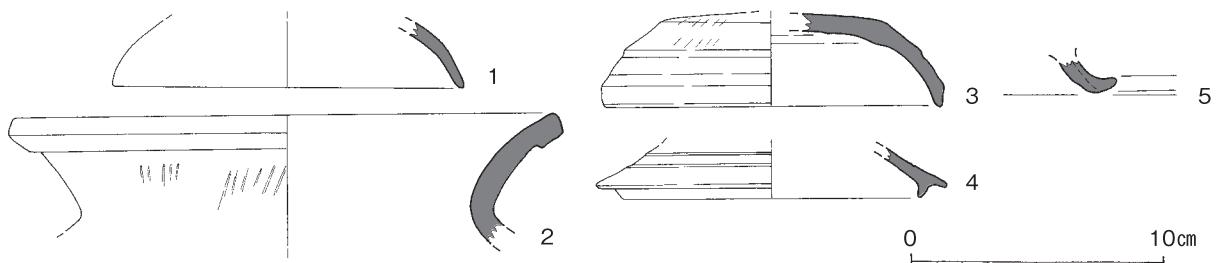
盗掘を受けているらしく土器はほとんどないが、玄室敷石の間からはヒスイ製の勾玉やガラス小玉、水晶の切子玉、耳環などが出土した。

①出土土器

出土した土器はすべて須恵器である。

墓道出土土器 (第65図1・2) 1はやや低い蓋の口縁部小片。2は端部が玉縁状を呈する甕で、外面に刷毛目が認められる。内面に灰色の自然釉がかかり、外面は黒色を呈する。

墳丘出土土器 (第65図3~5) 3・4は蓋。3は杯蓋で、天井部1/2を回転籠削りでやや平坦に作り、中位には僅かに段を有する。端部は若干屈曲して直に垂下する。4は壺蓋で返りと摘みを有するが摘み部を欠く。天井部2箇所に沈線を有し、返りは短くやや内傾する。やや軟質である。



第65図 畠山古墳群 I-5号墳出土土器実測図 (1/3)

5は脚付壺の脚端部か。端部は跳ね上げ、断面に粘土の継ぎ目が認められる。

②出土特殊遺物

装身具

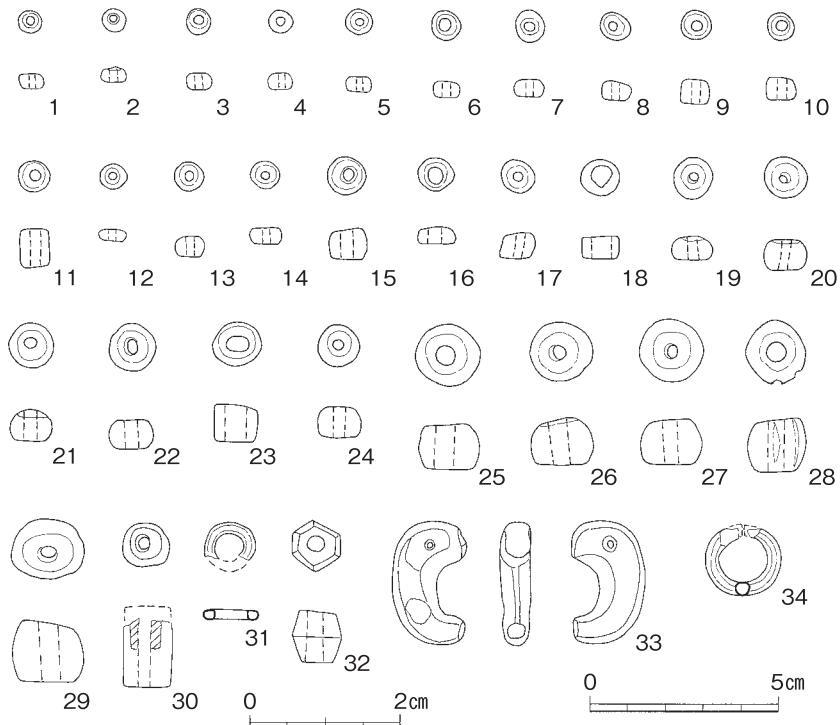
ガラス玉(図版61、第66図1~30) 30個のガラス玉が出土した。数点が石室内敷石で出土したが、ほとんどが石室埋土のふるい作業によって検出されたものである。1~24がガラス製小玉、25~30がガラス製丸玉である。ガラス製小玉は直径0.3~0.6cm、厚さ0.18~0.5cm、孔径0.1~0.3cmを測る。色調は青緑、黄色、紺青、明青があり、青緑と明青の数が多い。ガラス製丸玉は直径0.8~0.95cm、厚さ0.6~0.8cm、0.15~0.25cmを測る。色調は28のみが白色で、他は紺青色である。いずれも丸玉内部の気泡の流れが孔に沿って平行になっていることから、引延切断技法で製作されたものと考えられる。28の側面には引延時の気泡の溝がみられる。30は丸玉の一種とみられるが、直径0.7cm、厚さが0.9cmとやや細長い形状を呈する。引延切断技法によって製作されているが内部に黄色の混入物が認められる。

土 玉(図版61、第66図31) 31は直径0.6cm、厚さ0.15cmで、細いリング状の形態を呈する。黒色で、製作技法は不明であるが、表面に極細のスジがみられる。土製か。

切子玉(図版61、第66図32) 水晶製の切子玉である。長さ0.7cm、幅0.65cm、厚さ0.7cm、孔径0.2~0.3cmで、六角形を呈する。透明度は若干不良である。

勾 玉(図版61、第66図33) 玄室敷石内で勾玉が1点出土した。白瑪瑙製で濁白灰色を呈する。体部の抉りは浅い。最大長3.3cm、最大幅1.8cm、最大厚0.75cm、孔径は0.2cmを測る。穿孔は一方向で右から左に穿つ。

耳 環(図版61、第66図34) 銅地銀張の耳環である。外径1.9cm×2.0cm、内径1.2cm×1.25cm、抉入部の間隔は0.1cmを測る。



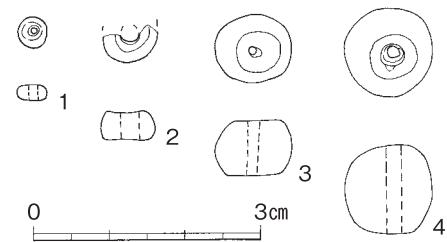
第66図 皿山古墳群 I-5号墳出土装身具実測図 (1/2, 1/1)

7) その他の遺構と遺物

i) 帰属不明の遺物

各古墳石室内的土をふるったが、その中で出土古墳が不明の遺物である。

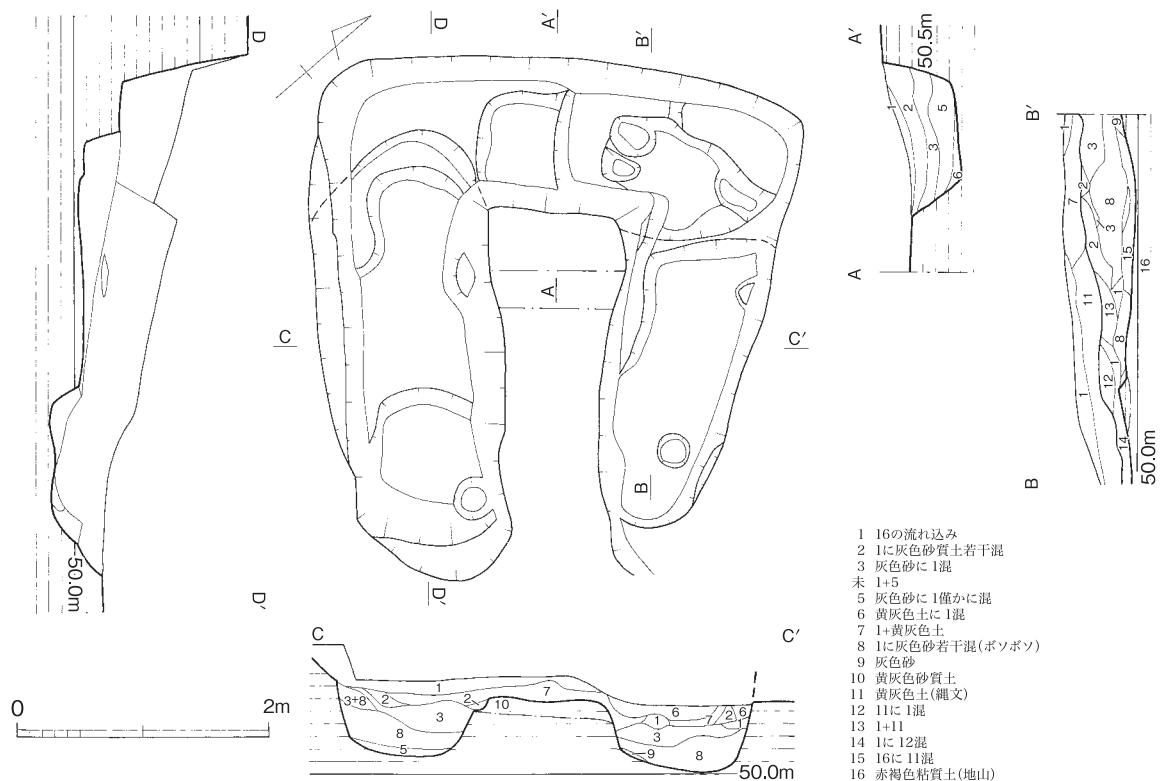
ガラス玉（図版61、第67図1～4） 1はガラス製小玉である。直径0.4cm、厚さ0.2cm、孔径0.15cmを測る。色調は紺青色。孔内縁に赤土色の物質が付着しており、鋳造後小玉を取り出す際の離解剤であった可能性が考えられる。2～4はガラス製丸玉である。3・4は紺青色、2は明緑色で、2は表面の磨滅が著しい。4は直径1.15cm、厚さ1.2cm、孔径0.3cm、3は直径1.0cm、厚さ0.75cm、孔径0.2cmで、とともに胴張りの形態である。4が丸味を帯びた小口であるのに対して、3は平坦であるため、3は引延切断技法で製作されたものと考えられる。



第67図 皿山古墳群I区古墳出土
装身具実測図(1/1)

ii) 石室掘方遺構（図版51、第68図）

2号墳の南西側墳丘除去後に下層で検出した遺構である。約4m四方の方形プランを持ち、東向きのコの字を呈する。検出時は方形の豊穴住居跡の可能性を考えてトレンチを入れたが、中央に地山が露出してこのような形になった。東西北の壁は直に立ち上がり、南側は緩やかに立ち上がる。埋土は下位が地山や周辺の土を入れたように一括で埋められ、上位は同様の土が流れ込んだように堆積する。検出当初何の遺構か不明であったが、形状から石室掘方であろうと推察した。底は凹凸があり、鏡石、腰石設置のために太線の単位で掘削されたようである。石材や石材設置の痕跡はなく、



第68図 皿山古墳群I区石室掘方状遺構実測図(1/60)

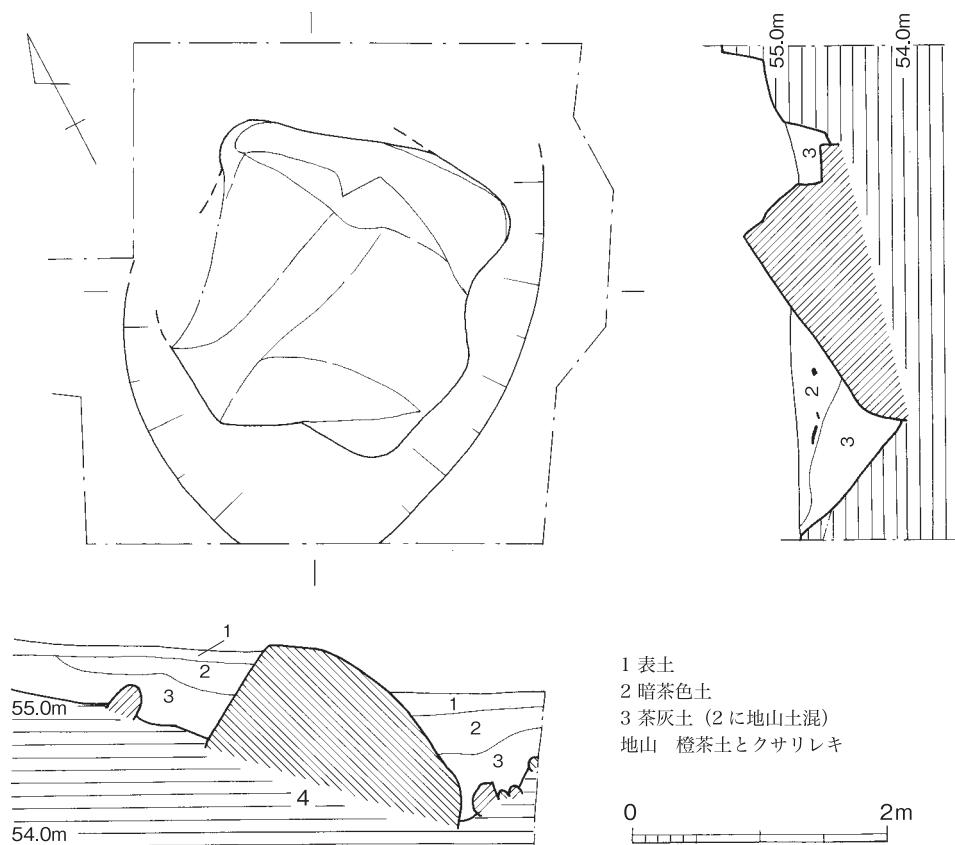
遺物はまったく検出されなかつた。確定的なことは言えないが、掘削途中に何らかの事情で石室構築が取りやめになり、その横に2号墳の石室が掘られて墳丘が造られたと思われる。古墳築造中の立ち退きか。

これが石室堀方であると考えると、その形状が興味深い。最も深い北東側、鏡石を据える位置の深さは約1mと深い。また玄室床面となるべき中央の高まりから石材設置面までも約0.5mの高さがある。今回調査した5基の石室堀方では、床面から石材設置面までの深さがここまで深いものではなく、2号墳内に僅かにその痕跡と思われる段は確認しているものの、堀方内のレベル差はここまで認められない。

のことから、堀方掘削時点では石材を据えやすく倒れにくくするために石室床面部分は高まりのまま残し、石室石材が確実に構築された後に、石室床面を都合の良い高さまで削って排水溝・敷石を設置すると考えられる。

iii) 石材採取土坑（図版52、第69図）

1号墳の西側、調査区の最も高所で検出した土坑である。遺構確認のトレンチによる確認調査で検出した。部分的に明確な掘方が検出できなかつたが、長軸3.2m、短軸約3.0mの不整形土坑である。中央に直径約2.6mの地山から露出した花崗岩塊があり、はつり痕があることから石材を採取したと思われる。深さは深い部分で約1.4mあるが、はつり痕は上部のみで下位は掘削途中で中断した様相である。岩塊が下位に向かって大きくなつており、巨石を採取しようとしたが地山が堅固になり、掘削をあきらめて上位の石材だけ採取したと思われる。出土遺物はほとんど無く、埋土は流れ込みと見られるもので、掘削後は放置されたのであろう。各古墳の石材は花崗岩と安山岩が主体であり、他所から搬入した材と地元調達の石材と捉えられ、墳丘内に使用されている石材は地元調達で、このように採取されたのであろう。調査区周辺には他にも近似した岩塊があり、同様に古墳築造の為の採取とも考えられる。なお埋土からは弥生土器が出土したが、混入と思われる。



第69図 三山古墳群石材採取土坑実測図 (1/60)

表2-1 皿山古墳群I区古墳出土須恵器観察表1

捕団番号	番号	登録番号	号数	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	調整	特徴	焼成	色調
32	1	271	1	羨道埋土	須恵器	高杯	-	-	10.1	-	0.5	外面回転ナデ・内面工具ナデ	薄い、歪み大、灰被り	堅緻	淡灰色
32	2	267	1	羨道埋土	須恵器	廳	-	-	-	9.6	0.6	外底部1/2回転ケズリ・内底部不定方向ナデ	斜めに穿孔、穿孔小、断面橙色	軟質	淡灰色
32	3	238	1	墓道	須恵器	杯	(14.2)	3.5	-	(16.2)	0.2	外底部1/3回転ヘラケズリ・内底部不定方向ナデ	極めて薄い、外底部灰被りで黄変	堅緻	灰色
32	4	239	1	墓道	須恵器	壺	-	-	-	-	-	外面ハケメ	外面灰被り、内面茶色の厚い自然釉	良好	淡灰色
32	5	268	1	北西側トレンチ	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.2	天井部粗い回転ナデ・内面不定方向ナデ	宝珠摘み、粗いナデ、天井部一部黒変	やや軟質	暗灰色
32	6	234	1	南墳丘裾	須恵器	杯	-	-	-	-	0.1	外底部2/3回転ヘラケズリ	内面黒紫色	良好	灰色
32	7	151	1	東墳丘内	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	内面黒変、沈線2条、外面部灰被り	良好	黒灰色
32	8	276	1	東周溝内	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.2	外面カキメ状工具ナデ・沈線、内面上位工具ナデ	外面沈線	良好	灰色
33	1	123	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(12.8)	-	-	-	0.1	回転ナデ	外面灰被り	良好	灰色
33	2	81	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(13.0)	(2.9)	-	-	0.2	天井部1/2回転ヘラケズリ	ヘラ記号、外面一部黒変、やや薄い	堅緻	灰色
33	3	152	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(13.0)	-	-	-	0.5	天井部1/2回転ヘラケズリ	天井部火搾状に黒変	良好	灰色
33	4	124	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(13.2)	3.2	-	-	0.9	天井部1/2回転ヘラケズリ	天井部ヘラ記号、内面黒粒釉多し、薄い	良好	灰色
33	5	187	1	南墳丘裾下層	須恵器	蓋	(13.6)	-	-	-	0.3	天井部2/3回転ヘラケズリ・内天井部不定方向ナデ	ヘラ記号	良好	灰色
33	6	54	1	南墳丘裾上	須恵器	蓋	(13.6)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	凹凸多し	やや軟質	灰黄色
33	7	126	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(13.8)	-	-	-	0.3	天井部2/3回転ヘラケズリ・内天井部不定方向ナデ	やや薄い、凹凸多し	良好	灰色
33	8	49	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(13.8)	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ		良好	灰色
33	9	258	1	南墳丘裾大甕1	須恵器	蓋	(15.2)	-	-	-	0.1	段あり	外面一部黒変	軟質	灰色
33	10	112	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(14.0)	-	-	-	0.1	天井部2/3回転ヘラケズリ	器壁厚い	良好	灰色
33	11	132	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(14.0)	-	-	-	0.2	天井部2/3回転ヘラケズリ・内天井部不定方向ナデ	ヘラ記号、内面灰被り	堅緻	灰色
33	12	92	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(14.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	薄い、器壁凹凸多し	極めて良好	灰色
33	13	116	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(14.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	薄い、外面部黒変	良好	灰色
33	14	153	1	南墳丘裾	須恵器	壺	(14.4)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	浅い沈線	良好	灰色
33	15	110	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(15.0)	4.0	-	-	0.1	天井部1/2回転ヘラケズリ	ヘラ記号、外面一部黒変、内面黒粒釉付着	堅緻	灰色
33	16	119	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(15.0)	-	-	-	0.2	天井部2/3回転ヘラケズリ	外面紫、内面灰被り、凹凸多し	良好	淡灰色
33	17	89	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(15.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	黒粒釉多し	良好	灰色
33	18	87	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(15.0)	-	-	-	0.1	天井部2/3回転ヘラケズリ	器壁荒れる、薄い	堅緻	灰色
33	19	189	1	南墳丘裾B	須恵器	蓋	(15.6)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	器壁厚い	やや軟質	灰色
33	20	194	1	南墳丘裾C	須恵器	蓋	(15.5)	-	-	-	0.1	天井部回転ヘラケズリ	器壁やや厚い	良好	灰色
33	21	79	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(16.0)	-	-	-	0.1	天井部回転ヘラケズリ	歪み大、外面部黒変	良好	灰色
33	22	100	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.2	天井部2/3回転ヘラケズリ	薄い	堅緻	灰色
33	23	57	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.1	天井部回転ヘラケズリ	薄い、外面部器壁美	良好	灰黄色
33	24	61	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	外面部灰被り、黒変	良好	黒灰色
33	25	95	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	やや厚い	良好	灰色
33	26	91	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部屈曲	良好	淡灰色
33	27	53	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(12.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	口縁屈曲、薄い、胎土精緻、器種不明	良好	灰色
33	28	259	1	南墳丘裾大甕1	須恵器	蓋	(14.4)	-	-	-	0.1	天井部回転ヘラケズリ	段・沈線あり	やや軟質	灰色
33	29	257	1	南墳丘裾大甕1	須恵器	蓋	(13.8)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	段・沈線あり、	軟質	淡灰色
33	30	261	1	南墳丘裾大甕1	須恵器	蓋	(15.4)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	外面一部黒変 段・沈線あり	軟質	灰色
33	31	255	1	南墳丘裾大甕1	須恵器	壺蓋	(9.6)	-	-	(12.6)	0.1	内外面回転ナデ	返りあり	軟質	淡灰色
33	32	216	1	墓道外側	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.2	天井部1/2回転ヘラケズリ・内天井部不定方向ナデ	摘みあり、外面部段あり、剥離多し	やや軟質	灰黄色
33	33	105	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.1	天井部1/2回転ヘラケズリ・内天井部不定方向ナデ	摘みあり	軟質	黄灰色
33	34	51	1	南墳丘裾	須恵器	蓋	(15.1)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	内面灰被り、外面部黒変	良好	暗灰色
34	35	165	1	南墳丘裾B	須恵器	杯	(11.0)	-	-	(13.2)	0.2	外底部回転ヘラケズリ		良好	灰色
34	36	58	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(11.0)	-	-	(13.2)		内外面回転ナデ	受け部灰被り、黄変、器壁荒れ激しい	良好	黄灰色
34	37	240	1	墓道外側一括	須恵器	杯	(11.0)	-	(6.8)	(13.2)	0.2	体部中位まで回転ヘラケズリ	深い、器壁が厚い、外面部線状に自然釉被る	良好	淡灰色
34	38	155	1	南墳丘裾B	須恵器	杯	(11.6)	3.65	(6.6)	(13.6)	0.3	外底部2/3回転ヘラケズリ・内底部不定方向ナデ	やや薄い	良好	灰茶色
34	39	66	1	南墳丘裾	須恵器	杯	11.7	3.9	-	(13.8)	0.3	外底部2/3回転ヘラケズリ・内底部不定方向ナデ	ヘラ記号、全体に灰被り、黒粒釉付着	堅緻	灰色
34	40	44	1	南墳丘裾	須恵器	杯	11.8	3.7	13.8	14.0	0.7	外底部1/2回転ヘラケズリ	ヘラ記号、外底部ケズリが粗く一部未調整、薄い	堅緻	灰色
34	41	181	1	南墳丘裾C-D	須恵器	杯	(12.0)	4.6	6.0	(14.4)	0.4	外底部3/4回転ヘラケズリ	内底部に約1cm径の未貫通の孔が複数、内面・受け部黒紫色	良好	灰色
34	42	64	1	南墳丘裾・墓道外側	須恵器	杯	(11.8)	3.9	(7.2)	(14.0)	0.6	外底部1/2回転ヘラケズリ、内底部不定方向ナデ	ヘラ記号、内面黒変、44と近似する	堅緻	灰色

表2-2 皿山古墳群I区古墳出土須恵器観察表2

番号	番号	登録番号	号数	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	調整	特徴	焼成	色調
34	43	98	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(11.8)	3.3	8.0	(14.0)	0.4	外底部ヘラ切り未調整	薄い	堅緻	灰色
34	44	65	1	南墳丘裾	須恵器	杯	11.7	3.4	(6.6)	13.8	0.5	外底部2/3回転ヘラケズリ・内底部不定方向ナデ	ヘラ記号、内外面灰被り、外面部壁が荒れて黄変、内面焼き膨れあり、黒粒釉多し	堅緻	黒灰色
34	45	43	1	南墳丘裾	須恵器	杯	12.3	3.7	7.4	14.7	0.7	外底部1/2回転ヘラケズリ・内底部不定方向ナデ	深い、底部丸い、全体灰被り、器壁が荒れて黄変、内面焼き膨れあり、黒粒釉多し	堅緻	暗灰色
34	46	192	1	南墳丘裾B	須恵器	杯	(12.3)	3.05	5.6	(14.6)	0.3	外底部3/4回転ヘラケズリ・内底部不定方向ナデ	扁平、砂粒多し	良好	暗灰色
34	47	46	1	南墳丘裾	須恵器	杯	12.4	3.8	6.7	14.6	0.5	外底部2/3回転ヘラケズリ・内底部不定方向ナデ	器壁やや薄い、外面一部紫変	良好	灰色
34	48	115	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(14.6)	-	-	(14.6)	0.1	外面回転ナデ	灰被りで黄変、黒粒釉、受け部端部黒変	良好	黒灰色
34	49	50	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(12.6)	-	-	(14.8)	0.2	外面回転ナデ	極めて薄い、凹凸多し	堅緻	灰色
34	50	135	1	南墳丘裾	須恵器	杯	12.7	3.5	8.5	14.8	0.6	外底部手持ちヘラケズリ	薄い	堅緻	灰色
34	51	93	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(12.8)	-	-	15.0	0.1	外面回転ナデ	極めて薄い、凹凸多し	堅緻	灰色
34	52	197	1	南墳丘裾B	須恵器	杯	(12.9)	-	-	(15.0)	0.2	外面回転ナデ	内底部重ね焼きの痕跡、内面灰被り、外面黒変	良好	灰色
34	53	45	1	南墳丘裾	須恵器	杯	12.9	-	-	15.1	0.6	外底部1/2回転ヘラケズリ	全体灰被り、やや厚い	良好	灰色
34	54	125	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(15.0)	-	-	(15.0)	0.1	外面回転ナデ	外面灰被り、薄い	良好	灰色
34	55	42	1	南墳丘裾	須恵器	杯	12.9	4.5	5.8	15.0	0.6	外底部1/2回転ヘラケズリ	外面灰被り	堅緻	灰色
34	56	104	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(13.0)	-	-	(15.0)	0.2	外底部2/3回転ヘラケズリ・内底部不定方向ナデ	器壁荒れる、全面灰被りで黄変、黒粒釉・ガラス釉	堅緻	黄灰色
34	57	164	1	南墳丘裾B	須恵器	杯	(14.0)	-	-	(16.0)	0.2	外面ナデ、内底部不定方向ナデ	外底部ヘラ記号	良好	灰色
34	58	182	1	南墳丘裾B	須恵器	杯	(12.1)	-	-	(14.6)	0.2	外面回転ナデ	外面黒変	軟質	灰黄色
34	59	75	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(12.2)	-	-	(14.4)	0.1	外面回転ナデ	器壁荒れる	軟質	灰黄色
34	60	133	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(12.8)	-	-	(15.0)	0.1	外面回転ナデ	外面灰被り	軟質	茶灰色
34	61	185	1	南墳丘裾B	須恵器	杯	(12.8)	-	-	(15.2)	0.1	外面回転ナデ	軟質	黄灰色	
34	62	85	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(13.0)	-	-	(15.0)	0.1	外面回転ナデ	軟質	茶灰色	
34	63	94	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(13.1)	-	-	(15.0)	0.1	外面回転ナデ	軟質	茶灰色	
34	64	72	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(13.6)	-	-	(15.4)	0.1	外面回転ナデ	軟質	灰黄色	
34	65	78	1	南墳丘裾	須恵器	杯	(14.0)	-	-	(16.0)	0.1	外面回転ナデ	外面一部黒変	軟質	茶灰色
34	66	62	1	南墳丘裾	須恵器	杯	-	-	-	-	0.1	外面回転ナデ	受け部端部黒変	軟質	茶灰色
34	67	121	1	南墳丘裾	須恵器	杯	-	-	-	-	0.1	外面回転ナデ	器壁荒れる、外面灰被りで黒変	良好	灰色
35	68	47	1	南墳丘裾土器群	須恵器	高杯	12.8	-	-	14.5	0.7	环部外底部カキメ、内底部不定方向ナデ、脚部中位沈線、外面下位カキメ	透かし2段、内面灰被り、外面自然釉、全面黒色	良好	黒色
35	69	219	1	南墳丘裾G	須恵器	高杯	(14.9)	14.0	17.5	(16.0)	0.8		透かし2段	軟質	茶灰色
35	70	73	1	南墳丘裾・墓道外側	須恵器	高杯	(12.8)	-	-	(15.0)	0.1	外底部1/2回転ケズリ・内底部不定方向ナデ	透かし、外面釉垂れ	軟質	灰黄色
35	71	111	1	南墳丘裾	須恵器	高杯	(14.0)	-	-	(15.6)	0.2	内底部不定方向ナデ	透かし2カ所、断面橙色	軟質	黄灰色
35	72	180	1	南墳丘裾I	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.4	外面回転ナデ、脚中位沈線2条	断面橙色	軟質	灰色
35	73	106	1	南墳丘裾	須恵器	高杯	12.4	12.6	12.4	-	0.9	外底部ヘラケズリ、屈曲部段あり、体部沈線2条	ほぼ完形、透かし2段×3カ所、内面灰被り、黒粒釉	良好	灰色
35	74	227	1	南墳丘裾大甕1・1	須恵器	高杯	(12.5)	-	-	-	0.3	外面回転ナデ、脚部沈線2条、环部段あり	透かし2段×3、薄い、内面灰被り、环内面黄変、外面黒変	堅緻	暗灰色
35	75	188	1	南墳丘裾	須恵器	高杯	(14.4)	-	-	-	0.1	外面回転ナデ、刺突文、突帶		やや軟質	灰色
35	76	277	1	南墳丘裾	須恵器	高杯	(12.8)	-	-	-	0.2	内底不定方向ナデ、ヘラ書き斜行文、凸带、段あり	外底部ヘラ描きあり、内面灰被り、外面自然釉で黒変	良好	黒灰色
35	77	103	1	南墳丘裾	須恵器	高杯	-	-	(12.0)	-	0.2	外面回転ナデ、中位2条、裾部1条沈線あり	透かし2段×3カ所、外面自然釉、一部黒変、裾部端部黒変	良好	灰色
35	78	118	1	南墳丘裾	須恵器	高杯	-	-	(12.0)	-	0.1	外面回転ナデ、端部は直上げ	極めて薄い、外面灰被り、内面黒変	堅緻	暗灰色
35	79	139	1	南墳丘裾E・大甕1	須恵器	高杯	-	-	(15.8)	-	0.2	外面カキメ	歪み、有段、端部跳ね上げ、内面灰被り・黒粒釉、外面黒変	堅緻	灰色
35	80	260	1	南墳丘裾大甕1	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.1	外面回転ナデ、沈線3条あり		軟質	淡灰色
35	81	184	1	南墳丘裾B	須恵器	高杯	-	-	(14.6)	-	0.4	外面回転ナデ、裾外面カキメ後ナデ、中位沈線2条	透かし2段×3、裾平坦、外面一部黒変	良好	灰色
35	82	168	1	南墳丘裾H	須恵器	高杯	-	-	(11.0)	-	0.3	外面回転ナデ	裾平坦	軟質	灰茶色
35	83	171	1	南墳丘裾	須恵器	高杯	-	-	(11.0)	-	0.1	外面回転ナデ	透かしあり、裾平坦	やや軟質	茶灰色
35	84	191	1	南墳丘裾B	須恵器	高杯	-	-	(14.0)	-	0.1	外面回転ナデ	裾平坦、端部折り曲げ、透かしあり、87に近似	やや軟質	暗灰色
35	85	174	1	南墳丘裾B	須恵器	高杯	-	-	(14.0)	-	0.4	外面回転ナデ、下位カキメ後ナデ	裾屈曲、透かし3カ所、外面黒変	良好	暗灰色
35	86	59	1	南墳丘裾・東側周溝内	須恵器	高杯	-	-	(14.2)	-	0.1	外面回転ナデ	透かしあり、裾平坦、端部折り曲げ	良好	やや軟質
35	87	215	1	南墳丘裾B	須恵器	高杯	-	-	(14.6)	-	0.2	外面回転ナデ	裾平坦、端部折り曲げ、透かしあり、生焼け、84に近似	やや軟質	茶灰色
35	88	156	1	南墳丘裾B・墓道理土	須恵器	高杯	-	-	14.6	-	0.3	外面回転ナデ	裾平坦、端部僅かに折り曲げ	軟質	灰茶色
36	89	236	1	南墳丘裾I	須恵器	廳	-	-	-	5.6	0.8	外底部手持ちヘラケズリ、頸部沈線2条	ミニチュア、口線上位と外面灰被り	良好	暗灰色

表2-3 皿山古墳群I区古墳出土須恵器観察表3

番号	番号	登録番号	号数	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	調整	特徴	焼成	色調
36	90	157	1	南墳丘裾E	須恵器	瓶	9.8	10.2	2.3	-	0.9	外底部ナデ、口縁・頸部へラ描き斜行文、沈線2条	ミニチュア、口縁屈曲、底部厚い、穿孔粘土が内部に残存、屈曲部凸線状、	堅緻	茶灰色土
36	91	162	1	南墳丘裾B・C	須恵器	瓶	10.4	10.15	2.9	-	0.8	内外底部不定方向ナデ、口縁・頸部へラ描き斜行文、沈線1条	ミニチュア、口縁屈曲、体部中位に刺突文、底部厚い、屈曲部凸線状、	堅緻	茶灰色土
36	92	84	1	南墳丘裾	須恵器	瓶	-	-	-	9.5	0.3	外底部手持ちヘラケズリ、頸部沈線1条	外面一部茶変	やや軟質	灰茶色
36	93	198	1	南墳丘裾下層	須恵器	瓶	(9.0)	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ	ミニチュア、過焼成、極めて薄い、屈曲部凸線状、全面灰被りで黒茶変	堅緻	黒茶色
36	94	69	1	南墳丘裾	須恵器	瓶	(9.2)	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ、凸帯1条、頸部細かい波状文	凸帯後に波状文施文、極めて薄い	堅緻	黒灰色
36	95	179	1	南墳丘裾下層	須恵器	瓶	(9.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、屈曲部凸帯、その上下に2段のへラ描き斜行文	ミニチュア、100と調整近似、薄い、過焼成	堅緻	黒茶色
36	96	195	1	南墳丘裾下層	須恵器	瓶	(9.5)	-	-	-	0.3	内外面回転ナデ、屈曲部凸帯、その上下に2段のへラ描き斜行文、沈線1条	ミニチュア、薄い、内面絞り痕、内面灰被りで茶変、外面黒変	良好	暗灰色
36	97	201	1	南墳丘裾下層	須恵器	瓶	(10.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、屈曲部凸帯、その上下に2段のへラ描き斜行文	ミニチュア、極めて薄い、101と近似するが口縁の長さ異なる	堅緻	黒茶色
36	98	169	1	南墳丘裾F	須恵器	瓶	(10.6)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、屈曲部凸帯、その上下に2段のへラ描き斜行文、沈線1条	薄い	堅緻	黒茶色
36	99	107	1	南墳丘裾	須恵器	瓶	(11.0)	-	-	-	0.1	内回転ナデ、外面カキメ状のナデ	薄い、屈曲強い、内面灰被り、外面黒変	堅緻	灰色
36	100	549	1	南墳丘裾下層	須恵器	瓶	(11.2)	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ、屈曲部凸帯、その上下に2段のへラ描き斜行文	小型、極めて薄い、95と調整近似、過焼成か	黒茶色	硬質
36	101	202	1	南墳丘裾下層	須恵器	瓶	(12.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、屈曲部凸帯、その上下に2段のへラ描き斜行文	器壁極めて薄い、外面黒変、内面黒粒釉、過焼成か	堅緻	黒色・灰色
36	102	176	1	南墳丘裾	須恵器	瓶	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	器壁薄い、屈強い	良好	灰色
36	103	48	1	南墳丘裾土器群F	須恵器	瓶	12.3	-	-	-	0.3	内外面回転ナデ、屈曲部凹線と凸帶	外面灰被り、黒変・黄変	堅緻	暗灰色
36	104	136	1	南墳丘裾C	須恵器	瓶	14.0	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ、屈曲部凹線と凸帶、内面工具ナデ	器壁厚く野暮ったい	軟質	茶灰色
36	105	273	1	南墳丘裾	須恵器	瓶	13.6	-	-	-	0.3	内外面回転ナデ、屈曲部凹線と凸帶	歪み、内面凹凸多し	良好	灰色
36	106	208	1	南墳丘裾E・下層	須恵器	瓶	(14.2)	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ、頸部沈線3条、その上に細かい波状文、屈曲部凸線状	歪み、全面灰被り、外面黒変	良好	黒灰色
36	107	178	1	南墳丘裾下層・C・D	須恵器	瓶	(15.6)	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ、端部下沈線2条、頸部カキメ後波状文	外面自然釉で黒変、口縁器壁薄い、精緻	良好	暗灰色
36	108	99	1	南墳丘裾	須恵器	瓶	(16.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	極めて薄い、白色、極めて軟質で脆弱	軟質	白色
36	109	196	1	南墳丘裾E	須恵器	脚付瓶	-	-	10.1	9.4	0.4	胴部外面カキメ、中位沈線1条、内底部凹形の当て具痕、外底部ナデ	脚部にへラ記号、内底部當て具痕、外面下黒変	黒色	良好
36	110	130	1	南墳丘裾	須恵器	口縁	6.8	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	平瓶か提瓶の口縁か？内外面灰被り	良好	黒灰色
36	111	245	1	墓道先端	須恵器	平瓶	(8.4)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ後、外面カキメ	平瓶が提瓶の口縁か	良好	暗灰色
36	112	207	1	南墳丘裾C・D	須恵器	長頸壺	(10.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	器壁薄い、口縁屈曲、外面灰被りで黒変、精緻	堅緻	灰色
36	113	222	1	墓道先端	須恵器	長頸壺	18.6	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	外面自然釉、内面釉垂れあり、美品	良好	灰色
36	114	158	1	南墳丘裾F・B	須恵器	平瓶	-	-	-	20.3	0.4	外面カキメ、内底部不定方向ナデ、粘土接合痕	胴部丸みを持つ	良好	灰色
36	115	80	1	南墳丘裾	須恵器	小壺	-	-	-	(6.4)	0.2	内外面回転ナデ、中位にへラ書き斜行文	外面自然釉で黒変	良好	灰色
36	116	128	1	南墳丘裾	須恵器	小壺	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、中位沈線、その下に刺突文、内面絞り痕	外面に直径7mmほどの円形の剥離痕あり、外面灰被り	良好	暗灰色
36	117	55	1	南墳丘裾	須恵器	小壺	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ後、外面下位にカキメ	薄い、外面一部黒変	良好	暗灰色
36	118	114	1	南墳丘裾	須恵器	小壺	-	-	-	(8.4)	0.2	外底部手持ちヘラケズリ、頸部に沈線1条	はそうか？	良好	灰色
36	119	211	1	南墳丘裾・墓道埋土・包含層	須恵器	小壺	-	-	-	(9.6)	0.4	外面肩部カキメ、沈線1条、下位手持ちヘラケズリ後不定方向ナデ、内底部不定方向ナデ	焼き歪み多く内底部焼き膨れ、内外面灰被り、外面黄変	良好	灰色
36	120	256	1	南墳丘裾大甕1	須恵器	小壺	-	-	3.5	(8.0)	0.7	体部中位～外底部回転ヘラケズリ	外面自然釉、内面黒変	良好	暗灰色
36	121	122	1	南墳丘裾	須恵器	小壺	(12.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部肥厚、頸部内面灰被り	良好	灰色
36	122	82	1	南墳丘裾	須恵器	短頸壺	(7.6)	-	-	(11.0)	0.2	外面カキメ状ナデ、内面回転ナデ	薄い、胎土精良、外面一部黒変		
36	123	209	1	南墳丘裾大甕1・C	須恵器	脚付壺	-	-	8.3	(10.9)	0.6	胴部下位内外面回転ヘラケズリ後ヨコナデ、脚部内面ナデ	外面灰被りで一部黒変、脚部やや歪む	良好	黒灰色
37	124	83	1	南墳丘裾	須恵器	堤瓶	-	-	-	(9.0)	0.4	内外面回転ナデ	ミニチュア	良好	灰色

表2-4 皿山古墳群I区古墳出土須恵器観察表4

挿図番号	番号	登録番号	号数	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	調整	特徴	焼成	色調
37	125	229	1	南墳丘裾C	須恵器	堤瓶	5.2	13.0	-	10.3	0.9	内外面回転ナデ後、平坦部・被蓋部右回りのカキメ	輪状の耳、口縁部全面灰被りで黄変、口縁外側黒変	良好	黒灰色
37	126	212	1	南墳丘裾C	須恵器	堤瓶	-	-	-	11.1	0.7	被蓋部外側右回りカキメ、平坦部調整、内面中位接合ナデ	鉤状の耳、平坦部焼き膨れ多し	良好	黒灰色
37	127	218	1	南墳丘裾H、墓道外	須恵器	堤瓶	5.6	14.0	-	10.5	0.7	内外面回転ナデ後、平坦部・被蓋部右回りのカキメ	赤焼き、鉤状の耳	堅緻	赤褐色
37	128	120	1	南墳丘裾	須恵器	堤瓶	(5.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	小型、口縁端部内彎、外面一部黒変	良好	灰黄色
37	129	109	1	南墳丘裾	須恵器	堤瓶	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	鉤状の短い耳、断面小豆色、外面灰被り	堅緻	小豆色
37	130	186	1	南墳丘裾	須恵器	堤瓶	(9.2)	-	-	-	0.3	内外面回転ナデ、粘土繼ぎ目顕著	外面灰被り、赤焼け、野暮つたい、内面に葉の痕	良好	灰黄色
37	131	117	1	南墳丘裾	須恵器	堤瓶	-	-	-	(14.2)	0.2	内外面回転ナデ	外面自然釉	良好	暗灰色
37	132	70	1	南墳丘裾	須恵器	壺	(11.4)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	口縁玉縁状に肥厚、胎土精緻で器壁も精緻、異質	良好	淡灰色
38	133	154	1	南墳丘裾B	須恵器	壺	(12.2)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部折り曲げ、断面小豆色、外面自然釉で黒変、異質	やや軟質	灰黑色
38	134	243	1	墓道外側一括	須恵器	壺	-	-	(14.6)	-	0.3	内外面回転ナデ、口縁部沈線2条の間に斜位の刺突文、頸部に凸帶	端部内傾、胎土精緻で異質、外面灰被り、外面一部黒変	良好	淡灰色
38	135	251	1	南墳丘裾	須恵器	壺	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部玉縁状に肥厚、外面灰被りで黄変	良好	暗灰色
38	136	170	1	南墳丘裾	須恵器	壺	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部に沈線1条	良好	淡灰色
38	137	270	1	羨道埋土上層	須恵器	壺	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部折り曲げ、外面自然釉、外面灰被り	良好	灰色
38	138	214	1	南墳丘裾C、F・羨道埋土	須恵器	壺	-	-	-	(20.6)	0.4	外面格子タタキ後中位に沈線3条、間に斜位の刺突文、下位は部分的にナデ、内面当て具痕後ヨコナデ	粘土接合痕顕著、同心円太い、施文部内面無文當て具痕あり	堅緻	茶褐色
38	139	127	1	南墳丘裾	須恵器	壺	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、刺突文	平底、2次被熱か	堅緻	茶褐色
38	140	163	1	南墳丘裾B	須恵器	壺	-	-	6.6	-	0.3	外底部未調整	底部器壁厚い、やや平底	軟質	淡灰色
38	141	138	1	南墳丘裾・大甕I	須恵器	壺	-	-	(6.8)	-	0.1	外底部ヘラ切り未調整	平底、外面部凹多い、一部紫変、生焼けか	やや軟質	淡灰色
38	142	213	1	南墳丘裾	須恵器	甕	(25.4)	-	-	(48.8)	0.1	外面格子叩き、内面同心円當て具痕、頸部外側カキメ	端部玉縁状に肥厚、外面激しい灰被りで白変、火膨れ多し、内面黒変、同心円深い	良好	黒灰色
38	143	102	1	南墳丘裾・墓道外	須恵器	甕	(21.6)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	内面にヘラ記号、口縁端部部分的にキザミ、	やや軟質	灰色
38	144	224	1	羨道・墓道	須恵器	甕	(21.0)	-	-	-	0.1	外面格子叩き、内面同心円當て具痕	口縁玉縁状に肥厚	軟質	灰色
38	145	221	1	埋土	須恵器	甕	(23.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部肥厚、内屈	軟質	淡灰色
38	146	220	1	羨道先端	須恵器	甕	(22.0)	-	-	-	0.1	外面格子叩き、内面同心円當て具痕	口縁端部僅かに肥厚	軟質	淡灰色
38	147	274	1	墓道外側	須恵器	甕	(23.0)	-	-	-	0.1	頸部内外面カキメ状工具ナデ	口縁端部嘴状、外面玉縁状で凸带状、頸部内外面黒変、当て具痕細く大きい	良好	灰色
38	148	205	1	南墳丘裾	須恵器	甕	(24.0)	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ	口縁端部帯状の玉縁、土師器様	軟質	灰茶色
38	149	177	1	南墳丘裾	須恵器	甕	(22.0)	-	-	-	0.2	外面格子叩き、内面同心円當て具痕、頸部外側カキメ	口縁端部玉縁状、頸部内面、口縁部外側黒変、当て具痕大	良好	灰色
38	150	272	1	南墳丘裾C・羨道埋土	須恵器	甕	21.0	-	-	-	0.1	外面格子叩き後頸部カキメ、内面同心円當て具痕	口縁端部玉縁状で嘴状に屈曲、	良好	暗灰色
39	151	232	1	墓道外側一括	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	頸部内面ヨコナデ、胴部同心円當て具痕、頸部外側カキメ	頸部器壁厚い、接合痕顕著、同心円細く大、外面自然釉で黒変	良好	暗灰色
39	152	241	1	南墳丘裾・羨道埋土・東南周溝内	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	外面格子叩き後頸部カキメ、内面同心円當て具痕	同心円細くシャープ	良好	暗灰色
39	153	264	1	墓道外側一括	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	外面格子叩き後カキメ、内面同心円當て具痕	頸部粘土繼ぎ目顕著、内面灰被り、頸部外側黒変、断面黒色、同心円大	良好	灰色
39	154	393	1	南墳丘裾	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	外面格子タタキ後カキメ、内面同心円當て具痕	同心円當て具痕が大きく浅く特徴的	良好	黄灰色
39	155	129	1	南墳丘裾	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	外面格子叩き、内面車輪文當て具痕	外面黒変、車輪文當て具痕	良好	暗灰色
39	156	141	1	南墳丘裾	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	外面格子叩き後カキメ、内面車輪文當て具痕	車輪文當て具痕	やや軟質	茶灰色
40	157	285	1	南墳丘裾	須恵器	甕	-	-	-	90.4		外面格子タタキ後カキメ、内面同心円當て具痕	大甕、内外面に紺多し	良好	暗灰色～黒色
40	158	286	1	南墳丘裾	須恵器	甕	(41.3)	99.2	-	90.0		外面格子タタキ、内面同心円當て具痕	大甕、頸部にヘラ記号	やや軟質	灰色
41	159	287	1	南墳丘裾	須恵器	甕	49.0	90.2	-	77.4		外面格子タタキ後カキメ、内面同心円當て具痕、口縁端部に「×」、頸部に波状文施文	大甕、ひずみ多し	良好	暗灰色～黒色

表2-5 皿山古墳群I区古墳出土須恵器観察表5

捕団番号	番号	登録番号	号数	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	調整	特徴	焼成	色調
41	160	210	1	南墳丘裾	須恵器	甕	(31.0)	-	-	-	0.1	口縁部下位内面當て具痕、外面口縁部及び中位に沈線3条、上位にカキメ後太い波状文、下位に細い波状文	口縁端部玉縁状に肥厚、外面自然釉、内面灰被りで白変	堅緻	黒茶色
41	161	281	1	羨道埋土	須恵器	甕	39.8	-	-	-	0.3	内外面回転ナデ後外面沈線3条、間に上段1重花壇2重の2段の波状文、口縁部肥厚して一段あり	外面一部黒色釉	堅緻	黒灰色
41	162	262	1	南墳丘裾B・玄室床上・羨道・墓道埋土	須恵器	甕	(53.6)	-	-	-	0.1	外面格子叩き、内面同心円当て具痕、口縁端部外面刺凸文、頸部沈線3条、間にヘラ描き斜行文	口縁端部やや屈曲、外面灰被り、内面自然釉	堅緻	黒茶色土
42	163	203	1	南墳丘裾・墓道埋土	須恵器	器台	(29.8)	-	-	(29.8)	0.1	外面沈線2条、上位ヘラ描き斜行文、下位細格子叩き、内底部同心円当て具痕	口縁端部傘状でシャープ、同心円ギザギザ	良好	黒灰色
42	164	160	1	南墳丘裾K	須恵器	器台	(29.0)	-	-	(29.8)	0.3	外面沈線4条、上位ヘラ描き波状文、下位細格子叩き、内底部同心円当て具痕、脚部上位穿孔と沈線、中位透かし	口縁端部傘状、未貫通の穿孔あり、内底部に重ね焼きの円形痕、同心円ギザギザ	良好	黒色
42	165	159	1	南墳丘裾C・羨道・墓道	須恵器	器台	(29.0)	-	-	(30.1)	0.3	外面沈線2条、上位ヘラ描き斜行文、下位細格子叩き、内底部同心円当て具痕、脚部穿孔あり	口縁端部傘状、斜行文粗い、同心円ギザギザ	良好	淡灰色
42	166	204	1	南墳丘裾F	須恵器	器台	(28.0)	-	-	(30.0)	0.1	外面沈線3条、上位ヘラ描き斜行文、下位細格子叩き、内面上位と底部同心円当て具痕	口縁端部傘状でシャープ、斜行文粗い、同心円ギザギザ	良好	黒色
42	167	231	1	南墳丘裾F・下層・大甕1	須恵器	器台	-	-	-	-	0.2	外面回転ナデ後外面穿孔、穿孔各3ヵ所、沈線2条、縦位のヘラ描き、内面絞り痕あり	透かしと穿孔はセット	良好	黒色
42	168	193	1	南墳丘裾K	須恵器	器台	-	-	(18.0)	-	0.1	内外面回転ナデ後外面沈線5条、間に2段のヘラ描き斜行文	端部跳ね上げ、沈線は不安定、断面小豆色、	良好	灰色
42	169	190	1	南墳丘裾B	須恵器	器台	-	-	(19.0)	-	0.2	内外面回転ナデ後外面沈線4条、間に2段のヘラ描き斜行文	端部跳ね上げ、外面黒変、内面灰被りで黄変	良好	黒灰色
42	170	67	1	南墳丘裾	須恵器	器台	-	-	(20.0)	-	0.1	内外面回転ナデ後外面沈線、ヘラ描き斜行文	端部跳ね上げ	堅緻	黒茶色
42	171	263	1	南墳丘裾・周溝・墓道外一括	須恵器	器台	-	-	(21.6)	-	0.2	内外面回転ナデ後外面沈線4条、間に2段のヘラ描き波状文	端部肥厚して段あり、内面灰被り、外面黒変	堅緻	黒茶色
43	172	280	1	南墳丘裾下層	須恵器	器台	-	-	21.3	-	0.4	外面沈線で5分割、間に2段のヘラ描き斜行文、無文、2段の斜行文、内面に絞り痕	上4段に透かし各3ヵ所、粘土紐繋ぎ目顯著、生焼けで剥離多し、断面橙色	軟質	淡灰色
43	173	283	1	南墳丘裾下層	須恵器	器台	-	-	21.2	-	0.4	外面沈線で3分割、間にカキメ、ヘラ書き斜行文、内面に基準線あり	透かし2段に各3ヵ所、生焼け	軟質	淡灰色
43	174	282	1	南墳丘裾下層	須恵器	器台	-	-	(20.0)	-	0.2	外面沈線とヘラ描き斜行文、透かし3ヵ所	生焼けで剥離多し、断面橙色	軟質	淡灰色
49	1	340	2	閉塞内	須恵器	甕	(24.0)	-	-	-	0.1	外面格子タタキ後カキメ、内面同心円当て具痕をナデ消し	口縁端部2段の玉縁状、頸部外面にタタキ残る、生焼けで土師器様	軟質	淡橙色
49	2	335	2	羨道	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.1			良好	淡灰色
49	3	336	2	羨道	須恵器	环	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	口縁端部黒変	良好	灰色
49	4	333	2	墓道内	須恵器	环	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	やや薄い、口縁端部黒変	良好	灰色
49	5	319	2	南墳丘裾	須恵器	高坏	-	-	-	-	0.2	坏内底部不定方向ナデ、外底部カキメ、脚部中位に沈線、透かし2段×2ヵ所	内底部灰被り	良好	暗灰色
49	6	339	2	羨道	土師器	長頸壺	-	-	-	(8.2)	0.6	内外面ナデ、外底部細かいハケヌ、内底部ナデツケ	小型	良好	淡橙色
49	7	334	2	羨道	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	外面格子タタキ後カキメ、内面同心円当て具痕	口縁玉縁状	良好	灰黄色
49	8	338	2	羨道上層	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	外面格子叩き、内面同心円当て具痕	端部玉縁状に肥厚	やや軟質	淡橙色
49	9		2	羨道埋土	須恵器	甕	(50.2)	68.5	-	53.7		外面格子叩き、内面同心円当て具痕	大甕		
49	11	324	2	周溝南	須恵器	高坏	-	-	(13.0)	-	0.2	内外面回転ナデ、透かしあり	全面灰被りで黒変	良好	黒灰色
49	10	323	2	西南周溝内	須恵器	甕	(11.6)	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ、底部に刺突文	外面灰被り、刺突文は三角形	良好	灰色
49	12	305	2	南墳丘裾	須恵器	蓋	(31.0)	(3.5)	-	-	0.2	天井部2/3回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、ヘラ記号あり	ヘラ記号	良好	暗灰色
49	13	289	2	南墳丘内	須恵器	蓋	39.8	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	凹凸多し	良好	灰色
49	14	300	2	南墳丘内	須恵器	蓋	(53.6)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ		良好	灰色
49	15	302	2	南墳丘内	須恵器	蓋	(29.8)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ		軟質	淡灰色
49	16	296	2	南墳丘内	須恵器	蓋	(29.0)	-	-	-	0.2	天井部2/3未調整、内面不定方向ナデ	20比近似、セットか?	やや軟質	淡灰色
49	17	308	2	南墳丘裾	須恵器	蓋	(29.0)	-	-	-	0.2	天井部1/2回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ	扁平な宝珠摘み	良好	暗灰色

表2-6 皿山古墳群I区古墳出土須恵器観察表6

挿図番号	番号	登録番号	号数	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	調整	特徴	焼成	色調
49	18	301	2	南墳丘内	須恵器	杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	薄い、全面灰被り★	堅緻	灰色
49	19	307	2	南墳丘裾	須恵器	杯	(12.6)	-	-	(15.0)	0.2	外底部2/3回転ヘラケズリ	生焼けか	軟質	白灰色
49	20	294	2	南墳丘内	須恵器	杯	(13.0)	-	-	(15.2)	0.1	内外面回転ナデ	16と近似、セットか?	やや軟質	淡灰色
49	21	299	2	南墳丘内	須恵器	高杯	-	-	(13.0)	-	0.3	内外面回転ナデ、外面中位にカキメ、透かし2カ所あり	端部は直上げ、外面黒変	堅緻	暗灰色
49	22	297	2	南墳丘内	須恵器	堤瓶	-	-	-	-	0.4	杯外底部カキメ、内底部不定方向のナデ、脚部中位に2条の沈線、透かし2段	内底部灰被り、外面黒変、過焼成か、23と近似	良好	灰色
49	23	293	2	南墳丘内	須恵器	甕	(11.2)	12.9	13.2	(13.4)	0.5	杯部外底部2/3回転ヘラケズリ、内底部不定方向ナデ、脚部透かし2段	全面灰被りで器壁が荒れる、端部黒変、過焼成か、22と近似	堅緻	灰色
49	24	306	2	南墳丘裾	須恵器	蓋	-	-	(10.8)	-	0.1	内外面回転ナデ、透かしあり	端部跳ね上げ、	良好	暗灰色
49	25	292	2	南墳丘内	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.1	被蓋部カキメと刺突文	全面に黑色釉、作りが粗い	良好	黒灰色
49	26	341	2	南墳丘内・ 羨道埋土	須恵器	杯	(24.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部玉縁状に肥厚、胎土精緻で異質	良好	淡灰色
54	1	33	3	閉塞内	須恵器	蓋	(11.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	外面灰被り	良好	淡灰色
54	2	25	3	墓道覆土	須恵器	蓋	(12.8)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	口縁肥厚	良好	灰色
54	3	39	3	墓道覆土	須恵器	杯	(12.2)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	黒粒釉多し	良好	淡灰色
54	4	24	3	墓道覆土	須恵器	杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	薄い、	堅緻	灰色
54	5	28	3	墓道覆土	須恵器	高杯	-	-	(10.6)	-	0.1	内外面回転ナデ、透かしあり	透かし切り方粗い	良好	暗灰色
54	6	26	3	墓道覆土	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	屈曲部段あり、蓋かも	良好	暗灰色
54	7	29	3	墓道覆土	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	屈曲部段あり、外面自然釉で黒変、蓋かも	良好	暗灰色
54	8	17	3	墓道	須恵器	小壺	4.6	7.75	-	7.0	1.0	外面肩部以下回転ヘラケズリ、 内面ナデ外面から口縁内面自然釉で黒変		良好	暗灰色
54	9	27	3	墓道覆土	須恵器	壺	-	-	-	-	0.1	口縁部外面回転ナデ、体部内 外面タテナデ	外面自然釉で黒変	良好	灰色
54	10	18	3	墓道前面	須恵器	壺	(14.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	口縁端部から外面自然釉で黒変	良好	灰色
54	11	1	3	墳丘内	須恵器	蓋	(13.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	全面灰被り	良好	灰色
54	12	20	3	墳丘内(墓道西側)	須恵器	蓋	(13.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ		良好	灰色
54	13	2	3	墳丘内	須恵器	杯	(13.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	極めて薄い	良好	灰色
54	14	3	3	墳丘内	須恵器	杯	(12.8)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	外面黒変	良好	灰色
54	15	41	3	墳丘内	須恵器	高杯	-	-	(11.0)	-	0.1	内外面回転ナデ	端部屈曲	良好	茶灰色
54	16	9	3	東墳丘内	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	外面自然釉で黒変	良好	黒灰色
54	17	8	3	東墳丘内	須恵器	堤瓶	(7.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、外面浅い沈線2条	外面黒変	良好	暗灰色
54	18	16	3	北墳丘内	須恵器	甕	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部屈曲	良好	黒灰色
54	19	21	3	墳丘内(墓道西側)	須恵器	横瓶	(13.2)	-	-	-	0.2	外面格子叩き、内面同進展て具痕	端部玉縁状に肥厚、同心円ギザギザ、断面橙色	良好	暗灰色
54	20	22	3	墳丘内(墓道西側)	須恵器	甕	(28.0)	-	-	-	0.1	外面格子タキ後カキメ、内面 同心円当て具痕	口縁折り曲げて玉縁状に、同心 円大きくギザギザ	良好	灰色
54	21	30	3	周溝内	須恵器	壺	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ後、外面2条の 沈線、間にヘラ描き斜行文	外面灰被りで黒変、断面小豆色	良好	灰色
54	22	31	3	周溝内	須恵器	壺	-	-	-	-	0.1	内面同心円当て具痕、頸部外 面沈線3条、上位にヘラ描き斜行文	内面黒色ガラス釉が塊で付着 大型	良好	黒灰色
60	1	353	4	羨道	須恵器	杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	極めて薄い、外面灰被り	良好	灰色
60	2	349	4	羨道下層・ 3トレンチ・ 墳丘内	須恵器	高杯	(11.9)	13.5	12.8	13.9	0.7	杯部外面回転ナデ、外底部カ キメ、脚部回転ナデ後外面カキ メ一部ナデ、絞り痕あり	端部凸帯あり、口縁端部から内 面灰被り	良好	灰色
60	3	512	4	羨道入口	須恵器	高杯	12.8	12.9	13.9	17.8	0.8	内底部不定方向ナデ、外底部 カキメ、脚部回転ナデ、絞り痕 あり	歪む、端部段あり、外面から脚 内面灰被り、	良好	灰色
60	4	352	4	羨道	須恵器	壺	(13.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ後内面ナデ	端部玉縁状にやや肥厚、シャー ブな稜線	良好	暗灰色
60	5	387	4	墓道上面	須恵器	杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	外面自然釉、内面灰被り	良好	灰色
60	6	392	4	墓道	須恵器	杯	(11.6)	-	-	(13.4)	0.1	内外面回転ナデ	薄い、外面黒変	堅緻	灰色
60	7	391	4	墓道上面	須恵器	高杯	(12.0)	-	-	(14.3)	0.6	内外面回転ナデ後外底部から 脚部外面カキメ、内外面絞り痕 あり	やや薄い、内面灰被りで黒変 あり	堅緻	灰色
60	8	386	4	墓道上面	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ後外底部にカ キメ	外面自然釉で黒変、内面灰被 りで黄変、透かし?	良好	灰色
60	9	388	4	墓道上面	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ		良好	灰色
60	10	385	4	墓道上面	須恵器	杯	(9.9)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、中位に2条の 沈線	脚がつくかも	良好	淡灰色
60	11	411	4	南墳丘内	須恵器	高杯	-	-	(12.8)	-	0.2	内外面回転ナデ、外面絞り痕 あり	端部折り曲げ、据部内面黒変、 外面部灰被り	良好	灰色
60	12	398	4	南墳丘裾	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ後外面部カキ メ、絞り痕あり、端部凸帯あり	薄い、内面黒変	良好	灰色
60	13	407	4	南墳丘	須恵器	高杯	-	-	-	(13.2)	0.3	内外面回転ナデ後外面部カキ メ、絞り痕あり、端部凸帯あり	薄い、内面灰被り、内外面黒粒 釉	堅緻	灰色
60	14	404	4	南墳丘	須恵器	高杯	-	-	-	(13.8)	0.1	内外面回転ナデ、外面中位に2 条の沈線、端部肥厚	端部は段状になる、器壁が薄 い、内面灰被り	堅緻	灰色

表2-7 皿山古墳群I区古墳出土須恵器観察表7

捕団番号	番号	登録番号	号数	遺構名	種類	器種	口径	器高	底径	最大径	残存率	調整	特徴	焼成	色調
60	15	408	4	南墳丘内	須恵器	高杯	13.0	-	(14.6)	15.0	0.6	内外面回転ナデ後外底部に力キメ、脚部は下位に2条の沈線、内外面絞り痕あり	外面・裾内面灰被り	良好	暗灰色
60	16	344	4	3トレンチ	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	段が多い、異質	良好	黒灰色
60	17	345	4	3トレンチ	須恵器	巣	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、肩部に沈線1条	器壁が荒れる、頸部細い	良好	茶灰色
60	18	505	4	東墳丘内	須恵器	壺	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	口縁玉縁状で凸線あり、端部内湾	良好	淡灰色
60	19	399	4	南墳丘裾	須恵器	壺	(11.4)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ、絞り痕あり、粘土継ぎ目顯著	口縁玉縁状に肥厚、端部つまみ出す	良好	灰色
60	20	405	4	南墳丘	須恵器	甕	(21.4)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	口縁僅かに段があり玉縁意識か	軟質	灰色
60	21	403	4	南墳丘裾	須恵器	甕	(22.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	玉縁状に肥厚、凸帯状になる、器台と近似、内面灰被り、剥離多し、断面橙色	やや軟質	灰色
60	22	548	4	南墳丘裾	須恵器	甕	(23.0)	-	-	-	0.1	頸部外面ハケメ後ナデ、胸部外格子タタキ後力キメ、内面同心円当て具痕	口縁部玉縁状に肥厚、内面黒変、1号墳154と調整近似	良好	暗灰色
61	23	378	4	南墳丘裾	須恵器	平瓶	-	-	5.8	-	0.3	外面回転ヘラケズリ後下半のみナデ	丸く扁平	良好	灰色
61	24	367	4	北周溝	須恵器	蓋	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	凹凸多し、器壁厚い	良好	黄灰色
61	25	361	4	北周溝	須恵器	杯	(14.0)	-	-	(14.0)		内外面回転ナデ、外面沈線状		良好	灰色
61	26	363	4	北周溝	須恵器	杯	(15.6)	-	-	(15.6)	0.1	外底部2/3回転ヘラケズリ	浅い、厚い	軟質	淡灰色
61	27	351	4	周構内・羨道	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.2	内外面回転ナデ、外面透かし1条、絞り痕あり	凸帯状の段あり、外面灰被り、内面茶変、断面小豆色	堅緻	暗灰色
61	28	362	4	北西周溝	須恵器	高杯	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	極めて薄い、端部跳ね上げ	堅緻	茶色
61	29	513	4	北西周溝	須恵器	巣	-	-	-	9.5	0.4	外底部手持ちヘラケズリ後ナデ、内底部指圧痕あり、外面肩部に沈線1条	外面片側灰被りで黒変、内面茶片	良好	暗灰色
61	30	356	4	北西周溝	須恵器	平瓶	6.5	14.3	8.0	18.5	0.8	内外面回転ナデ後外面力キメ、内面上位ナデ、口縁部内面絞り痕あり	同部丸い、同部中位に約5mm径の穿孔あり	良好	灰色
61	31	378	4	北西周溝	須恵器	甕	-	-	5.8	-	0.3	外面回転ヘラケズリ後下半のみナデ	丸く扁平	良好	灰色
61	32	365	4	墳丘土器集中	須恵器	甕	(22.0)	-	-	-	0.1	外面格子タタキ後力キメ、内面同心円当て具痕	口縁玉縁状に肥厚、口縁部内面ヘラ記号、内外面自然釉、	良好	灰色
65	1	424	5	墳丘土器集中・周溝	須恵器	蓋	(14.0)	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ		良好	灰色
65	2	423	5	南墳丘裾	須恵器	甕	(21.2)	-	-	-	0.1	外面ハケメナデ消し	口縁玉縁状に肥厚、黒変、4号墳22と同型・同調整	良好	灰色
65	3	416	5	墳丘土器集中	須恵器	蓋	(13.4)	-	-	-	0.2	天井部1/2未調整	外面段状、やや厚い	良好	淡灰色
65	4	422	5	北周溝	須恵器	蓋	(11.6)	-	-	(14.0)	0.1	内外面回転ナデ、外面沈線2条	返りあり、摘み欠損	やや軟質	暗灰色
65	5	425	5	墓道下層	須恵器	脚	-	-	-	-	0.1	内外面回転ナデ	端部跳ね上げ	良好	淡灰色

表3-1 皿山古墳群I区古墳出土玉類計測表1

表3-2皿山古墳群I区古墳出土玉類計測表2

括図	番号	図版	出土位置	材質	種類	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	残存率	色調	製作技法	備考
44	80	58	1号墳玄室内	ガラス製	小玉	4.5	3.5	1.0	1	紺青色	鋸造?	
44	81	58	1号墳玄室内	ガラス製	小玉	4.5	2.0	1.5	1	黄色	鋸造?	
44	82	58	1号墳玄室内	ガラス製	小玉	4.5	3.0	1.5	1	黄色	鋸造?	
44	83	58	1号墳玄室内	ガラス製	小玉	5.0	2.5	2.0	1	明緑色	鋸造?	
44	84	59	1号墳玄室内	ガラス製	丸玉	(7.5)	(7.0)	(2.5)	0.5	薄緑色	巻付技法	鉛ガラス。表面磨滅。全体的に白っぽい。
44	85	59	1号墳玄室内	ガラス製	丸玉	(8.0)	(8.0)	(2.5)	0.5	薄緑色	巻付技法	鉛ガラス。表面磨滅。全体的に白っぽい。
44	86	59	1号墳玄室内	ガラス製	丸玉	(9.0)	9.5	2.5	0.4	濃緑色	巻付技法	鉛ガラス。
44	87	59	1号墳玄室内	ガラス製	丸玉	(10.0)	9.5	2.0~3.0	0.5	明緑色	巻付技法	鉛ガラス。
44	89	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	6.5	5.0	1.0	1	黒茶色		
44	90	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	6.0	5.5	1.5	0.9	黒色		
44	91	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.0	6.5	1.5	1	黒色		
44	92	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.0	6.0	1.5	1	黒色		
44	93	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.0	6.5	2.0	1	灰茶色		
44	94	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.5	5.5	1.5	1	灰茶色		
44	95	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.0	6.0	2.0	1	黒色		
44	96	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.5	6.0	1.5	1	灰茶色		
44	97	58	1号墳石室内埋土中	土製	丸玉	8.0	6.0	1.0	0.9	黒茶色		
44	98	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	8.5	7.0	2.0	1	黒色		
44	99	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	8.0	6.0	2.0	1	灰茶色		
44	100	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.5	6.5	1.5	1	灰茶色		
44	101	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.5	6.5	1.5	1	黒茶色		
44	102	58	1号墳玄室内(溝)	土製	丸玉	7.5	6.0	1.5	0.9	黒茶色		
44	103	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	6.0	(5.5)	1.5	0.6	黒色		
44	104	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.0	5.0	1.0	0.8	黒色		
44	105	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	7.5	6.5	2.0	0.7	黒茶色		
44	106	58	1号墳石室内埋土中	土製	丸玉	(7.0)	(6.0)	1.5	0.5	黒色		
44	107	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	(7.0)	(6.0)	(1.5)	0.4	黒色		
44	108	58	1号墳玄室内	土製	丸玉	(6.0)	(6.0)	(1.5)	0.4	黒色		
50	1	59	2号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	8.0	6.5	2.0	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
50	2	59	2号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	9.0	6.0	2.0	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
50	3	59	2号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	9.5	6.0	2.0	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
50	4	59	2号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	10.0	7.0	2.5	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
50	5	59	2号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	10.0	7.0	2.5	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
50	6	59	2号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	10.0	5.5	2.5	1	瑠璃色	引延切断技法	上下小口研磨。
50	7	59	2号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	10.0	5.5	2.0	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
50	8	59	2号墳前室敷石内	ガラス製	丸玉	10.5	8.0	2.0	1	紺青色	引延切断技法	
50	9	59	2号墳石室内埋土中	土製	丸玉	8.5	7.5	2.0	1	黒茶色		
55	1	60	3号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	8.5	5.0~6.5	5.0	0.6	明緑色	巻付技法	鉛ガラス。表面磨滅。全体的に白っぽい。
55	2	60	3号墳玄室右袖	ガラス製	丸玉	8.0	6.0	3.0	0.9	濃緑色	巻付技法	鉛ガラス。表面磨滅。
62	1	60	4号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	4.0	3.0	1.5	1	紺青色	鋸造?	
62	2	60	4号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	(4.0)	3.0	(2.0)	0.4	瑠璃色	鋸造?	
62	3	60	4号墳石室内埋土中	ガラス製	丸玉	10.0	8.0	0.3	1	濃緑色	巻付技法	鉛ガラス。表面やや白っぽい。
66	1	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	3.0	2.0	1.0	1	青緑色	鋸造?	
66	2	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	3.0	2.0	1.0	1	青緑色	鋸造?	
66	3	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	3.5	2.0	1.5	1	青緑色	鋸造?	
66	4	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	3.5	2.0	1.0	1	青緑色	鋸造?	
66	5	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	3.8	2.0	1.0	1	黄色	鋸造?	
66	6	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	4.0	2.0	1.5	1	明青色	鋸造?	ひび割れあり。
66	7	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	4.0	2.0	1.5	1	明青色	鋸造?	ひび割れあり。
66	8	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	4.0	2.5	1.0	1	明青色	鋸造?	やや歪みあり。
66	9	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	4.0	3.0	1.5	1	明青色	鋸造?	
66	10	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	4.0	3.0	1.5	1	明青色	鋸造?	
66	11	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	4.0	5.0	1.5	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
66	12	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	4.0	1.8	1.0	1	青緑色	鋸造?	やや歪みあり。また一部厚みが薄い部分あり。
66	13	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	4.0	2.8	1.0	1	黄色	鋸造?	
66	14	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	4.0	2.0	1.0	1	黄色	鋸造?	
66	15	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	5.0	4.0	2.0	1	明青色	引延切断技法	上下小口研磨。気泡縦方向にのびる。
66	16	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	5.0	2.5	2.0	1	明青色	鋸造?	やや歪みあり。
66	17	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	5.0	3.0	1.0	1	明青色	鋸造?	やや歪みあり。
66	18	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	5.0	3.0	3.0	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。孔が楕円形を呈す。
66	19	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	5.5	3.0	1.0	1	青藍色	鋸造?	上端が丸みを帯びるが、下端は平坦である。
66	20	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	5.5	4.0	1.5	1	明青色	鋸造?	上面は丸みを帯びているが下面は平らである。亀裂多い。
66	21	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	6.0	4.0	1.5	1	紺青色	鋸造?	上端が丸みを帯びるが、下端は平坦である。
66	22	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	小玉	6.0	4.0	2.0	1	明青色	引延切断技法?	上下小口研磨。
66	23	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	6.0	5.0	3.0	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。孔が楕円形を呈す。
66	24	61	5号墳石室内埋土中	ガラス製	小玉	6.0	4.0	1.5	1	紺青色	引延切断技法?	上端は丸みを帯びるが、下端は平坦である。
66	25	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	丸玉	8.0	6.0	2.0	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
66	26	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	丸玉	8.0	6.0	2.0	1	紺青色	引延切断技法	切断が荒い。上面は丸みを帯びているが、下面は凹み面。
66	27	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	丸玉	8.0	6.0	1.5	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。気泡多数のびる。
66	28	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	丸玉	8.0	7.0	2.5	1	白色	引延切断技法	引延時の気泡の溝があり。
66	29	61	5号墳玄室内敷石	ガラス製	丸玉	9.5	8.0	2.0	1	紺青色	引延切断技法	全体的に歪んでいる。上下小口研磨。
66	30	61	5号墳石室内	ガラス製	丸玉	7.0	8.5	1.5	0.8	紺青色	引延切断技法	1/2に黄色物のカタマリ(石英か?)が入る。
66	31	61	5号墳玄室内敷石	土製?	環状製品?	6.0	1.5	4.0	0.6	黒色		リングに沿って極細のスジが走る。
66	32	61	5号墳玄室内敷石	水晶製	切子玉	6.5	6.5	2.0~3.0	1	白色		透明度若干不良。
67	1	61	出土地不明	ガラス製	小玉	4.0	2.0	1.5	1	紺青色	鋸造?	孔内に離解剤?付着。
67	2	61	出土地不明	ガラス製	丸玉	(7.0)	3.5	(2.5)	0.5	明緑色	巻付技法	鉛ガラス。表面磨滅。全体的に白っぽい。
67	3	61	2号墳もしくは4号墳	ガラス製	丸玉	10.0	7.5	2.0	1	紺青色	引延切断技法	上下小口研磨。
67	4	61	2号墳もしくは4号墳	ガラス製	丸玉	11.5	12.0	3.0	1	紺青色	引延切断技法	上端は丸みを帯びるが、下端は平坦である。

8) おわりに

i) 皿山古墳群の石室構造についての検討

報告でも述べたように、皿山古墳群の主墳となるI区1号墳は墳丘直下に断層が走り、墳丘東西で基盤層（地山）が著しく変化する状況が確認できる。この墳丘東西での基盤層の違いという地勢的特質を活かすことで、石室構築過程のより詳細な検討が可能となる。以下では、皿山I区1号墳の石室構築過程を検討した上で、山国川流域の横穴式石室との対比から、皿山古墳群の石室構造の位置づけを図る。

①皿山I区1号墳の石室構築過程

占地 古墳の墓域を設定する。I区1号墳は本古墳群中で最大規模の古墳であり、尾根頂上部の南側斜面に占地する。本古墳群では墳丘規模が大きい古墳は、より斜面上方に占地しており、階層差に応じて眺望の良い場所を墓域に設定する。なお、本尾根頂部には断層が認められ、偶然にもI区1号墳の石室中心軸付近が断層線となる。このため、I区1号墳墳丘下で東西の基本層序が大きく変化し、古墳構築面は、墳丘東側では赤褐色粘質土、墳丘西側では軟質の安山岩礫を多量に包含する赤茶褐色土が堆積する。基盤層の上層では、旧表土や炭化物層は認められず、占地に際して面的な造成がなされている。

素材の入手 古墳構築に使用した石材の大部分は、本丘陵周囲に露出する軟質の安山岩である。他石材には横穴式石室の腰石や天井石等の大型石材を中心に、花崗岩が用いられている。花崗岩は本地点では産出しないことから、山国川流域に見られる転石を丘陵頂上付近まで運んだものと見られる。墳丘盛土は基本的に周溝掘削土を使用する。横穴式石室の石材間の目張りに用いられた白色粘土は、本丘陵を構成する堆積層の一部に存在しており、白色粘土層自体の掘削や谷部での再堆積土の採取により入手できる。

墓壙の掘削 内部主体である横穴式石室を構築するための墓壙を掘削する。墓壙は約5m×9mで、旧地表面からの最大深度が約3mに及ぶ。むろん、この墓壙形態と深度は、古墳全体の設計に基づいて設定されており、墓壙掘削土も墳丘盛土や石室裏込めに利用される。墓壙床面は平坦に削り出されるが、石室腰石の据え付け部分は石材の形状にあわせて適宜掘削される。

石室の構築 内部主体である横穴式石室を構築する。横穴式石室の構築工程は大きくI～V工程に分かれる。

第I工程では、石室の基底部を構築する。まず、掘削した墓壙内部に奥壁最下段の腰石を据える。本石室の奥壁最下段の腰石は「鏡石」と称される大型のもので、その質量は古墳構成石材の中で最大のものとなる。この鏡石の石材は花崗岩で、腰石や天井石などの要所に用いる。鏡石の左側下端は石室輸送・構築段階で欠損したようであり、安山岩や小型石材(安山岩・花崗岩)を詰めて補完する。また、鏡石は若干内側に傾斜するように自立した状態で据えており、接地面に小型石材(根石)をかませる。鏡石に見られる傾斜は、両側壁の腰石でも同様に認められ、最下段石材から明確に持ち送りを意識していることが分かる。側壁の腰石は玄室平面形態を大きく規定する。本石室の場合は、左右の側壁腰石をゆるやかな曲線を描くように据え、玄室平面形態がわずかに胴張り状となる。玄門部は立柱石を用い、門柱石が直接眉石を支える構造となる。玄門外側には前室が接続する。前室の大きさは、約1m×1.2mと小規模に設計されており、玄門門柱石と前門門柱石がほぼ隣り合うよ

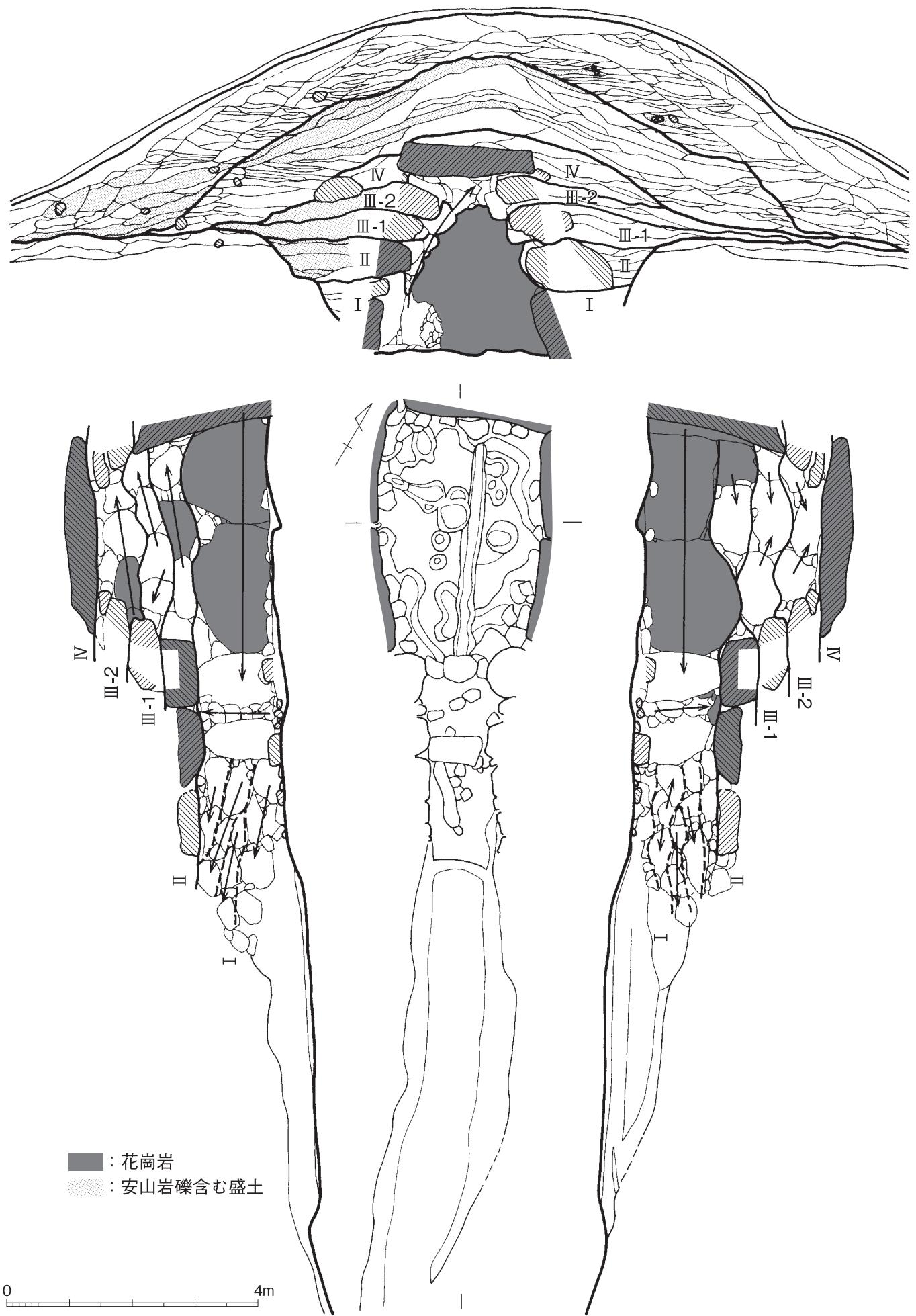
うな状態で据えられている。門柱石の間の側壁は小石材のみで構成されており、玄門と前門の門柱石を据えた後に、大きさが合うものを下から適宜充填する状態で積まれている。前室外側の羨道では、明確な腰石を用いずに小型石材のみで側壁を構築する。羨道左側壁は斜め方向、羨道右側壁はほぼ水平に石材を積んだ目地(作業単位)が見られ、大別して4回の作業単位が確認できる。石材を積む方向は必ずしも一定しないが、最下段石材を中心に、奥壁側から開口側へ積む傾向にある。第I工程全体を概観すると、奥壁の鏡石を除く側壁石材の高さは、ほぼ揃う状況にある。横穴式石室は大きく4つの壁面で組み合わされた立体的構造物であり、各壁面の高さを水平に近い状態で積むことで、各壁面の連動性を高めている。

第II工程では、玄室腰石の上に石材を積み上げるとともに、前室と羨道の天井石を架構する。玄室腰石上の石材は腰石上端よりも内側に飛び出すように積まれており、「持ち送り」がなされている。この側壁の持ち送りは、上部の石材を階段状にせり出すように積む構築方法だけでなく、石材の裏込部分に意図的に小石材をかませることで、石材自体を内側に傾斜させる構築方法を組み合わせて用いる。また、石材自体を不安定な位置で傾斜をつけることから、石材の噛み合せだけでなく、墓壙との間に土砂を充填する「裏込め」も用いている。この側壁の持ち送りと連動して、前室と羨道の天井石を架構する。前室天井は、実質的には玄門門柱石と前門門柱石にそれぞれ載せられた眉石で構成される。眉石同士の隙間には小石材を上から落とし込むことで、隙間を充填する。羨道天井石はもともと1石のみで構成される。第II工程で積まれた石材の上面の高さは、墓壙の高さとほぼ同じであり、墓壙の掘削深度が前室・羨道天井石や側壁の積み上げ作業と連動していることが分かる。

第III工程では、玄室壁面の上部を完成させる。各壁面は大別して二つの小工程(III-1・III-2)に分かれしており、それぞれが高さを揃えて積み上げられていることが分かる。この作業の連動には、具体的には「力石」が利用されており、各壁面を相互に噛み合わせるように積む。また、各作業単位は水平方向を意図するものの、左側壁では斜め積みが用いられており、作業単位が若干傾斜する。この第III工程でも、第II工程と同様に持ち送りが継続しており、各作業単位に連動して裏込めがなされる。第III工程での石室裏込めはすでに墓壙上面よりも高い位置にあるため、墳丘盛土に類似した状態で積まれている。石室裏込めと墳丘盛土との差異点は、土留意識の有無にあり、墳丘盛土に見られる「土塊・土手」が確認できない点に特徴がある。ただし、石室開口側のみは前室天井石(前門眉石)上に石列を配して、土留に用いている。この石列による土留は軟質安山岩を主体とするが、一部にやや大型の花崗岩も用いており、石室構築の過程で不要となった石材を利用する。

第IV工程では、玄室天井石を架構する。玄室天井石は1枚の大型花崗岩の板石で構成される。この玄室天井石は、第I～III工程で積み上げられた石室裏込めを土台にし、そこから引き上げて架構する。石室裏込めは墳丘北東側の傾斜が緩く、かつ厚く積み上げられていることから、天井石の引き上げは墳丘北東側からなされた可能性が高い。また、墳丘北西側の裏込め上には土留や裏込めにも利用されていない石材が墳丘盛土に被覆される状態で複数埋没しており、玄室上部壁面を構築する際に集積された石材のうち不要になったものが、そのまま残されている。

第V工程では、石室床面を整える。本石室の床面には玄室奥壁付近から羨道まで排水溝が掘削されている。排水溝は石室のほぼ中心軸を通ることから、石室完成後に掘削された可能性が高い。この排水溝は扁平な板状石材を用いて蓋をされている。排水溝上に蓋石を設置した後に、玄室と前室に敷石を敷設する。ただし、玄門と前門部分では、排水溝の上に直接「框石」を置いている。玄門



第70図 皿山古墳群 I-1号墳の横穴式石室築造過程

の框石は3石、前門の框石は1石で構成される。

以上が石室の構築状況である。ここで改めて、材料の入手と石室構築過程の復元から、石室裏込めと石材の集積状況についての見解を整理する。

石室裏込めの土質を見ると、墳丘下の基盤層に対応して、東西で明瞭に土質が異なることが分かる。これは古墳中心に断層が走ることに原因があるが、掘削し二次的に埋没させた土砂にも土質の違いが東西で反映されている点は重要である。つまり、掘削地点と盛土地点が近接すると判断でき、墓壙で掘削した土砂は1箇所にまとめられたのではなく、墓壙の周囲に環状に積み上げていたことを示す。この墓壙周囲の環状集積土を石室裏込めに利用したと考えられる。

次に石材の集積状況を整理する。石室に用いる石材(安山岩)は基本的に墓域の周囲で入手するが、天井石や腰石に用いる大型石材(花崗岩)は、墓域外から輸送している。この墓域外からの輸送の際には、あらかじめ用途に応じた形状・大きさの石材を選定し、その輸送量を少なくしていたと考えられる。ただし、墳丘内列石(土留)や裏込めの一部にも、わざわざ輸送してきた花崗岩が利用されていることから、その選定は厳密なものではなく、おおよその設計に基づくと思われる。つまり、横穴式石室に用いる石材は、設計に応じて石材の選定がなされるが、結果的に不要となる石材も含めて、石室構築以前に材料となる石材を集積させていたと結論づけられる。皿山I区1号墳石室の構築では、墓壙周囲や裏込め上に仮置きした集積石材を実際の石材積み上げに応じて、形状に合うものを適宜選択したと考えられる。

②山国川流域の横穴式石室

山国川流域の横穴式石室の構築過程は、上述した皿山I区1号墳の石室構築過程と基本的に類似するものである。ただし、石室平面形態と腰石用石方法に着目すれば、本地域には二系統の石室構築技術が存在していることが分かる。^{註1}以下では、各系統の差異点に要点を絞って、その特徴を説明する。

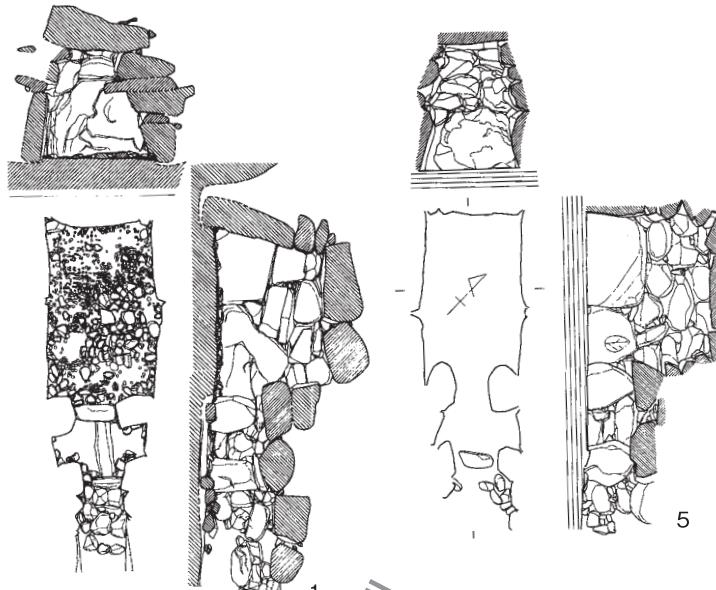
一つ目の系統は、上の熊1号墳や穴ヶ葉山3号墳を指標とする横穴式石室で、側壁の腰石を横位で用いる。石室平面形態は両袖单室短羨道I類・両袖複室・両袖单室長羨道II類を軸とする。本節では便宜上、「上の熊型」と仮称するが、いわゆる『九州型石室』の典型的な事例と言えよう。

二つ目の系統は、穴ヶ葉山南1～4号墳、穴ヶ葉山2・4号墳、下野地2号墳を指標とする横穴式石室で、側壁の腰石を縦位で用いる。石室平面形態は両袖单室長羨道I類を軸とする。本系統の石室は後述するように、上毛郡を中心に豊前南部で地域的まとまりをもって分布するため、「上毛型」と設定する。『畿内系石室』に連なる石室系統である。

次に山国川流域での両系統の存続期間を整理する。上の熊型はIII期（6世紀第3四半期）に出現し、V期（7世紀中頃）まで存続する。上毛型は、IVA期（6世紀第4四半期）に出現し、VI期（7世紀後半）まで存続する。つまり、上毛型は上の熊型よりも後出し、その点において両石室構築技術には時間差がある。ただし、上毛型が出現した後も上の熊型は存続しており、出現期（6世紀第3四半期）を除く期間は、同一地域内で同時並存する関係にある。

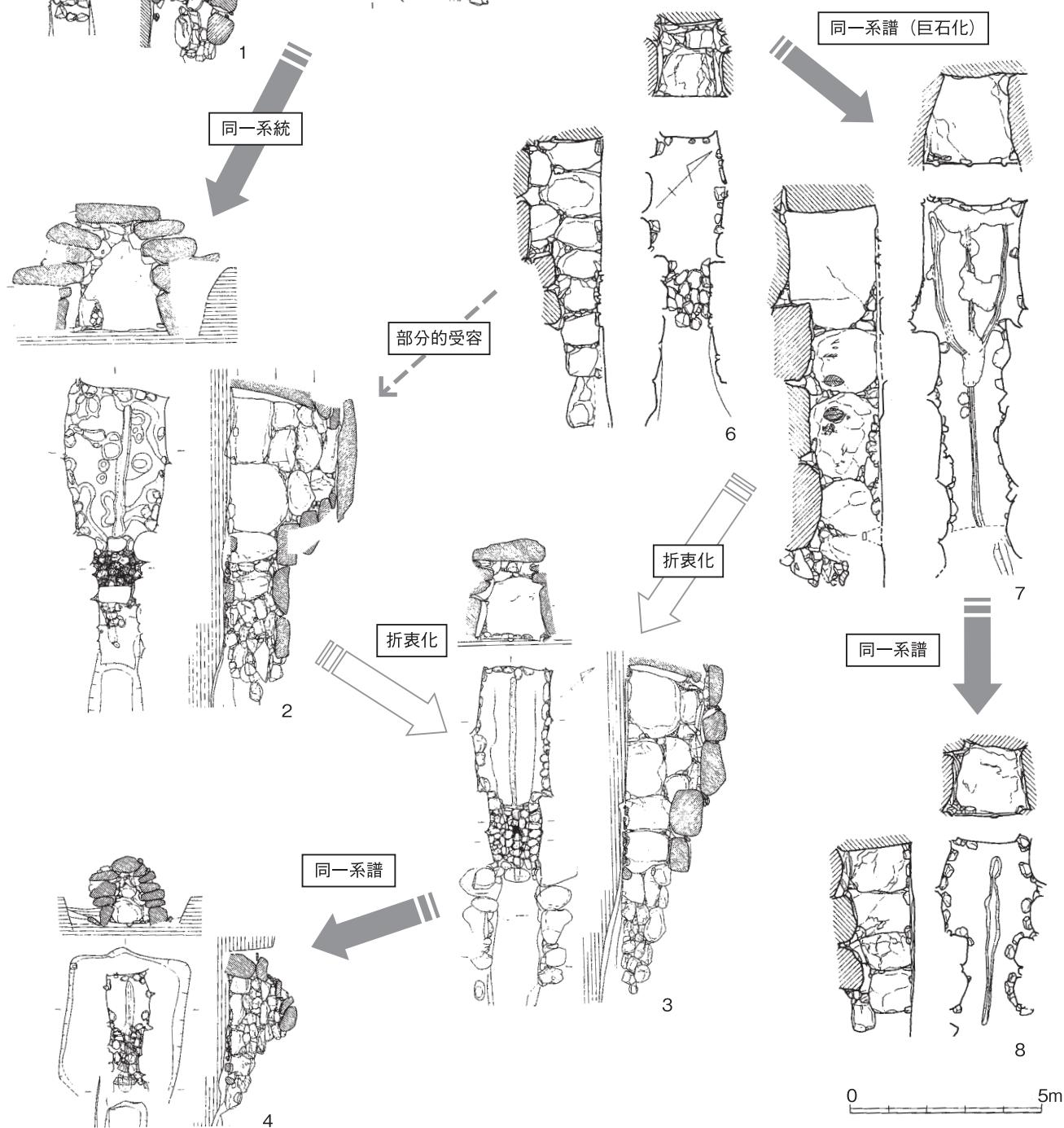
最後に石室空間の利用方法に触れておく。上の熊型は出現期の両袖单室短羨道I類を除くと、前室空間の創出を石室平面形態の基軸としており、「前室」を利用した副葬空間が確認できる。これに対し、上毛型は両袖单室長羨道I類を石室平面形態の基軸にしており、前室空間自体は創出しないが、玄門と閉塞との間に空間を設ける。したがって、上の熊型と上毛型は石室構造自体に違いはない。

上の熊型【九州型石室】



- 1 上の熊1号墳
- 2 皿山I区1号墳
- 3 皿山I区2号墳
- 4 皿山I区3号墳
- 5 穴ヶ葉山3号墳
- 6 穴ヶ葉山4号墳
- 7 穴ヶ葉山1号墳
- 8 穴ヶ葉山南3号墳

上毛型【畿内系石室】



第71図 山国川流域の横穴式石室の変遷

あるものの、その石室空間は類似したものとなる。この点は重要で、石室構築技術の系統差を超えた石室空間の類似は、本地域の複室石室の展開におおきな影響を与えていた。山国川流域で明確な複室を創出する横穴式石室は、上の熊1号墳や穴ヶ葉山3号墳等の限られた存在となる。後続する上^{註3}の熊型では、形骸化した両袖複室石室や両袖单室長羨道II式の石室平面形態を採用しており、副葬空間の創出には固執するものの、上毛型との石室立面・平面での違いはゆるやかに減少していく。複室石室の数量とその形骸化の過程は、山国川流域の横穴式石室の特色の一つであり、豊前北部の曾根・京都平野や田川盆地とは異なる地域性を見せる。

③皿山古墳群の横穴式石室の位置づけ

本古墳群の築造契機となる皿山I区1号墳は、上の熊型に連なる横穴式石室であり、型式学的に見て、上の熊1号墳や穴ヶ葉山3号墳に後出する。I区1号墳に後続するI区2・4号墳では前室は完全に形骸化し、石室立面・平面での空間創出はもはや見られない。わずかに玄門袖石とならぶ前門袖石状の腰石（縦位）と平面形態のわずかな傾きに複室の名残がある。I区では、終末期古墳に位置づけられる3号墳まで、一貫して上の熊型の石室構築技術を踏襲する。

谷を挟んだIII区では、I区1号墳よりもやや新しい時期の上の熊型石室がIII区1号墳で見られるが、後続するIII区2号墳では上毛型石室へと石室構築技術が移行している。このように同一墓域内で石室構築技術が変化する事例には、近隣の穴ヶ葉山古墳群で見られる。穴ヶ葉山古墳群の主墳となる穴ヶ葉山1号墳は、上毛型の石室構築技術を基に巨石化した事例であり、多くの人員を動員した本古墳群の造営も上毛型の石室構築技術を拡散させる一つの要因となったと考えられる。なお、穴ヶ葉山古墳群では、系統が異なる上の熊型と上毛型の横穴式石室で同じ「木の葉」をモチーフとした線刻壁画が描かれており、同じ造墓集団に異なる石室構築技術が流入していたことを裏付ける。同一集団内に内包される複数系統の石室構築技術がどのように発現するかは、地域性としてまとめられる共通要因を孕みつつも、各古墳の造営集団の判断に委ねられていた。皿山古墳群I区では、「前室を排した羨道での空間確保」という石室構造の地域性に属しつつも、古相の石室構築技術となる上の熊型の要素を終末期古墳の築造まで発現し続ける状況にある。

（小嶋）

【参考文献】

小嶋篤2012「墓制と領域」『九州歴史資料館研究論集』39九州歴史資料館

【註】

1：筆者は『九州型石室』に内包される横穴式石室の地域性を把握するには、「石室構築技術に基づく分類」と「石室平面形態に基づく分類」を組み合わせて用いるべきと考えている（小嶋2012）。

2：本節で用いる「石室平面形態に基づく分類」は小嶋2012に詳述している。本節に関わる類例の概略を以下に記す。

両袖单室短羨道I類：玄門外側に短い羨道が接続する横穴式石室。

両袖单室長羨道I類：玄門外側に長い羨道が接続する横穴式石室で、床面に羨道仕切り石を敷設しない。

両袖单室長羨道II類：玄門外側に長い羨道が接続する横穴式石室で、羨道中央付近に仕切り石を敷設し、「前室的空間」を確保する。

両袖複室：玄室と羨道の間に「前室」をつくる横穴式石室。

3：既刊行の発掘調査報告書に基づく検討であり、今後の調査で事例は増加すると思われるが、体勢的な比率に大きな変動はないだろう。

ii) 皿山古墳群 I 区 1号墳の墳丘構築について

皿山古墳群 I 区では計5基の古墳の調査を行ったが、注目されるのが墳丘盛土の構築技術である。特に最大規模の1号墳では構築工程が明瞭に観察でき、土手や土塊、石材を使用するなど特筆すべき点がある。ここでは、盛土構築工程と使用された技術について、既述の報告を補いながら若干の考察を加えたい。また今回は、佐賀大学低平地沿岸海域研究センターの末次大輔准教授のご厚意により、墳丘土壤の粒度を分析いただき寄稿していただいている。この結果も含めて検討したい。

墳丘構築工程

1号墳の墳丘規模は東西21m、南北22mを測り、高さは地山整形面から北東-南西方向で約4m、北西-南東方向で3.5~5.5m、最頂部で主体部床面から約5.3mを測る。立地面が北西から南東に傾斜することから盛土の高さは各所で異なる。盛土に使用される土壤の主体は地山の赤褐色粘質土である。その他、灰色系砂質土や硬質の黒灰色土、茶色土などが多用される。また、墳丘下に走る断層から南側では地山が軟質の安山岩を含む赤茶褐色粘質土で、墳丘下位には一部これが使用される。その使用土量から考えて、構築前の整地及び周溝掘削時の廃土を使用したものであろう。なお赤褐色粘質土は粘性・純度の高いもの（以後「赤褐色粘質土 1」）、灰色砂質土の混入するやや粘性の低いもの（以後「赤褐色粘質土 2」）があり、前者は石室裏込や天井部付近、最外面など浸水を最も嫌う部分に多用される。また、調査区内表層にはない砂質の灰色系土も多用されるが、数m下層に複数層の砂質土の堆積を確認しており、これらが表層にある近隣から採取された可能性が高い。もう1種類特徴的な土壤は非常に硬質の黒灰色土である。下層を含丘陵構成層ではなく、少量を要所に使用していることから、特別に他所から持ち込まれたか、何らかの成分を混和させて作った土壤であることも考えられる。いずれにせよ特別な土壤である。

調査時の観察から、墳丘構築方法は大きく8つの工程に分けられる（第72図）。

第1工程：整地（表土除去、地山の平坦化、部分的に僅かな盛土）

第2工程：石室掘方の掘削

第3工程：石室の構築とこれに伴う盛土

第4工程：石室全体を被覆する盛土【1次墳丘の完成】

第5工程：1次墳丘外側の押え盛土（土手使用）

第6工程：1次墳丘を被覆する盛土①（土手使用）

第7工程：1次墳丘を被覆する盛土②（土手・土塊・列石使用）【2次墳丘の完成】

第8工程：2次墳丘を赤褐色粘質土で被覆する盛土

報告の中でも各工程について述べたが、詳細を補完しながら各工程について記述する。

第1工程 旧表土は残らないが直下に弥生時代の遺構や包含層が残存しており、大規模な掘削はせずに凹凸をならすような整地と小規模の盛土を行う。2~4号墳にも認められる

第2工程 玄室から羨道部までの掘方を一気に掘りあげるが、2号墳下の石室掘方状遺構の検出状況から、石室床面部分は一定の高まりを残し、石材設置部分のみを深く掘削すると考えられる。

第3工程 石材を堀方内に設置しながら石室裏込を埋め固める。埋土は赤褐色粘質土1が中心で、各土層は水平積みで整地レベルまで埋めて一旦平坦面を造り、再度側石石材持ち送りながら固める。最後に天井石を架構し、1~2cm単位の赤褐色粘質土1と砂質灰色土の細かい互層で版築状に締め固め、最終段階は硬質の黒灰色土で被覆する。石室崩落と遮水のために特に堅固に締め固めたと思